

文久元年 (1861)

- 軍制改革令
- 改正御軍賦
- 私領軍賦
- 〔諸郷軍賦〕
- 備立略図
- 以上四條〔五〕

目録

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
（紙数六十八枚）の記載あり〕

忠義公史料

文久元年
市來四郎編

〔表紙〕

四八四 軍制改革令

四八四ノ一 〔マメ〕

辛酉十二月 日軍制改革ニ付テ、意見上申スヘキ旨、

左之御親書ヲ以テ令セラレタリ、

軍政治定之儀、国家之大事ニテ、〔寄與〕金剛定院様

院様御深意被為 在、〔寄彰〕順聖

御三代様旧ニ基キ和・漢・蘭之法ヲ折衷シ、此度規格

被召居候得共、時世人情ニ応シ、変革不致候テ不相叶

場モ可有之、尤モ今之世態別テ急務ト深令心配候間、

各中ハ勿論諸役人諸士一同存寄之趣、急々可申出旨可

申渡事、

十二月

四八四ノ一

御親書ニ対シ、御家老添書左ノ如シ、

御軍役之儀ハ

皇国保護之

御重務ニテ、近頃

御両殿様別テ

御配慮被遊、御全備度 御趣意ニ候得共、良善ニ至兼

候処、猶又今般深以 思召、古来ノ御作法基本ニテ、

當時ノ実要相応ノ御軍賦被相定候得共、兵制機械ハ第一時勢ノ変革ニ従ヒ、一定ノ法ニ不相泥、取捨勿論之事候条、後年ニ至リ不触御趣意様、無緩疎可致取扱事、

文久元年酉十二月

御軍役方

御家老座印

四八五 改正御軍賦

七陣

七陣ハ御旗本ノ一陣ニシテ、御出馬ノ御備是ニ限訳無之候得共、七陣ノ名ハ古ノ六花ノ法ニ符合シ、攻守両全ノ良制ナリ、七陣ハ先陣・左右陣・旗本陣・後陣・遊陣・小荷駄陣ニテ、戦法ハ变化無究事ニ候得共、先ツ各其名ニ従ヒ、左ノ勳前固存スヘシ、

先陣

各陣進止シテ、死ニ至迄我請持ノ場ニテ相働候事ハ、右節制ノ兵ノ定法ナレトモ、別テ先陣ノ儀ハ患ヲ他陣ニ残サス、如何ナル大敵モ我一手ヲ以テ切崩シ、不然而戦死ノ格護タルヘシ、故ニ武勇ヲ励ムノ将吏、大ニ

先陣ノ任ヲ蒙ル事ヲ榮トスル処ナリ、必死ニ究シ智將ハ心静ニ節制ヲ正シ、其機ニ至テ一時ノ賊ヲ切崩ノ心得アルヘシ、

左右陣

掛リ軍ノ時先陣ノ合戦不振立カ、無左共左右ヨリ一時ニ張出シ、矢比近ク押寄テ、初ニ銃砲ヲ以テ一時ニ敵ヲ鏖ニスルヲ主トス、又待軍ノ時ハ旗本ノ左右ニ在テ、救応ヲ主トスル事モアルヘシ、

旗本陣

総陣接戦ニ及ヒ候トモ、尚総緒ノ要成ハ勿論ナレトモ、或ハ諸陣ノ戦牛角ナルヲ見テハ、主將ノ手廻ニテ張出ス所謂中堅ノ備ニテ、銃砲精練勇將剛卒ヲ扱テ、御床机涯ハ勿論、前後左右六隊ヲモ備ヘシ、

後陣

他ノ陣隊、旗本迄総掛リニ成リテ戦トモ、敢テ動揺スル事ナク、備ヲ立テ堅メ、十全ノ見切有之、外ニ合戦ノ跡ヲトチメ、若シ味方敗走トナラハ、一陣ニテ守返シ受留、或ハ殿トナル勝軍ノ後ナレハ、前後勞佚ノ備ヲ繰替、先陣トナス故、銃砲全備シテ先陣ニ異ナル事ナシ、

遊陣

遊陣ハ水ノ方円ノ器ニ随フ如ク、備所ヲ不定総勢ノ先トナリ、或ハ守衛トナル事モアルヘシ、敵地行軍先陣ヨリ先ニ発シ、危キ地或ハ川渡等ハ、路ノ傍ニ敵ニ備テ総勢ヲ無難通行サセ、或ハ營舎繰出シ繰込ミノ節モ、総勢出入ノ混雜相濟迄ノ間、先傍ノ利地ニ扣へ、敵前ニテ備配小屋取等ノ節モ、此一陣丈ハ敵ニ戦スルノ受手トナリ、静ニ諸陣隊ニ手配ヲナサシメ、接戦ノ時ハ先手戦争ノ央意外ノ方ニ発出シ、賊ノ横後陣ヲ襲フ事モアリ、或ハ戦ノ初メ銃砲ヲ拙ク発シ、態ト敗走シテ敵ヲ近々ト引受、一時ニ先陣ノ大砲ニ引掛、塵ニスルノ術アルヘシ、

小荷駄陣

荷物組総物主ノ一陣、兼テ荷物守衛ノ名目ニテ、行軍陣共ニ荷物組ノ脇ニ備ヲ立ルナリ、接戦場ニ於テ可成荷物組ハ味方或守兵ニ不及、利地ニ扣サセ、戦争ニ加リ、血戦シテ七陣都合ノ働ヲ遂ル賦ナレトモ、右様ノ利地之レ無ハ、此陣計リ守兵トナリ兵糧器械奪レサルノ備肝要タルヘシ、若シ味方敗走及詮方ナキ時ハ、速ニ荷物組自國ニ差返シ、夫レモ念ツカワシキ御ハ一時

ニ焼捨、我一陣ニテ死戦ヲ遂ル心得タル可シ、故ニ銃砲ノ手配諸陣ニ同シ、

自國行軍・他領行軍・危地行軍・敵地行軍・舟渡着陣並ニ一陣繰出

一御出馬並ニ御名代相究候ハ、御城下諸郷遠近ノ旅便ニ、兼テ各定ノ會軍場ニ幾日何時出揃可ク旨、御陣觸有之、御城下当番ノ人数・鉄砲・要具・干飯相携、荷物ヲ人馬方へ出ス、各兼テ定ノ會軍場ニテ到着相付、行軍ノ御条書有之、前後ノ列ヲ乱サス繰出ス、一番ニ大砲隊、次ニ御右銃隊一組、次ニ御床机廻、次ニ御左銃隊一組、次ニ御跡銃隊二組、次ニ小荷駄惣物主、次ニ御荷物並ニ諸人荷物宰領人馬、以上御城下ヨリ当日御行列ニ相付出立、

御立ニ先立、諸郷ノ地頭・物主等当番ノ面々ハ、手廻リ計リニテ諸郷ニ差越シ、其郷ノ人数引連レ、追々御備ニ出會、壁ハ出水口、御出馬ニハ伊集院ヨリ出水迄、御通り筋ノ郷ハ其郷々ニ奉待上候テ、御先備ト成リ、伊作ヨリ加世田方迄御左備、大口辺、東郷・中郷、邊ハ御右備、谷山ヨリ指宿・川邊等ハ御跡備、吉田・蒲生辺ハ遊兵備ト成り、國分辺ハ小荷駄ニ相付候如キ

ヲ以テ、各兼テ遠近ノ路程ヲ計リ、出水会軍場ニテ一時ニ出揃候御手當ニテ、出水ヨリ先キニ一手ニ分レ、一手ハ陸路人馬並ニ泊ノ駅々兵糧・手當頼置、小倉ニ至、箱崎集下ノ關・小倉等ニテ舟手當迄兼ル、一手ハ串木野・久見崎・阿久根・米ノ津等ニテ舟都合住吉迄ニテ、夫ヨリ陸地ノ手當有ルヘシ（寶カ）、味方路行軍ハ一隊ツ、真先キニ旗ノ間一木ツ、一隊々々ノ間配トシ、少ツ、引明ケ、又一隊ヲ（オスカ）、大抵一陣ニ及ヒ候程ヲ一シキリトシ、人馬無滞程ノ間ヲ置キ、又一シキリヲ押ス、昼飯ノ場物主ノ目ヲ合図ニ諸勢折敷タル時、其所ヨリ湯水ヲ出シ候ヘハ、仕舞次第御先手ノ物主見計リ、太鼓ノ役ヘ太鼓ヲ打セ候儀ヲ合図ニ、本ノ如ク行軍トナル、泊ノ宿ニテモ着次第貝吹候時、順成ニ折敷、地頭飯屋ヲ

御本陣、麓・野町最寄ヲ分テ止宿、尤モ前以テ普請奉行組々ヨリ割出ノ人数連越、宿割ヲ定メテ標札ヲ立置キ、其郷ニハ非番兵士ノ面々繰廻シ、什伍相組、内外ノ夜廻リ可相勤、出水口或ハ

御乗船ノ場所迄、毎日如斯他国行軍ニ候ヘハ、無念遣所ハ兵糧方・普請方駅々ニ踏越シ、

御本陣其外平常ニ同シ、

但上下百人位宛繰廻シ、夜廻可相勤士六拾人、什長

六人ヲ三ツニ分ケ、一ツハ物主頭取・什長ノ御本陣ノ御玄關辺へ相詰、一ツハ什長二人・士武拾人

宿内ヲ行廻ル、一ハ什長二人・士武拾人ニテ宿外

一里内外ヲ行廻リ、互ニ交代スヘシ、

一 小荷駄式拾貫目宛ノ賦ニ候ヘトモ、勞スル者ハ荷上ニ乗候事御免アルヘシ、鉄砲ハ雷帽銃並ニ大砲ヲ御行列ノ前後ニ立、何時モ打発ノ用意可有之、

但他領ニハ何方進モ前以テヨリ、遠近・險易・広狭・

死生ノ地形・人勢多少得ト探索成シ置ヘシ、

一 或ハ敵領等危地行軍ハ、兼テ五間ヲ巧ニ用テ、前以テヨリ万事巨細ニ聞取候上ナレハ、数里外ノ敵情ハ固ヨリ計知処ナレトモ、御先手ヨリ使番、御旗本ヨリ御使番ノ内、為物馴斥候ヲ出シ、大事ノ利地ハ諸陣繰廻シ、一隊百人位諸所ニ五人・二三人宛待受ノ兵トナリ、総勢行過テ後我隊ニ馳付ヘシ、其時ハ大抵七陣揃ノ上成レハ、一番遊兵備・二番御先備・三番御右備・四番御旗本備・五番御左備・六番小荷駄備並ニ荷物組・七番御跡備、一陣ニテハ一番大砲隊、次ニ銃隊二組、次ニ

親軍隊、次ニ銃隊二組、一隊々々真先ニ旗昇ヲ押立、次ニ什長、次ニ戦兵は狭ニ隨ヒ、三行トナル、次ニ員・太鼓、次ニ物主手廻、徐・破・急ノ鼓調ニ旗ノ遅速ヲナシ、兵士ハ足並ヲ揃ヘ川渡リ、或ハ險地ニ掛テハ遊兵備先立テ利地ニ備ヲ立テ、直ニ戦争ノ用意ヲナシ、舟渡シ又ハ乗スヘシ脱九船場等ハ、遊兵利地ニ備ヲ立、総勢乗仕舞テ後乗船シ、上陸ノ場ニ先立テ利地ニ備ヲ立待也、昼夜止宿ノ場ハ、着陣発足共ニ、先ツ遊兵ハ利地ニ備ヲ立布ヘシ、寺院或ハ着宿ノ時ハ、先陣ヨリ着次第ニ折敷、一勢ツ、繰入ル、夫ヨリ先キ遊兵備ヲ立配ル時分、普請奉行諸陣割出シノ人夫ヲ連越シ、丁寧ニ諭シ、或ハ金ヲ与ヘテ人ヲ払ヒ、又ハ火用心其外構ヘノ悪キ場所ハ取壊シ、或ハ仮垣ヲ結、諸陣ノ目印ヲ立、本陣ニ届ケ申出タルトキ、一勢宛繰入り、後ニ遊兵備モ繰入ル、此等ノ節ハ大抵出立日出、着宿七時ヲ限ルヘシ、此時ノ夜廻リノ次第、前ニ同シ、

一 翌朝彦番太鼓ニテ身仕舞、二番ニテ食事、三番ニテ戎服、四番ニテ御条書、五番ニテ遊兵備繰出シ、六番ニテ先陣云々ト如前通行、

右様ノ節ハ、人馬・兵粮等ヨリ先ニ不通候テ不叶事故、

舟運出来候所、兼テ能々人ヲ用置クヘシ。若シ又無懸野陣ノ砌ハ、遊兵備先立テ利地ニ接戦ノ備立タルトキ、小荷駄備モ備ヲ立、普請奉行組々ヨリ割出シノ士卒・主取・夫丸並ニ諸士ノ從卒引連レ、布屋ヲ張り在家ヲ壞チ来リ、或ハ竹木ヲ切り、仮ニ四方ニ垣ヲ結ヒ、地形ニ随テ小屋掛相濟、各標札立終ルトキ、先陣ヨリ次第二繰入ル、

但敵ノ大軍ニ近付候トキハ、作法又々此ノ式ニ從フ

可シ、

在陣

一陣中ノ規則ハ兼テ教戦ニ馴置処候ヘトモ、今又之ヲ詳ニス、先着陣ニテ諸隊各小屋々々入り込候ヘトモ、小荷駄方ヨリ荷物ヲ渡シ、食事相仕舞候時分、直ニ物主ヨリ陣中御条書ヲ弘ム、夕方ニ至リ 御本陣ヨリ其夜ノ相詞ヲ封シ、総物主ヘ相渡ス、自ラ五通ヲ写シ、封シテ物主ニ渡ス、物主六人ノ什長ヲ呼テ、窃ニ是ヲ達スレハ、夫ヨリ伍長総勢ニ渡ル、其時夜宮勤番ノ士ヲ出ス事左ノ通、

着陣即夜御先備ヨリ一隊上下百人、

内

一御本陣番士拾人、什長一人、物主一人、手廻、相添、昇壺本持
足輕一人、昇預一人、

一陣内夜廻士式拾人、什長三人、談合役一人、從卒式人、

夫卒式人二手二分レテ常ニ往来シ、御本營詰門番所ノ
人数ト一時交替、門番所士拾人、什長一人、夫卒一人、
夜廻人数ノ分ハ火消役差引ヲ兼、

但火消役ノ儀ハ、普請奉行入夫引連レ、請持ノ賦ニ
候ヘトモ、当番ノ夜廻ハ兼テ心ヲ用ヘシ、

一外間陰伏ニ士式拾人、什長一人、夫一人、

一夫ヨリ御右備御旗本ト須ク二時ニ交代ス、委細教戦ノ
部ニ詳カナリ、着陣諸陣繰廻シ、一隊宛夜打ノ当番可
有之、何時モ敵方ニ変事到来、夜打ノ勝利見切コレ有
ルニ於テハ、

御本陣ノ令ニ随ヒ、速ニ発軍ニ先手ナシタマフ可キ間、
陣中ニテ其当番ノ一隊ハ、中ニモ手早ク出立ノ用意可
有之、若シ敵方ヨリ夜打掛来たらハ、尚以テ幸ナレハ
速ニ救心シ、或ハ中途ニ逆寄、陰伏ノ手当可有事左ノ
如シ、

着陣即夜

御旗本備ヨリ 一隊

二日夜

御左備ヨリ

一隊

三日夜

御跡備ヨリ

一隊

四日夜

遊兵備ヨリ

一隊

五日夜

小荷駄備ヨリ

一隊

六日夜

御先備ヨリ

一隊

七日夜

御右備ヨリ

一隊

八日夜

御旗本備ヨリ

一隊

一御本營ニ御軍役奉行・御軍賦役一人宛、御眼代トシテ
御側役一人、次ニ御目付兩人、御使番兩人、御軍役方・
御家老座書役兩人相詰ル、尤モ大事ノ評議有之節ハ、
御出座或ハ御家老出席モ可有之、右詰ノ人数手廻ハ下
ノ番所ヘ扣ヘサスヘシ、

一營門其外陣々出入ノ事、御軍役奉行・御軍賦役・御目

付・其外一組ノ人数引連候テ通行致者、或ハ御下知ノ小指持參ノ者ハ何時モ可差通、

一諸士足輕・從卒・夫丸、伍人什人相揃サレハ、役所免札無之者差通スヘカラス、

一役所ヘ免札差出候時、送り貝ヲ吹キ、其人数門ニ至リ候節、迎ヘ貝ヲ吹キ、其人数帰着ノ節、門外ニテ送り貝ヲ吹キ、役所ニ免札持參ノ時迎ヘ貝ヲ吹ク、

一他國ノ使者ハ屯人タリトモ門番所前ニ扣サセ、子細承届役所ニ告候トキ、使者ノ輕重ニ依リ 御本宮ヨリ出

迎ヒ用事相弁、或ハ贈答品取替シ、他國ノ者ハ屯人タリトモ陣中ニ入ルヘカラス、

一夜中燈火相用ヒス、暗処ニテ内外相伺フヘシ、但急事ノ為メ燈火ノ用意、

一水汲・薪取ハ小荷駄人夫並ニ諸士ノ從卒繰廻シ、夫屯人ニ小荷駄方足輕兩人ツ、銃ヲ携ヘ、宰領足輕屯人、

士屯人ツ、兵糧方ヨリ相付、何レモ役所ニ申出、人数丈免札ヲ請取出スヘシ、若シ敵地念遣敷場所ニハ、遊

兵備又御跡備ノ中ヨリ一隊、或ハ一備宰領利地ニ備ヲ立堅メ候テ、用事相弁スヘシ、

一合戦無之時ト雖トモ、士氣ヲ養フ為メニ、

御本宮ノ一番太鼓ニテ身仕舞、二番ニテ食事兵糧方ハ一番太鼓ニ起キ直ニ飯炊キ調ヘ、各陣、直ニ飯炊キ調ヘ、各陣ノ夫・足輕等ノ相滅ス三番ニテ戎装相整ヘ、四番ニテ各陣

前ニ折シキ、其時御先手使番 御旗本・御使番式騎斥候ニ出乘通りタル時、物主ヨリ接戦ノ御条書有之、五

番ニテ遊兵備營門ヲ繰出シ、利地ニ備ヲ立敷、六番ニテ御先備ヨリ順々繰出小荷駄備ヘ、御跡備迄出終ル時敵跡ニ殘ルノ方ニ向ヒ、御先備ヨリ大砲ニ發ヲ放ツニ、小荷駄備

ノ貝ノ役門番所ニ出寄セ、貝ヲ吹、此時御跡備ヨリ一備ツ、繰入、御先備迄繰込終ル時、陣中御条書有之、

但雨中又時宜次第ニハ取止之事、

接戦並ニ凱旋

一敵味方陣ヲ取敷程ノ場所ハ、地形ニ依テ不同可有之候ヘトモ、先ツ左右狭隘ノ地ニ有之間敷候得共、着場ヨ

リ直ニ攻撃ニ及モ、陣中ヨリ繰出モ、御先備、御旗本ヨリ斥候御先手御旗本ノ外、斥候ヲ出スヘカラスヲ出ス、乗通ル時総勢ヲ折シカセ、接戦ノ御条書有之時宜ニ依リ弘メニ及ス、

御旗本ヨリ令有リ、御先備ノ大砲ニ發ヲ放ツ合図ニ、先陣ヨリ次第ニ旗・鼓ノ調子ニ從テ、隊伍ノ列ヲ乱サ

ス、敵方ニ押行、既ニ大砲ノ発節能キ丁合迄繰詰タル時、御先備ノ手先ヨリ昇ヲ振り候ヲ合図ニ、繰打ノ用

意ヲ為ス、夫ヨリ左右御備、御旗本・御跡・遊兵備、或ハ小荷駄備迄各詰寄、地形ニ從ヒ奇正・救応・遠近ニ備ヲ立配、各折シキタル時御旗本ヨリ御旗ヲ揺シ、曳王ノ鬨ヲ發ス、諸陣何レモ如斯、鬨ノ声静リテ旗・昇ヲ地ニ伏セ、諸陣各四五間計進寄り折シキ、其時御先手ノ大砲隊物主、遠近ノ目当ヲ下知シテ大砲ヲ打出ス、御左備ノ大砲隊其左ニ張出、御右備ノ大砲隊其右ニ張出シ、各敵敷打込、敵味方互ノ砲煙黒雲ノ如クナル、直チニ大砲ニ無間断玉込シテ進ミ出、折立ル塩合ニ、次ニ備シ銃隊、煙ノ中ヨリ左右ニ抜ケ、敵陣近ク進ミ寄り、折シク処ニ合鬨ニ從ヒ、無間断敵中ニ打込ミ、詰ノ一放ヨリ銃ヲ擲捨、腰刀ヲ抜テ切込ミ、一挙ニ敵營ヲ破ルヘシ、

一此等ノ戰勢ニテ敵營未タ動揺セサレハ、御跡備・遊兵備ノ間ヨリ、速ニ利地ニ張出シ、敵ノ左右旗本前後ニ目掛、無透間大砲ヲ打込ヘシ、夫レテモ剛敵ニテ、戰未牛角ナレハ、御旗本ヲ押出シ、無ニ無三ニ打破ルヘシ、又味方待戰敵寄セ来ル時ハ、譬ヘ大砲発節ノ丁數ニ至リ、彼ヨリ數發ヲ放掛候トモ持對ヘ折敷、銃發ノ間節ニ至ラントスル頃、一時ニ打抽キ、或ハ銃發シテ、

大砲ヲ左右ニ分チ放ツ事教戰ノ如シ、抑接戰ノ法、形勢万緒一二説ノ尽ス処ニ無之候ヘトモ、先ツ大抵如此、尚ホ變化敵ヲ制スルニ至テハ、分數勢節成否ノ深ニ出テ、無究ノ勝利ヲ制ス可シ、

帰陣

一敵ノ陣隊既ニ破レテ、味方ノ諸勢兼テ定ノ追留場迄至ラントスル時、御旗本並ニ諸陣ノ惣物主ヨリ使番ヲ以テ、追留ノ令ヲ物主ヘ達スレハ、物主昇ヲ立頭ス事ヲ昇預ニ令シ、且ノ役ニ揚貝ヲ命ス、総勢什長是ヲ聞テ下知ヲ加ヘ、各旗・昇ヲ目当ニ引返ス、諸隊ノ太鼓役破ノ調子ニ太鼓ヲ打ハ、諸隊足早馳集リ、此度ハ不勞後陣ヲ先陣トシ、戰勞レタル陣隊ハ後陣ニ繰加ヘ、未戰初ノ如ク銳氣ヲ新ニス、其間ニ荷物方ヨリ普請奉行・御目附・内外ノ医者・夫丸・從卒ヲ連越シ、敵味方ノ手負・死人ヲ改メ、未息アルハ陣中ニ連掃リ、療治ヲ施シ、既ニ死タルハ敵味方ヲ分テ厚ク葬リ、其内手早ク用立候首計ヲ切取テ、御実験ニ備ヘタル時、御旗本ヨリ勝鬨ヲ揚ケ初メ、総勢一度ニ揚続ク、是ヲ勝鬨ト云フ、帰陣ノ御条書有テ、夫ヨリ陣中ニ一勢ツ、繰入ル、各帰陣トナリ、或ハ利地ニ陣所ヲ轉シ、尚敵ニ

深く攻入ル事モアルヘシ、
一戦ノ翌日、何レモ諸人ノ賞罰ヲ正シ行フヘシ、

教戦

一教戦ニ緩急大小ノ差別有之、先ツ一ヶ年ニ一度ツ、
御城下ハ(備見)吉野原等、諸郷ハ定ノ組合郷出揃ヒ、其式ヲ
ナス、私領モ同断ナリ、幾日例年ノ教戦候間、各其場
ニ可来会旨被仰渡候ハ、御閑狩ノ振合ニテ、郷々兼テ

定メノ屯場ニ相集リ、着到ヲ付ケ、行軍ノ御条書ヲ読
ミ、万事危地行軍ノ式ニテ其場ニ集ル、真先ニ旗・昇、
夜ハ高張押立、旗・昇預太鼓ノ調子ニテ遅速ヲ下知シ、
次ニ什長戦兵六拾六人、並ニ従卒・旗手ニ遅速ノ歩ヲ
同ス、次ニ貝・太鼓ノ役、次ニ物主、太鼓ニ徐・破・
急ノ下知ヲ加ヘテ押行、次ニ一隊押ス程ノ間ヲスケ、
又前ノ如クニ一隊通行ス、第一大砲隊・第二銃隊二組、

	<p>御先備</p>	
<p>御左備</p>	<p>御本旗備</p> <p><small>(御旗本カ)</small></p>	<p>御右備</p>
<p>御跡備</p>	<p>所 賭</p> <p>火薬所 荷物組 備 駒 荷 小</p>	<p>遊兵備</p>

次ニ親軍隊、次ニ銃隊二組トス、本ノマ第シテ七陣ノ法ハ、
 老番遊兵備・二番小荷駄備・三番御先備・四番御右備・
 五番御旗本備・六番御左備・七番御跡備ト定ム、夫ニ
 先立テ普請奉行諸隊ノ割出シ、上下百六拾八人、並ニ
 御床机廻・小屋掛ノ夫卒式拾人ヲ引連レ、陣々ノ幕・
 布屋・陣貝ヲ請取、教戦場ノ原野ニ行クヘシ、兵糧奉
 行・玉菓奉行モ同断、

但実場ニテハ遊兵備先立テ差越、備ヲ立テ固タル時、
 小荷駄備・物主一備警固ニテ、小荷駄組出張、七
 陣ノ法ニ從テ七所ニ幕ヲ打、布屋ヲ張ル、

一陣所ハ御旗本ヲ中央トシ、少シ引下テ荷物小屋ヲ作り、
 火葉格護所ニハ危キ方ニ土居ヲ築キ、総陣ノ四方ニ聊
 ノ垣ヲ結ヒ、陣間ニ間ノ垣ヲ結ヒ、扱行軍ノ人数昼飯
 ノ場ニテ、物主下知シテ貝ヲ吹カセ候ヲ合図ニ、行成
 ニ折敷、昼飯相仕舞、又々太鼓ニテ本ノ如クニ行軍シ、
 右ノ陣場ニ付タル時折敷カセ、陣中御条書ヲ読ム、尤
 モ先立テ備ヲ立堅メタル遊兵備モ同断相濟、御先備ヨ
 リ順陣中ニ繰入ル荷物組ハ先立テ繰入レ置キ、即終テ一陣ノ内
 並ニ戦兵拾人、什長老人、門番並ニ他国使者対面所辺

談合役老人、戦兵拾人、什長老人、夜廻リ戦兵四拾人、
 什長四人ニツニ分チ、陣ノ内外ヲ不断行廻リ、警衛ス
 ル事左ノ如シ、

御先備ノ内一組 暮六ツヨリ四ツ迄

御右備ノ内一組 四ツヨリ八ツ迄

御旗本備ノ内一組 八ツヨリ六ツ迄

御左備ノ内一組 六ツヨリ四ツ迄

御跡備ノ内一組 四ツヨリ八ツ迄

遊兵備ノ内一組 八ツヨリ六ツ迄

小荷駄備ノ内一組 六ツヨリ四ツ迄

御先備ノ内一組 四ツヨリ八ツ迄

但一陣中ニテハ(惣物主脱力)親軍隊並ニ大砲隊ヲ除キ、外四組
 ニテ繰廻シ当ル可シ、

一着陣即夜ヨリ諸陣繰廻シ、一隊ツ、夜襲ノ当番可有之、
 何時モ敵方ニ変事到来、夜打勝利見切於有之ハ、御本
 陣ノ令ニ從ヒ、速ニ発軍ノ先手成ル可間、其当番ノ一
 隊ハ中ニモ手早ク出立ノ格護之レ有ルヘシ、夜打掛事(来脱)
 尚以テ幸ヒナレハ、速ニ救応シ或ハ中途ニ待伏セ・逆
 寄セ・陰伏ノ手当有ルヘキ事左ノ如シ、

着陣即夜

- 御旗本備ヨリ 一隊
 - 二日夜
 - 御左備ヨリ 一隊
 - 三日夜
 - 御跡備ヨリ 一隊
 - 四日夜
 - 遊兵備ヨリ 一隊
 - 五日夜
 - 小荷駄備ヨリ 一隊
 - 六日夜
 - 御先備ヨリ 一隊
 - 七日夜
 - 御右備ヨリ 一隊
 - 八日夜
 - 御旗本備ヨリ 一隊
- 一御本営勤番所ノ向ニ間ノ垣ヲ結ヒ、内ニ役所ヲ立、御側役・御軍役奉行・御軍賦役・御目付、次ニ御使番出席、
- 但諸郷計ノ節ハ、総物主・年寄等出席、
- 一夕刻ニ至リ、陣々ニ相詞ヲ書キ封シ遣ス、総物主請取、

又夕封シテ物主々々ニ遣ス、物主請取付長ニ渡ス、什長請取総勢ニ達ス、翌朝曉ニ至テ、御本陣ノ一番太鼓ニテ総勢身仕舞ヲナシ、二番ニテ食事相仕舞^{兵糧方早天ヨ}ニテ、^{風ノ夫・足輕等}三番ニテ戎具相整ヘ、^{ニ持タセ相渡ス}四番ニテ各陣前ニ折敷、御先備使番・御旗本御使番二騎斥候^{御旗本並ニ先陣ノ折敷候ヲ出スヘカラス}ニ出テ、乗通ル時接戦ノ御条書有之、五番ニテ遊兵備先隊ヨリ次第ニ繰出シ、陣門ヲ出テ旗・鼓ノ調子ニテ數カ所ノ的射場ニ押向ヒ、既ニ大砲発節ノ間合ニ至リ、先隊ノ物主昇預ニ下知シテ、昇ヲ左右ニ振動スルヲ合図ニ、一隊々々一行ニ備ヲ立敷、夫々折敷タル時、御本陣ヨリ御旗ヲ動シ、闕ヲ発スルヲ合図ニ、諸陣隊何レモ闕ヲ揚ル、夫ヨリ総陣旗・昇ヲ地ニ伏セ、諸隊三四間計リモ進出折敷時、御先備ノ大砲隊四挺ヲ一声打發シ、込替ルニ残りノ四挺ヲ放ツ、互ニ如此、或ハ三四間宛モ進ミ出テ、後ニハ并テ一勢ニ放ツ、其時銃隊左右ニ張出、繰打數發ノ後ハ、鉄砲持チナカラ二三間走り寄り折敷、是殺手腰刀ノ働ニ変シタル姿ナリ、其中親軍隊或ハ後ノ兩隊モ左右ニ出テ發銃ス、御先備既ニ如此ナルニ、左右ノ御備立進ハ、御旗本ハ横入ノ姿ヲナシ、遊兵備・御跡備ハ意外ノ利地ニ張出シ、攻

敗ル姿ヲナス、既ニ諸隊モの場迄^(追カ)迫詰ル時、諸陣ノ總

物主ヨリ使番ヲ以テ、追留ノ令ヲ物主ニ達スレハ、物

主昇ヲ立顯ス事ヲ昇預ニ令シ、且ノ役ニ揚貝ヲ命ス、

總勢貝ノ音ヲ聞キ、後ヲ顧ミ旗・鼓ヲ目当ニ一勢ツ、

引立候ヘトモ、物主太鼓ノ役ニ命シテ調子ヲ打セ、各

旗・昇ノ場ニ馳集ル、此度ハ前後勞佚ノ備ヲ立替、未

タ戦ハサル初ノ如シ、銳氣ヲ新ニシテ折敷時、普請奉

行並ニ御目付兩人夫卒・足輕引連レ、射散シタルのヲ

持來、御実驗ニ備タル總勢勝鬨ヲ揚ケテ折敷、此時

帰陣ノ御条書有テ、夫レヨリ一勢ツ、鼓・旗ノ調子ヲ

揃ヘテ當中ニ帰り、宮門ノ口ニテ姓名ヲ呼テ入ル、是

手負・死人ヲ數ルノ法ナリ、是ヨリ帰陣トナル、或ハ

一夜陣中ノ規則相^(訓シカ)、翌日帰陣トナルモ有リ、又一

隊一陣ヲ別ニ試ルコトモアルヘシ、

一抑銃砲隊ノ勢ハ分合相離サル様無之候テハ用立ヘカラ

ス、夫老^(杖撃)人ノ枚^(杖撃)ヲナシ、銃砲ノ的打強弱ヲ試ルハ調

練ノ小也、伍人ヨリ什人ニ什長アリ、六拾人一組ニテ

進止分合、一体ノ如ク相馴候ハ教戦之中ナリ、銃砲ノ

隊互ニ勢ヲ拔ス、進止合^{分ノ字差カ}ヲ馴ハス又大ナリ、七陣ノ總

揃行軍小屋掛陣中ノ規則、接戰場帰陣ノ実事相掛ハ、

大教戦ニテ振旅活兵ノ全備タルヘシ、故ニ平日一陣一

隊ノ教戦亦怠ルヘカラス、

一急ノ教戦御城下・諸郷・私領ニ限ラス、早鐘・煙火・

貝等ノ合図ニテ、当番將吏・士卒ノ分、兼テ定ノ会軍

場ニ馳集リ、着到相付ケ、教戰場ニ押出シ相馴ス時、

行軍直ニ接戦ノ馴シ故、一日限ノ事ナルヘケレハ、別

ニ兵粮方差越ニ及ハス、帰陣ノ式前条同斷、

一教戦ハ進止分合ノ熟ミ不過、其熟スル処ハ旗・鼓・貝

ノ令ニ不過、分數ノ外無之候ヘトモ、其外能々可得心

事、

一物主

平日組中ノ親交実場不離散ノ基本ニ可有之候間、第

一今日信義相嗜、人心ヲ不失様心ヲ用候儀可為肝要、

一調練衆ニ先立、出張・着到御条書行軍備打ノ次第迄、

何レモ相臨、自身ノ下知・号令相習フヘシ、尤モ大

調練ノ節ハ、陣中ノ諸規則差引会軍場ヨリ、行軍・

着陣・接戰場迄組士ヲ円メ、中ニモ接戰場ニ至テ、

貝・太鼓ノ役ヲ引付、組中ノ働ヲ着余勇ヲ衆ニ推シ

及ス儀可為第一、何事モ教戰場ニ熟シ得候業ニテ、

別ニ細説ニ不及、攻守共ニ陣營互ノ救応ハ勿論ノ事

候得共、我一手切ニテ他ヲ不離、當ノ敵ヲ打挫クカ、
不然ハ戰死ノ心得タルヘシ、

但大砲物主ノ儀ハ別ニ子細無之、教戦上ニテ発節・

進止・分合ノ機会迄得心スヘシ、

一物主ヨリ什長・伍長・同伍ト順序アリテ、等ヲ踰ヘ
タル聞達ヲ禁ス、

一談合役

平日ヨリ教戦ニ至ル迄、万事物主ノ參謀トナリ、物

主差問候節ハ、名代ニテ指揮ノ会軍ヨリ以上、実場

物主ノ左右ニ從テ差引シ、一組ヲ二手ニ相分候時ハ、

一方ノ物主トナリ、若物主戰死ノ折ハ、直ニ其一組

ヲ指揮シ折敷セ、死戦ノ用意ヲナスヘシ、其時若シ

御本陣ヨリ 御下知ノ小指ヲ持来候者有之候ハ、

直ニ物主同様其指揮ニ從フヘシ、

右職掌故、兼テ物主ノ職掌迄相心得、兵機ヲ自得

候様可掛心、

一昇預

但夜中ハ高張ヲ司ル、

一昇ハ一隊進止ノ目驗ニテ、古ヨリ其役別テ重スル処

也、故ニ当職ノ者平生嚴勇衆ヲ威服シ、戦場ニテハ

如何ナル猛烈ノ時タリトモ真先ニ進止シテ、戦兵奮
勇ノ目当ト成ヲ心掛ヘシ、

一会軍場ニテハ早各物主ノ傍ニ立頭レ、集リ来ル人数

ノ目驗トシ、着到有之御条書終テ行軍トナルトキ、

総勢ノ真先ニ押立、且ノ相図有之候ハ、昇ヲ立ナ

カラ折敷、食事ニ当テ側ニ寄^(セカ)□、發足ノ太鼓ヲ打候

トキ、又前々ノ如ク押行ナリ、止宿着陣ノ折ハ相図

次第ニ立止リ折敷、發放ノ節物主ノ傍ニ押立、入營

ハ真先ニ押入、陣中ニテハ各營ノ前ニ立チ、或ハ引

取置キ、何時モ其隊ノ人出入ノ節、夫々鼓調ニ応シ

目当ニ押立テ、中ニモ毎朝ノ総揃ニハ、戎装出来次

第先陣ヨリ營外ニ出テ折敷タルトキ、接戦ノ御条書

相濟、昇預鼓ノ調子ニ応シ、昇ヲ進メ候得ハ、諸士

是ニ依テ進行ス、兼テ定ノ場ニテ太鼓打^(候時昇脱カ)止折敷、

帰陣ノ節別ニ替ル事ナシ、実戦ニモ繰出ノ規則ハ同

断ニテ、先隊ノ昇預敵ノ折出ス矢砲^{打カ}ニ無構、大砲發

節ノ間節迄押進メ、物主ヨキ見切ノトキ、昇ヲ左右

ニ振り候ヘハ、残ラス折敷、

但待戦ハ総勢繰入次第、闕ノ声ヲ揚候時、旗ヲ振り

総陣ニ相図ヲ通スル、是ヲ旗合ト云フ、

一 綏勢既ニ經詰旗合ノ式終テ、昇・旗ハ陣後ニ伏セ、立顯レサル事也、次ニ勝軍ノ後カ、或ハ無抛人数可引取旨、御下知有之候ハ、速ニ各隊ノ旗・昇ヲ利地ニ立顯ハシ、目当ヲ定メ寄貝ヲ吹出ス時、諸勢婦来ル、

一 貝ノ役

貝ニ寄貝・漂貝アリ、教戰場・実接戦共ニ人数ヲ寄セ集ル為ノ相図、寄セ貝ヲ吹キ、行軍等ノ節折敷相図ニ漂貝ヲ吹、

一味方路行軍ノ時、昼飯所或ハ泊ノ宿ニ着ノ節、漂貝ニテ折敷合図ヲナス、

一陣中御本営ヨリ薪水取、或ハ無抛外用ノ者差出ス節、門番所ニ知令^(ルカ)為ニ送り貝ヲ吹キ、門番所ニテ迎貝ヲ吹キ、帰来時門番所ニテ送り貝ヲ吹、御本営ニテ迎貝ヲ吹キ、何レモ荷物組諸隊ノ貝役ヨリ、巷人宛交代シテ相詰ル、

一 調練・行軍・陣営・接戰場何レモ物主傍ニ在ル可シ、一 貝ノ役モ^(キカ)接戰場、士卒ニ物主命ヲ伝ル至重ノ役ナレハ、常ニ嚴威相励ミ、臨時不動揺、精氣衆ヲ動候様相嗜事專要タル可シ、

一 太鼓役

夫レ太鼓ノ用ハ一ハ合図ヲ通シ、一ハ足並ヲ揃ヘ、一ハ士氣ヲ励ス事ヲ司ル、徐・破・急ノ三様ニ候、一 徐ノ調子ハ行軍並ニ接戰場ニテモ、徐ニ歩スルノ合図ニ打之、

一 足ヲ留ルノ合図ハ、太鼓ヲ止ル其時程節ヲ見テ、什長折敷事ヲ令ス、又立行合図徐・破・急ノ調子ニ從ツテ打之、

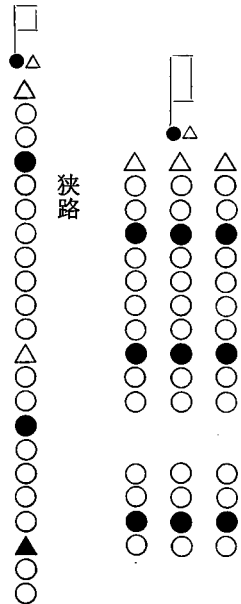
一 太鼓ノ役ハ、鉄砲勸敷戰場ニテ少モ動揺セス、物主ノ下知無之テモ、己カ見切ヲ以テ、一隊ニ徐疾・進退ヲ命スル至重ノ役ナリ、常ニ物主ノ前ニ在テ、威嚴衆ヲ服候様可相励、

一行軍ノ節常ニ物主ノ傍ニ在テ、徐・破・急ノ調子ヲ加ヘテ、兵ノ歩行或ハ昇ヲ進ル合図ヲナシ、止ヘキノ合図ハ打止ル、可立行合図ハ又タ打立ル、是ヲ以テ危地行軍ニ限ル、陣中ニテハ毎朝繰出シニ、其日御旗本方当番ノ太鼓門番所ニ在テ繰出シ、太鼓ヲ徐調ニ打ツ、戦争ノ砌ハ門外ヨリ直ニ徐・破・急ノ調子ヲ打テ、大砲発節ノ間合迄押詰、或ハ兵勢ヲ盛ニスル為メニ、將ノ令ニ仍テ烈敷破声ヲ発スル事アル

ヘシ、扱物主ノ傍ニ付テ、戦隊下ニ押行追留ノ後カ、
 或ハ抛ナク戦兵引揚ヘキ折ハ、旗昇ヲ立頭ハシ、寄
 目ヲ吹キ、是ヲ聞テ総士卒後ヲ見返リ、什長可引揚
 令ヲナシタル時、太鼓役ハ直チニ急・破ノ調子ヲ打
 チテ、兵ノ足並ミヲ揃ヘシ、

一什長

調練・実戦・行軍ニモ早ク号令ニ通シ、身ヲ以テ士
 ヲ令ス、調練場ニテハ屯場ノ内、夫々定ノ場所ニ順
 ヲ詰寄、銃発間節詰テ、尚又什士ニ銃調ヲ令シ、繰
 打ニモ及ヒ候ハ、進士ノ間節身ヲ以テ令シ、銃ヲ
 打ヤ否玉込シ、先ノ方ニ踏出シ発銃ヲ令シ、何レモ
 如此間節詰リテ後折敷業ヲ令ス、物主手計ヨリ寄セ
 目ヲ吹キタル時、昇ヲ見当ニ各太鼓ノ調子ニ応シ、
 静ニ什列ヲ正シク引集ルヲ令ス、
 一何レモ自身ノ銃ハ放ツ事ナク、要銃トシテ敵ノ将吏、
 又ハ目ニ立武者ヲ狙撃ス、二三行ニ行キ、狭路ニテ
 ハ一行ニ行ク事図ノ如シ、



狭路

一昼飯ノ合図、着陣・在営ノ作法何レモ身ヲ以テ、早
 ク合図ニ通シテ士ヲ令ス、接戦ニ至テ教戦ノ格ニ同
 ク別ニ子細ナシ、

一大砲組ニテ火薬箱総支配トナルモ、自身銃ヲ負守、
 砲士ト共ニ大砲ヲ守衛シ、兼テ拾人ノ見締トナリ、
 玉薬ノ不足ナキ様ニ出入ヲ下知シ、或ハ手早く取収
 事ヲ司ル、

一伍長

假令平日互ニ中惡シキ者候共、一旦同伍組合ノ上ハ、
 手足ノ如ク合体シ、兼テノ約束戰場救応・進止・分
 合ノ次第、什長ノ令ニ從テ互ニ助合、俱ニ均フシテ
 鋒先ヲ強スヘシ、尤モ伍中ニ大法ヲ犯シ候モノ、同
 罪ノ御法有之候ヘハ、能々兼テ約束ヲ堅クスヘシ、
 一何事ニ依ラス申出ル趣ハ伍人連名タルヘシ、

一 戰場ニテ若シ什長戦死候ハ、其ノ列ノ伍長代テ指揮ヲナス、若シ近接戰場ニテ戦死ニ於テハ、二伍共

ニ無ニ切込、当ノ敵打得スハ捨殺ノ罪科タルヘシ、

一 伍中長病氣・他行、或ハ死去、或ハ五十歳以上ノ者有之候ハ、速ニ物主ヘ可被申出、

但四人迄ハ伍ノ場ニテ、三人ニ及候ハ、外ノ組合

ニ老人ツ、可相付、若同伍ノ中嫡子等成長致シ、

二十歳以上相成候砌、六人ニ及候迄ハ可為同伍、

七人ニ及候節兩人共ニ他組ニ付可シ、

一 大砲隊ノ守砲士当番候ハ、煙火黒雲ノ中四方ニ眼ヲ配リ、不意来迫者アラハ、火薬総支配ト共ニ、敵ノ目ニ立者ヲ覘打スルノ職務ナリ、

一 玉薬方

一 兵具一切ヲ兼用ル職ニテ、何篇玉薬奉行ヘ引合、火

薬・鉛丸馬ニ付、主取夫老人・足輕老人宛引從ヘ、

行軍・陣営共ニ出入無滞取締ス、

一 平日自筒ニテ、御軍役相勤候者ノ玉目書出サセ、大

小ノ玉目ニ随テ銘々ノ名前ヲ書シ、什長玉薬取聚メ、

夫々荷作試ミ置キ、右相渡サレ候節ハ夫々分、数組

合候上ニテ相渡候ヘハ、混雜無之筈故入念可取計、

一 右ノ次第ヲ以テ、教戦陣中ニテ時々其隊ノ夫ニ持セ、
(無混雜様相渡事ヲ支配シ、陣中ニテハ時々脱力)
士ヲ老人宰領ニ付差遣スヘシ、

一 陣中何時モ玉薬渡付次第、速ニ残分ハ荷作シ、出立ノ用意片時モ怠タル可カラス、

但道中人馬ノ儀ハ、前以テ人馬方等差越、無滞様世

話可有之候、

一 兵粮方

一 何篇兵粮奉行ニ引合、諸陣隊ノ兵粮・賄具・人馬・

宰領夫々円メ可相付、大調練ノ節ハ前以テヨリ町家

ニ役シテ、別ニ主取連越シ、食用ノ都合ヲナシ、足

輕夫ニ庫裡ノ類ヲ每隊ニ取遣シ、汁ヲ陣丹荷ニ入レ

テ、庫裡ニ取添ヘシ、

但一日中ノ調練ハ此儀ニ及ス、腰兵粮タル可シ、

一 帰陣ハ何ヨリ先ツ刻限、前以テ汲炊ノ道具荷作シ、

混雜ナク下知致シ、会軍場ニテハ諸隊掛ノ人数差

越シ、自国行軍ハ郷々人数ニ応シタル賄食ヲ命スヘ

シ、

一 他国境ニテ最寄々々ヨリ米請取、前文之通ニ取締ニ

テ出行ス、其他領ノ内ニテ念遣ナキ所ハ先ニ差越、

營中汲炊ノ都合ヲナス、人馬続キ成リ難ハ通シニス

可シ、

一 普請方

万事普請奉行ニ引合、小屋取ヲ司ル、急成ル時ハ出

軍先立事一日、緩ハ四五日先立、普請方夫卒迄引連

レ出立、橋ノ堅否・渡瀬（場ノ舟・歩渡ノ脱カ）フミヲナシ、敵地行軍ノ時

ハ止宿ノ形勢ヲ試ミ、或ハ不用心ノ場ハ屋ヲ壞テ垣

ヲ結、野陣地勢ヲ見テ雜卒・倍卒ヲ役シ、木竹ヲ切

ラセ、風雨ヲ防ノ營舎ヲ掛ル、陣中ニテハ当番夜廻

ノ士卒ヲ支配シ、火消ノ役ヲ司ル、

一人馬方

荷物方（兼司カ）急用ニテ万事人馬奉行ニ引合、荷物人馬並ニ

宰領・足輕・夫丸ヲ引從フヘシ、

一大調練並ニ會軍場ニテ、諸士銘々ノ荷物小札相付、

其隊荷物方はヨ請取々分ケ、各馬ニ付ケ支配シ、陣

中着ノ後ハ印ニ從フテ陣々ニ分配シ、帰陣ノ時又々

請取、荷作シテ人馬ニ負セ引通ル事ヲ司ル、

但陣中ニテハ人馬ノ取締ヲ兼、

右ハ職掌ノ大概ニ候間、猶銘々職分ノ精カヲ尽シ、

兵威ヲ増シ候様可掛心事、

（御備向手統太概・御城下備諸役者職掌太概（東京大学所蔵）にて校訂）

四八六 私領軍賦

私領備一組

（二騎脱カ）

物主

一昇 壹本

一昇預 壹人

但小銃相携

一談合役 壹騎

一什長 六人

但銘々小銃相携

一戰兵 六拾人

内拾貳人伍長

一貝 壹口

一太鼓 壹張

一醫師 壹人

外ニ

一玉藥方 壹人

一兵糧方 壹人

一普請方 壹人

一人馬方 壹人

右同大砲備一組八組
物主 老騎

一昇 老本

一昇預 老人

但小銃相携

一談合役 一騎

一什長 六人

但銘々小銃相携

一靦役 八人

但伍長

一玉竿役 八人

一玉葉役 八人

一打役 八人

一口葉役 八人

一代玉葉役 八人

一守砲士 四人

但伍長銘々小銃相携

一火藥箱預 八人

但銘々小銃相携

一貝 老口

一太鼓 老張
一醫師 老人

外二

一玉葉方 老人

一兵糧方 老人

一普請方 老人

一人馬方 老人

右ノ割ヲ以テ、幾組ニテモ可被差出候、御軍賦ノ儀

八百石式人出役ニ候間、現立不足ハ追テ軍役可被相

掛候、

右ハ先年御手当向被改置候処、猶又今般御軍賦被相

定候条、時宜ニ依リ私兵カ□ヲ以テ出陣可被仰付、若シ

病氣・幼少ノ砌ハ親族等陣代相立、何篇堅固ニ手当

致シ置キ、急ノ御用無滞可被相勤者ナリ、

文久元年酉十二月

御軍役方

御家老座印

〔私領備（東京大学所蔵）にて校訂〕

四八七 〔諸郷軍賦〕

一地頭物主

隣郷組合ノ法有之候得共、先一郷一陣ノ心得ニテ他ニ譲ラス、如何ナル大敵モ一郷限ノ人数ヲ以テ、出陣・居守共ニ請合候手当備置候儀要務ナリ、

一諸郷物主ノ儀ハ、一郷限ノ人数被差出候節ハ、地頭・物主請持ニテ、万端指揮致ス儀ハ無申迄事候ヘトモ、譬ヘハ当番三組ノ郷ヨリ一組、或ハ一組ノ内ヨリ一手ト、諸郷組合ニテ、人数被差出候節ハ、御備物主別段可被仰付、異変到来事実相達候上ハ、早速地頭差入、指揮可致ハ勿論ニ候ヘトモ、御城下往返モ有之、依時宜ハ地頭駈付モ間ニ逢サル内、看々事後レ相成儀モ計リ難ク、右体ノ期ニ至テハ、第一郷士年寄・組頭等差ハマリ、御国名ヲ失ハサル様可心掛候、

一其郷士家部ハ勿論、百姓現夫・野町慶賀迄、貧富無構、御軍役人数其外ノ人数取調置、御軍役人数ノ儀ハ、現郷士麓居住・在居住、或ハ他郷中宿・御雇・足輕者等(據脱カ)ノ訳審ニ取調、一冊ニ相記置、麓居住・在居住ニテ戦兵成兼候者ハ相除、御軍役人数(現脱カ)ヲ三分一出陣、一ハ救応、一ハ居守ト相立、其内伍法嚴ニ組合、出陣・居守共ニ救合候様可心得候、

一他国境海岸ハ勿論、其外迄モ隣郷境目会軍場、或ハ

海岸鹿兒島迄、何方ヨリ何里、山坂險阻有無、且最寄郷ノ出陣人数迄取調置、実用吟味可致置候、

一調練ハ六十歳以下十五歳以上、出軍ハ大体式拾歳以上五十歳以下、

一調練ニ緩猛アリ、先一ケ年ニ一度位、来ル何日調練ノ段前以テ相達、可成御雇・中宿者迄モ帰郷致シ、兼テ被定置候組合ノ諸郷一同会合シ、地頭・物主等出張ヨリ帰迄(據脱カ)三日程モ滞在、陣中朝夕一切ノ式アルヘシ、猛ニハ麓並ニ在居住ノ御軍役人数、其外三分ニシテ六ケ月ツ、非番浮勢ト定メ、当番ハ兼テ何時モ出陣ノ用意可有之故、大砲或ハ狼煙・貝等ノ合図ニテ、急々人数ヲ集メ、郷士年寄以下ニテ、一郷或ハ二三ケ郷会合シ、行軍接戦ノ式アルヘシ、

但粮用ハ自分ニテ、腰兵粮・干飯、或ハ先方ニテ炊調タルヘシ、各郷会軍場ニテ着到ノ有無取調、病氣・故障ニテ着到無之者ハ、一日ニ軍食(據脱カ)尅升可差出、遅参ノ者ハ両度ノ教練可為致ノ類、遅速ニ依テ聊カ賞罰ノ式アルヘシ、

一他国行軍ハ備立清烈シ、敵地念遣所ニテハ、直ニ接戦ノ用意ヲナシ、昇・太鼓ノ調子不相乱、中ニモ戰

場ニ至テハ貝・鼓ノ役者ヲ眼前ニ從ヘ、徐・破・急
進退ノ調子ヲ下知シ、或ハ昇ヲ伏セ、兵ヲ立配ルヲ
昇預ニ令ス、夫ヨリ以上接戦ノ下知等勿論ニテ、人
数引揚ル砌ハ速ニ昇ヲ利地ニ立、貝ニテ合図シ、鼓
ニテ足早ニ引取ヲ命シテ、勝鬨帰陣ノ式ヲ令ス、
一物主ヨリ什長・伍長・同伍卜席順アリテ、等ヲ踰タ
ル聞達ヲ禁ス、

一談合役

平日ヨリ教戦ニ至ル迄、万事物主ノ參謀トナリ、物
主差支候節ハ名代ニテ指揮シ、中ニモ諸郷物主ノ儀
ハ、常ニ其郷居住ノ訳ニモ至リ兼候故、専ラ談合役
引受、万事物主同様可相勤、会軍ヨリ以上実場ニテ
ハ、物主ノ左右ニ隨テ差引シテ、一組ヲ二手ニ相分
候時ハ、二方物主ト成、若物主戰死ノ折ハ脱カ直ニ其一組ヲ指揮シ折敷セ、死戦ノ用意ヲ
ナスヘシ、其時若シ御本陣ヨリ 御下知ノ小指ヲ持
来候者有之候ハ、直ニ物主同様其指揮ニ從フヘシ、
右職掌故、兼テ地頭・物主ノ職分迄相心得、兵機ヲ
自得候様可心掛候、

一昇預

但夜中ハ高張ヲ司ル、

昇ハ一隊進止ノ目驗ニテ、古ヨリ其役別テ重スル処
ナリ、故ニ当職ノ署也ミノ平生嚴勇衆ヲ威服シ、戦場ニ
テハ如何ナル猛烈ノ時タリ共、真先ニ進止シテ、戦
兵奮勇ノ目当卜成ルヲ心掛ヘシ、

一會軍場ニテハ、早ク各物主ノ傍ニ立頭ハレ、集來ル
諸人数ノ目驗トシ、着到有之御条書、終テ行軍トナ
ル時、総勢ノ真先ニ押立テ、貝ノ合図有之候ハ、昇
ヲ立ナカラ折敷、食事ニ当テ側ニ寄セ、発足ノ太鼓
ヲ打チ候時、又前々ノ如ク押行ナリ、止宿着陣ノ折
ハ合図次第ニ立止リ、折敷発放ノ節、物主ノ傍ニ押
立、入營ハ真先ニ押入、陣中ニテハ營前ニ立、或ハ
引取置、何時モ其隊ノ人数出入ノ節、夫々鼓調ニ応
シ、目当ニ押立ル、中ニモ毎朝ノ総揃ニハ、戎装出
來次第先陣ヨリ營外ニ出ル、折敷タル時接戦ノ御条
書相濟、昇預鼓調子ニ応シ、昇ヲ進メ候ヘハ、諸士
之ニ依テ進行ス、兼テ定ノ場ニテ太鼓打止候時、昇
押立テ折シキ帰陣ノ節、別ニ替ル事ナシ、実戦ニテ
モ繰出ノ規則ハ同断ニテ、先陣ノ昇預ヨリ打出ス矢
砲ニ無構、大砲発節ノ間節迄押進メ、物主ヨキ見切
ノ時、昇ヲ左右ニ振り候ヘハ、兵士残ラス折敷、

但待戦ハ総勢繰入次第、関ノ声ヲ揚候時旗ヲ振り、

総陣ニ合図ノ通スル、是ヲ旗合ト云フ、

一総勢既ニ繰詰、旗合ノ式終テ、旗・昇ヲ陣後ニ伏セ、不立頭事ナリ、次ニ勝軍ノ後カ、或ハ無抛人数可引揚旨、御下知有之候ハ、速ニ各隊ノ昇ヲ利地ニ立頭シ、目当ヲ定メ、寄セ貝ヲ吹時諸勢帰来ルヘシ、

一貝之役

貝ニ寄貝・漂貝アリ、教戦場・実接戦共ニ、人数ヲ寄セ集ル為ノ合図ニ寄貝ヲ吹キ、行軍等之節折敷合

図ニ漂貝ヲ吹、

一味方路行軍ノ時、昼飯所或ハ泊ノ宿着ノ節、漂貝ニ

テ折敷合図ヲナス、

一陣中御本営ヨリ、薪水取或ハ無抛外用ノモノ差出節、

門番ニ知ラシムル為メニ送貝ヲ吹、同番所ニテ迎貝ヲ吹キ、又備來時番所ニテ送貝ヲ吹脱也御本営ニテ迎貝

ヲ吹、何レモ荷物諸隊ノ目役ヨリ、忝人宛交代ニテ

相詰、

一調練・行軍・陣営・接戦場、何レモ物主ノ傍ニ在ル

ヘシ、

一貝之役モ励キ接戦場、士卒ニ物主ノ命ヲ伝ル至重ノ役ナレハ、常ニ嚴威相励ミ、臨時不動揺精氣衆ヲ動

候様相嗜事專要タル可シ、

一太鼓役

夫レ太鼓ノ用ハ一ハ合図ヲ通シ、一ハ足並ヲ揃ヘ、

一ハ士氣ヲ励ス事ヲ司ル、徐・破・急ノ三様ニ候、

一徐ノ調子ハ、行軍並ニ接戦場ニテモ、徐ニ歩スルノ

合図打之、

〔一破ノ調子ハ、足早ニ歩ル見切ノ合図ニ打之（急カ）之風カ〕

一破ノ調子ハ中足ニテ掛リ、或ハ引取之合図ニ之ヲ打

ツ、

一足ヲ留ルノ合図ハ、太鼓ヲ止ル其ノ時程節ヲ見テ、

什長折敷事ヲ令ス、又タ立行合図徐・破・急ノ調子

ニ從テ打之、

一太鼓ノ役ハ、矢砲励キ戦場ニテ少モ不動揺、物主ノ

下知ナクテモ、己カ見切ヲ以テ一隊徐疾・進退ヲ命

スル至重ノ役ナリ、常ニ物主ノ前ニ在テ、威嚴衆ヲ

服候様相励可シ、

一行軍ハ常ニ物主ノ傍ニ在テ、徐・破・急ノ調子ヲカ

ヘテ兵ノ歩行、或ハ旗ヲ進ル合図ヲナシ、止ヘキ合

図ノ時ハ打止ル、立行ヘキ合図ハ又タ打立ル、是以テ危地行軍ニ限ル、陣中ニテハ毎朝繰出シニ、其日御

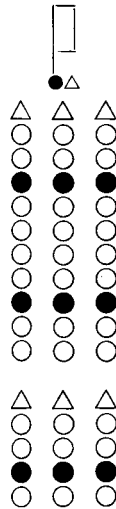
旗本方当番ノ太鼓役門番所ニ在テ繰出シ、太鼓ヲ徐調ニ打之、戦争ノ砌ハ門外ヨリ直ニ徐・破・急ノ調子ヲ打チ、大砲発ノ間合迄押詰、或ハ兵勢ヲ盛ンニスル為メニ、将ノ令ニ仍テ烈シク破声ヲ発スル事アルヘシ、扱物主ノ傍ニ付テ戦隊下ニ押行、追留ノ後カ、或ハ無抛戦兵可引揚砌ハ、昇ヲ立顯シ、寄目ヲ吹、是ヲ聞テ総士卒後ヲ見返リ、仕長可引揚令ヲナシタル時、太鼓役直ニ急・破調子ヲ打テ、兵ノ足並ヲ揃ルヘシ、

一仕長

調練・実戦・行軍ニモ早ク令ニ通シ、身ヲ以テ士ヲ令ス、調練場ニテハ、屯場ノ内夫々定ノ場所ニ詰寄^(備々脱)セ、銃発ノ間節詰ルニ、尚又什士ニ銃調ヲ命シ、繰打ニモ及候ハ、進止ノ間節身ヲ以テ令シ、銃ヲ打ヤ否ヤ玉込シ、先ノ方ニ踏出シ、発銃ヲ令シ、何迄モ此ノ如ク間節詰リ、一文字ニ成テ折シキ、刀槍ノ業ヲ令ス、物主ノ手許ヨリ寄目ヲ吹キタル時、昇ヲ目当各太鼓ノ調子ニ応シ、静ニ什列ヲ正シク引集ルヲ令ス、

一何レモ自身ノ銃ハ放ツ事ナク、要銃トシテ敵ノ将吏、

又ハ目ニ立ツ武者ヲ覘撃ス、二三行ニ行キ、狭路ニテハ一行ニ行ク事、図ノ如シ、



狭路

一昼飯ノ合図着陣・在宮ノ作法、何レモ身ヲ以テ早く合図ニ通シテ士ヲ令ス、接戦ニ至テ教戦ノ格ニ同ク、

別ニ子細ナシ、

^(惣脱力)

一大砲組ニテ火薬箱支配ト成ルモ、自身銃ヲ負守、砲士ト共ニ大砲ヲ守衛シ、兼テ拾人見締ト成リ、玉粟ノ不足ナキ様ニ出入ヲ下知シ、或ハ手早く取り收ル事ヲ司ル、

一伍長

仮令平日互ニ中惡シキ者ニ候トモ、一旦同伍組合ノ上ハ、手足ノ如ク合体シ、兼テノ約束戰場救応・進止・分合ノ次第、仕長ノ令ニ從テ互ニ助合、俱均シテ鋒先ヲ強スヘシ、尤モ伍中ニ大法ヲ犯シ候モノ、同

罪ノ御法有之候へハ、能々兼テ約束ヲ堅スヘシ、

一何事ニ依ラス申出候節ハ、伍人連名目タルヘシ、
(符カ)

一戰場ニテ若シ仕長戦死候ハ、其列ノ伍長代テ九人

ノ指揮ヲ成スヘシ、若シ近接戰場ニテ戦死ニ於テハ、

二伍共ニ無ニ切込、当之敵打得スハ捨殺ノ罪科タ

ルヘシ、

一伍(折カ)中長病氣・他行或ハ死去、或ハ五拾歳以上ノ者有

之候ハ、速ニ物主ヘ可申出、

但四人迄ハ伍ノ場ニテ有之、三人ニ及候ハ外ノ組合

ニ壹人宛可相付、若同伍ノ中嫡子等成長致シ、二

十歳以上相成候砌、六人ニ及候迄ハ同伍タルヘシ、

一伍七人ニ及候節、兩人共ニ他組ニ付ヘシ、

一大砲隊ノ守砲士当番ハ、煙火・黒煙ノ中(四方脱カ)ニ眼ヲ配リ、

不意来迫ノモノアラハ、火薬総支配ト共ニ敵ノ目ニ

立モノヲ覘打スルノ職務ナリ、

一玉薬方

兵粮一切ヲ兼用シテ、玉薬方支配ニ引合、銘々ノ火

薬・鉛丸馬ニ付、主取夫壹人、足輕壹人宛引従ヘ、

行軍・陣営共ニ出入無滞取締スヘシ、

一平日自筒ニテ御軍役相勤候者ノ玉目書出サセ、玉目

ノ大小ニ随テ、銘々名前ヲ分ケ、並ニ大砲隊ノ火薬

取聚メ、夫々荷作試ミ置キ分、数組合以上(候カ)ニテ相渡、

無混雜様入念可取計、

一右之次第ヲ以テ、教戦陣中無混雜様相渡、事ヲ支配

シ、陣中ニテハ時々其隊ノ夫ニ持セ、士ヲ壹人宛宰

領ニテ差遣スヘシ、

一陣中ニテハ火災ノ無キ所ニ置キ、矢砲ノ飛来候念遣

敷方ニハ、土居ヲ築クヘシ、

一陣中何時モ玉薬渡付ケ次第、速ニ残分ハ荷作シ、出

立ノ用意片時モ怠ルヘカラス、

但道中人馬ノ儀ハ、前以テ人馬等差越シ、無滞様世

話可有之候、

一兵粮方

兵粮方支配ニ引合、兵粮・賄具・人馬宰領夫々相円

メ、大調練ノ節ハ、前以テヨリ町家ニ役シテ、別ニ

主取夫連越シ、食用ノ都合ヲナシ、或ハ行軍ノ中央

ニ押行キ、各隊ノ足輕夫ニ庫裡ノ類ヲ毎隊ニ取遣シ、

汁ヲ陣丹荷ニ入レテ、庫裡ニ取添送遣ス、

但一日中ノ調練ハ此儀ニ及ハス、腰兵粮タル可シ、

一帰陣ハ何ヨリ先キ刻限、前以テ汲炊道具荷造シ置キ、

無混雜下知致シ、会軍場ニテハ諸隊掛ノ人数差越シ、
自国行軍ノ内ハ、郷々ニ人数ニ応シタル賄食ヲ命ス
ヘシ、

一他国境ニテ最寄々々ヨリ米請取、前文通ノ取締ニテ
出行ス、其他領ノ内ニテモ念ツカハシキ所モ、先ニ
差越シ、營中汲炊ノ都合ヲナシ、人馬統キ成リ難キ
所ハ通スヘシ、

一普請方

万事普請方〔支配脱カ〕ニ引合、木屋取ヲ司ル、急ナル時ハ出軍

ニ先立事一日、緩ハ四五日先立、夫々普請方夫卒迄
引連レ出立、橋々堅否・渡場ノ舟・歩〔脱カ〕ノ瀬踏ヲナシ、

敵地行軍ノ時ハ止宿ノ形勢ヲ試ミ、或ハ不用心ノ場
ハ屋ヲ壊チ垣ヲ結ヒ、野陣ノ節ハ地勢ヲ見テ、雜卒・
倍卒ヲ役シ、木竹ヲ切ラセ、仮リニ風雨ヲ防クノ營

舎ヲ掛ル、陣中ニテハ当番夜廻ノ士卒ヲ支配スヘシ、
一人馬方

人馬方支配ニ引合、荷物一切ヲ兼司シ、荷物・人馬
並ニ宰領・足輕・夫丸引従フヘシ、

一大訓練並ニ会軍場ニテ、諸士銘々ノ荷物相請取り、
取り分ケ各馬ニ付ケ支配シ、陣中着ノ後チハ印ニ従

ツテ陣々ニ分配シ、帰陣ノ時又タノノ相請取り、荷
作りシテ人馬ニ負ハセ、引返ル事ヲ司ル、

但陣中ニテハ人馬ノ取締ヲ兼ル、

右ハ職掌ノ大概ニ候間、猶銘々職分ノ精力ヲ尽シ、

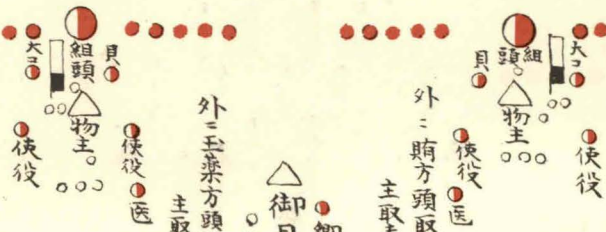
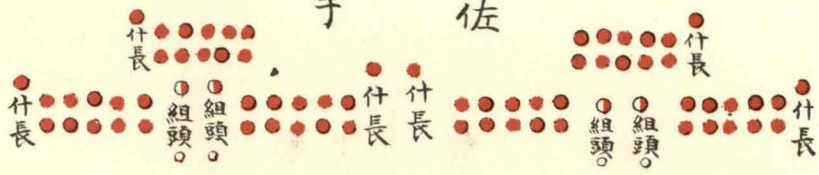
兵威ヲ増候様可心掛事、

〔諸郷備諸役者職掌大概〔東大所感〕にて校訂〕

四八八 〔備立略図〕

以上 〔末尾に朱書〕

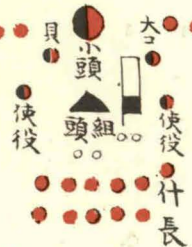
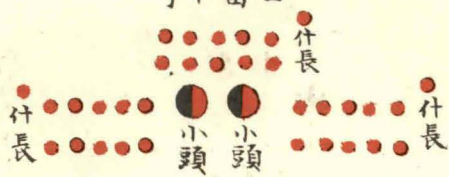
一手 帖佐

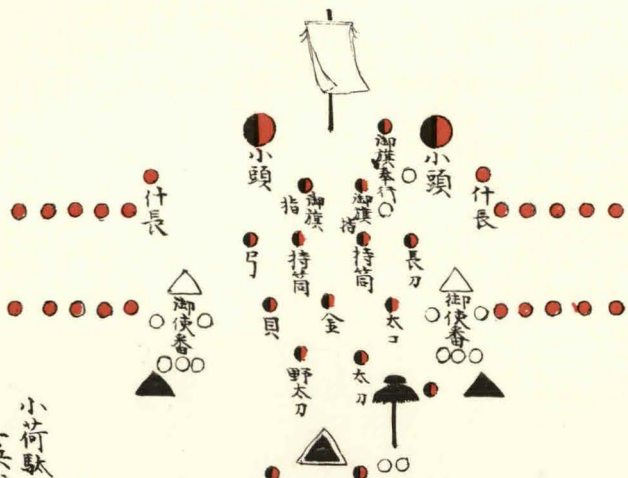


外三至藥方頭取四人
主取夫五人

御目附
御横目
足輕

手半富重





惣人数四百五拾一人
 内百八十五人 帖佐
 二百六十六人 重富

小荷駄

- 一兵粮奉行一人
- 一普請奉行一人
- 一玉葉奉行一人
- 右相付夫十五人

臺所方

- 一包丁二人
- 一料理役二人
- 一長持一掉
- 一取夫四人
- 一玉葉方頭取六人
- 一取夫六人
- 一取夫五人

戰兵方

- 一取夫四人
- 一取夫六人
- 一取夫五人

御儀番

目付

○走番足輕二人
 ○横目○右全

大將
 御廻 全
 御廻 全
 御廻 全

近習役 医
 近習役 医
 茶道 医
 医 医

右筆
 物頭
 馬役

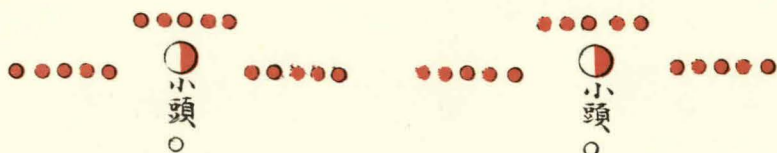
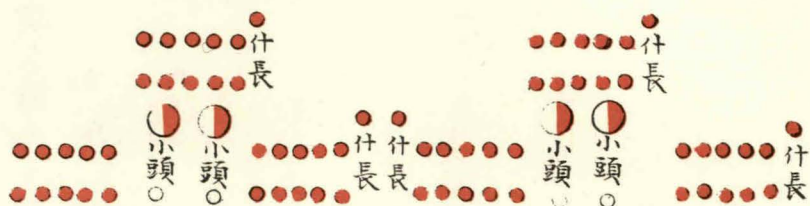
○茶并 二人
 ○玉葉持 二人
 ○用具持 二人
 ○馬医
 ○赤馬二足
 ○油籠 二人
 ○口取 四人
 ○陣掛 二人
 ○單履持 二人

役人
 役人
 役人

御儀附

目付

○走番足輕二人
 ○足輕
 ○右全



太鼓
○○

打役

使役

物主騎
●○○

使役

吹役

医

貝

医

吹役

使役

物主騎
●○○

使役

打役

太鼓
○○

太鼓
○○

○ 足輕一人
▲ 目付一騎
● 郷横目

● 同

○ 引 ▲ 御目付 ○ 卒

● 家 ● 書役

● 附足輕

○ 引 ▲ 御裁 許掛 ○ 卒

● 附足輕

● 横目

● 附足輕

○ 引 ● 御側役 ○ 小者

● 末

● 書

● 家末

● 書

○ 御軍役方惣奉行

▲ 御家老

○ 小者 ● 役 ○ 引

▲ 大目附

小者 ● 役

● 家末

● 用達

● 家末

● 用達

○ 引 ● 御納奉行 ○ 家末 ○ 小者

○ 引 ▲ 御目付 ○ 卒

● 附足輕

○ 引 ▲ 御裁 許掛 ○ 卒

● 附足輕

● 横目

● 附足輕

● 同

其二

●引 ▲御目附 ●卒
●引 ▲御目附 ●卒

○家 ○書役

●引 ▲御側役 ●小者

○未 ○書役

○家 ○未

●引 ▲御軍器物奉行 ●小者 ●引 ▲大軍監 ●小者 ●役

○家 ○未

●用達

○家 ○未

●用達

○家

●引 ▲御納奉行 ●小者 ●引 ▲御量職役 ●卒

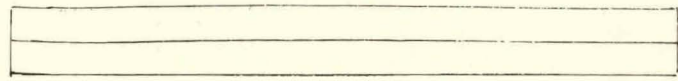
○未

●引 ▲御目附 ●卒

●引 ▲御目附 ●卒

陪

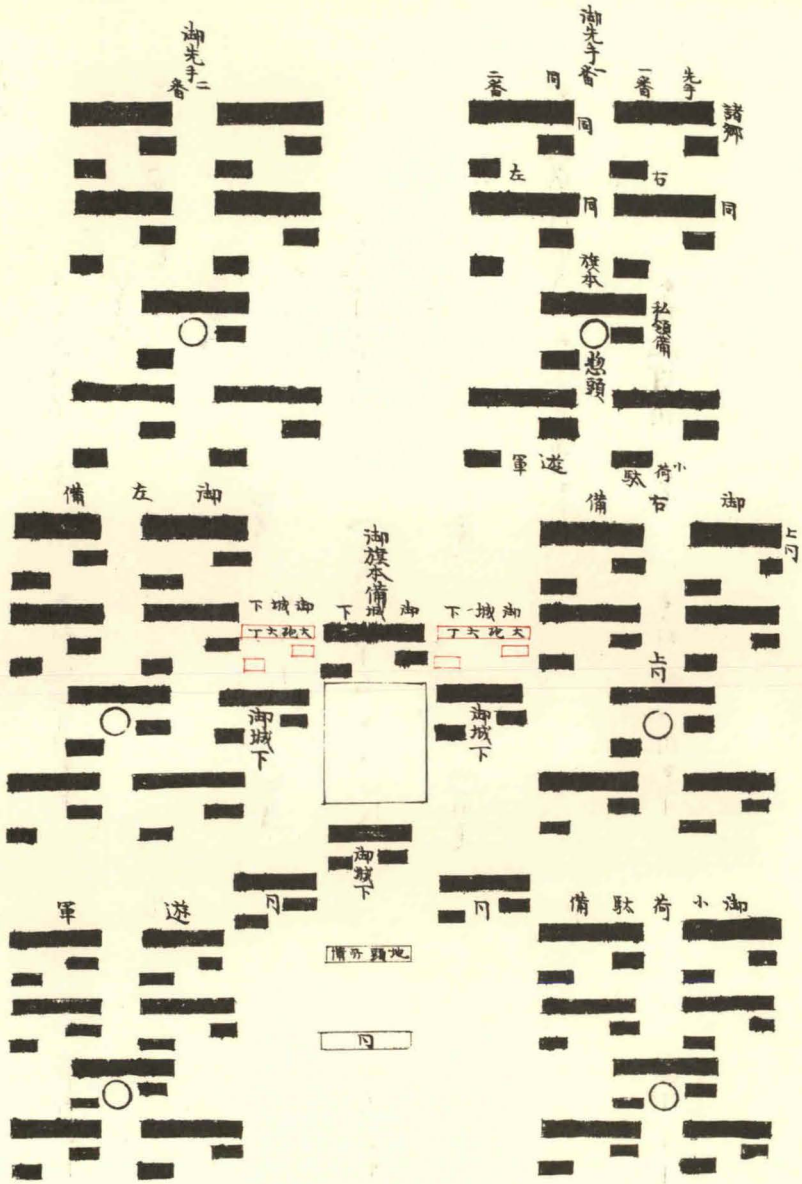
卒

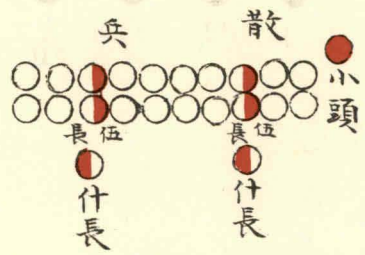
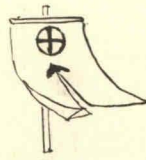


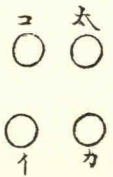
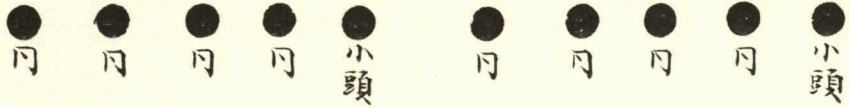
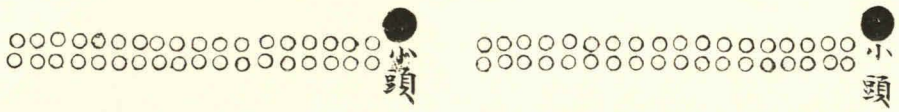
●御 ●卒

●徒 ●卒

●陪 ●卒





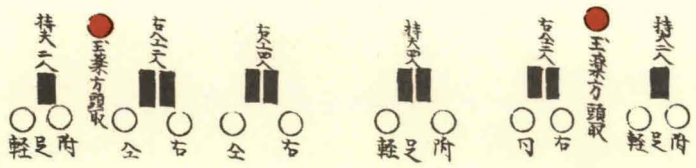
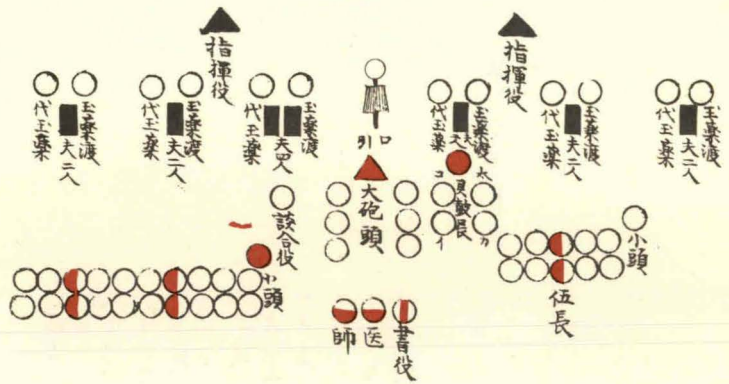
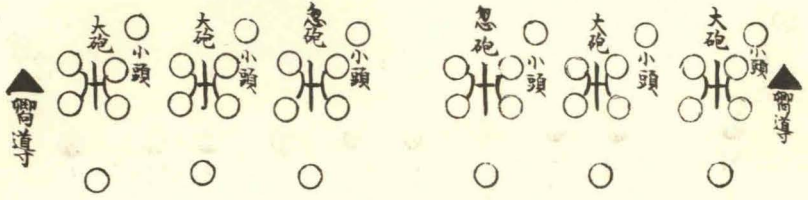


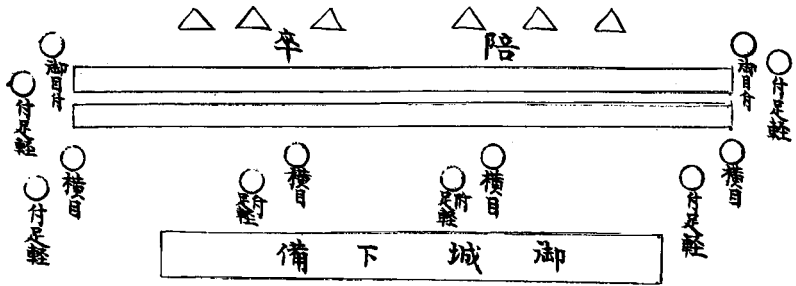
▲物主
○ 従卒
△ 従卒

▲相談役卒

従卒御役柄高前等
ニラ増減可有之

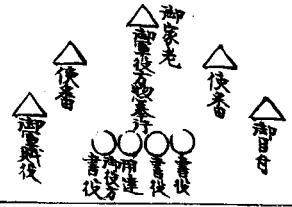
- 一 戦兵七拾二人 一隊三拾六人
- 一 小頭拾二人 一隊六人
- 一 貝役二人
- 一 太刀役二人
- 一 兵糧玉菓方八人
- 一 物主一人
- 一 相談役一人
- 合九拾八人
- 外 醫師二人
- 書役一人



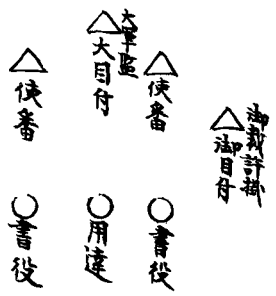


組頭
物主

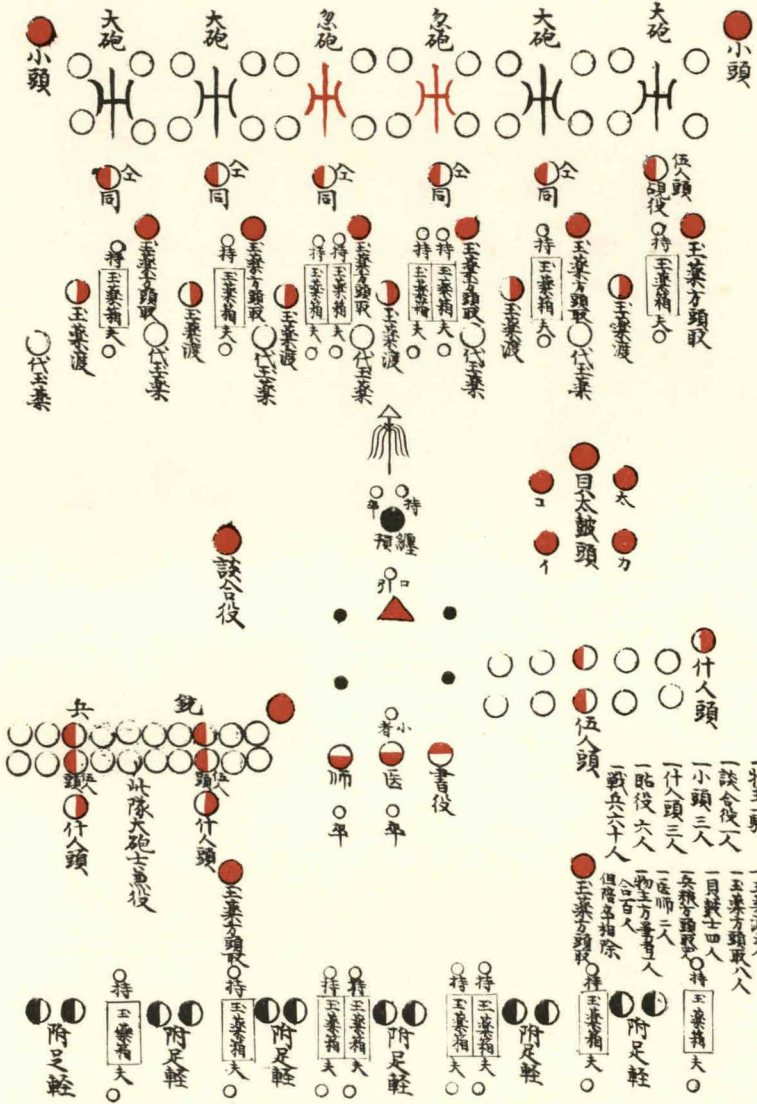
備所頭地老家御



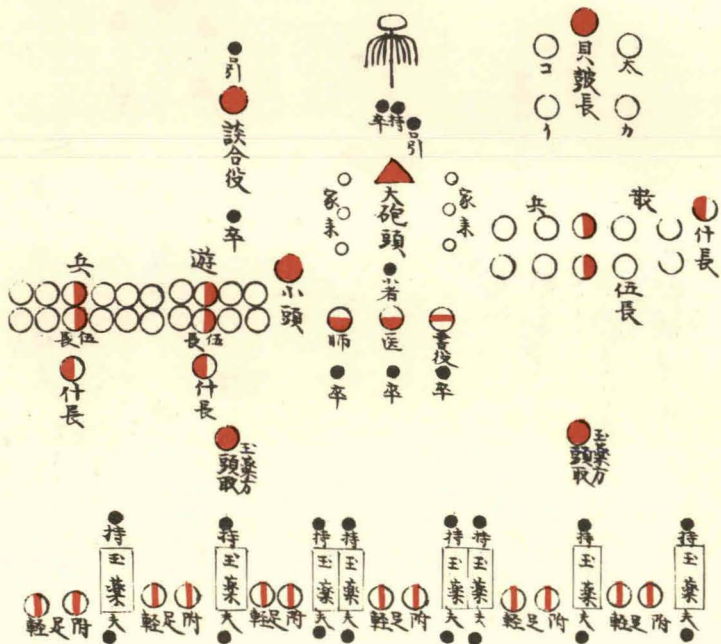
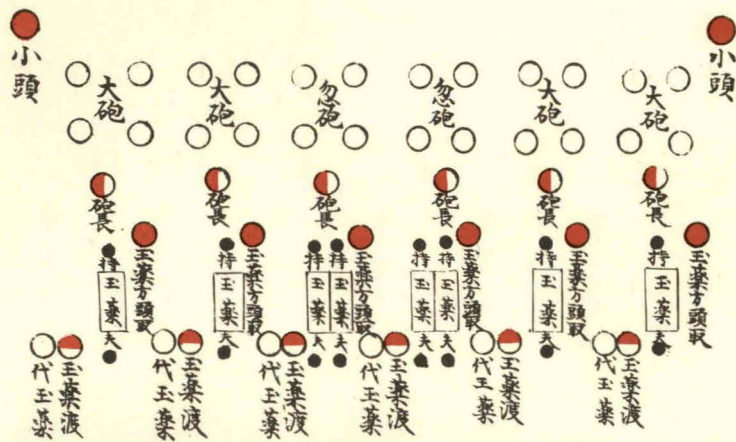
備所頭地 附目大

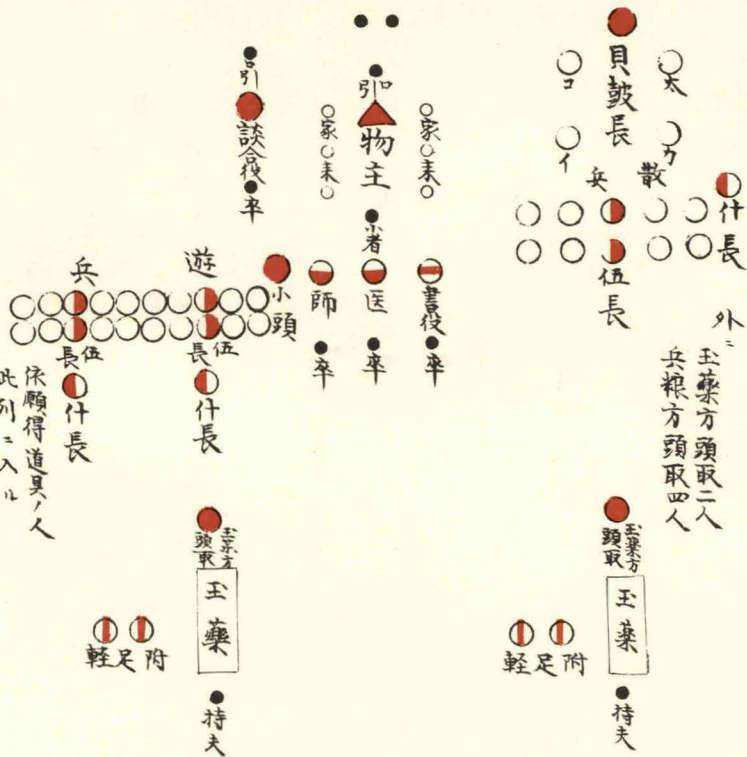
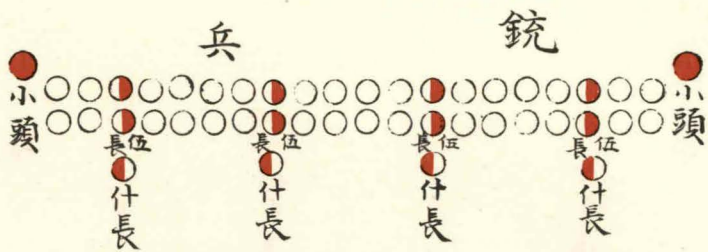


大砲隊一組之圖



- 一物主騎 一玉葉渡六人
- 一談合役 一玉葉方頭取八人
- 一什人頭 一玉葉方頭取八人
- 一伍人頭 一玉葉方頭取八人
- 一附足輕 一玉葉方頭取八人

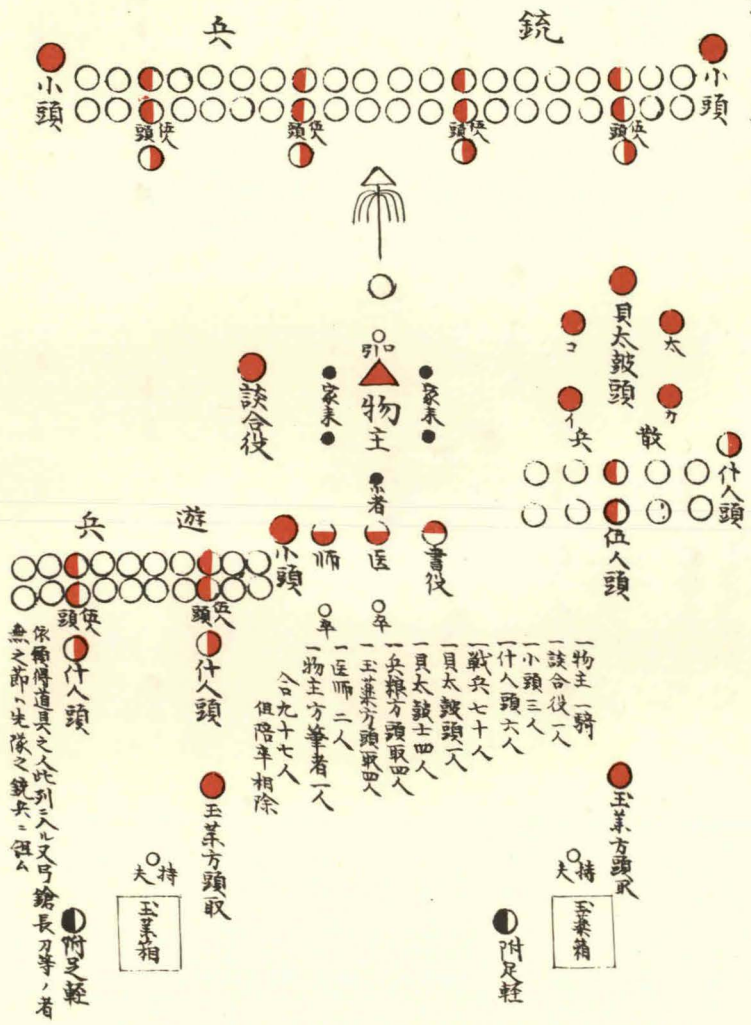




依願得道其人
此列二入也

玉藥方頭取二人
兵糧方頭取四人

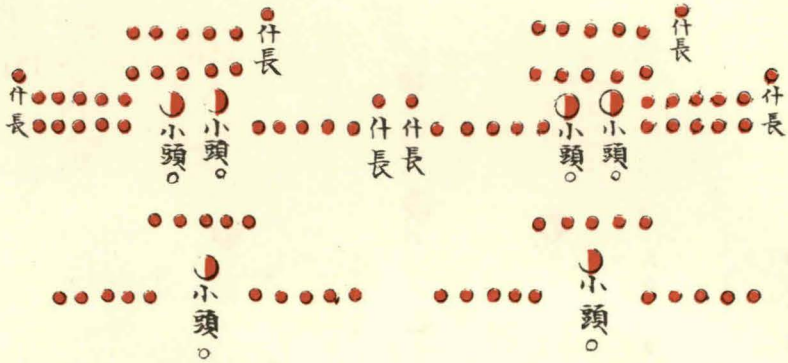
小銃隊一組之圖



依備得道具之人此列三人又弓鎗長刀等者
無之節、先隊之銃兵二個人
○持
玉葉箱
○持
附足鞋

談合役
家来
物主
書役
貝太鼓頭
太
散
什人頭
伍人頭
玉葉方頭取
持
玉葉箱
附足鞋

一物主一騎
一談合役一人
一什人頭三人
一什人頭六人
一戰兵七十人
一貝太鼓頭一人
一貝太鼓頭四人
一兵糧方頭取四人
一玉葉方頭取四人
一匠師二人
一物主方筆者一人
合九十七人
但陪率相除



賄方頭取四人
 至藥方頭取四
 附夫拾人
 物人數百六拾人



御横目
 目附一騎
 足輕一人



諸御備 旗本隊



● 御旗指
● 同

▲ 御旗預
▲ 惣隊將

○ 小者
● 医
○ 半
○ 引
▲ 御附
● 家末
○ 半

● 貝太鼓頭

● 太
● 方
● 使役

● 家末

● 用達又筆者

- 一 惣隊將 一人
- 一 御普請奉行 一人
- 一 談合役 一人
- 一 御旗預 一人
- 一 御旗指 二人
- 一 横目 二人
- 一 御目舟 一人
- 一 用達 一人
- 一 兵糧奉行 二人
- 一 御普請方頭取 四人
- 一 右外ハ其御ヨリ
- 一 横目
- 一 附足輕
- 一 御普請奉行 一人
- 一 玉羊奉行 一人
- 一 兵糧方頭取 四人
- 一 玉羊方頭取 四人

● 小頭

● 家末

● 医
○ 半

● 附足輕

散

● 頭
● 仔人頭

● 使役

● 使役

兵

● 頭
● 仔人頭

● 横目

● 附足輕



引



御旗指



御旗頭



卒



隊將



小者



医



卒



引



軍監



卒



卒



卒

貝鼓
長

太
カ
イ

引
軍使
卒

引
軍使
卒

引
横目
卒

小頭

散

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

兵

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

長

伍

引
軍使
卒

引
談谷役
卒

家
未
卒

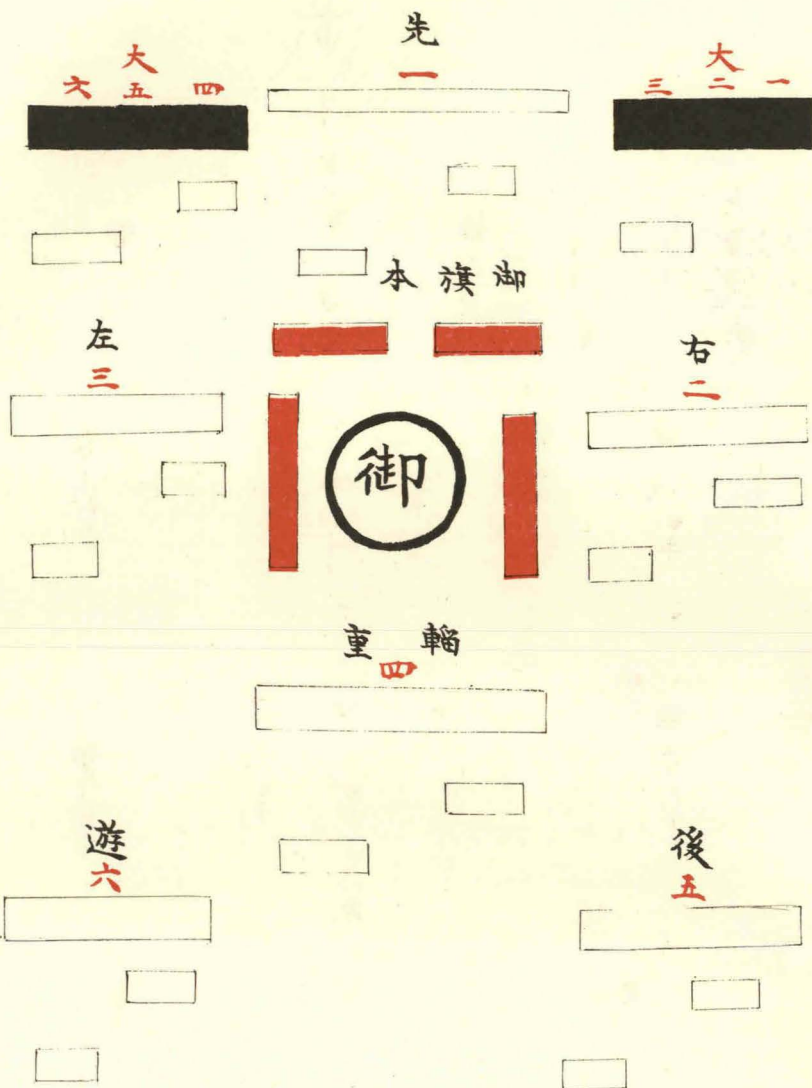
家
未
卒

引
師
卒

引
用遠
卒

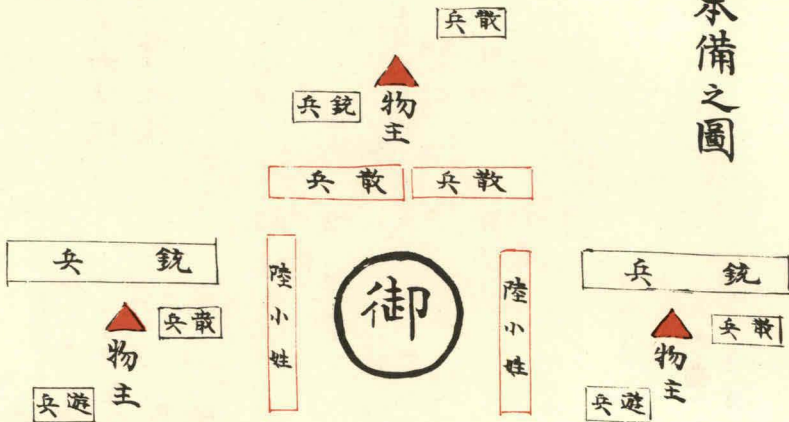
引
軍使
卒

引
横目
卒



御旗本備之圖

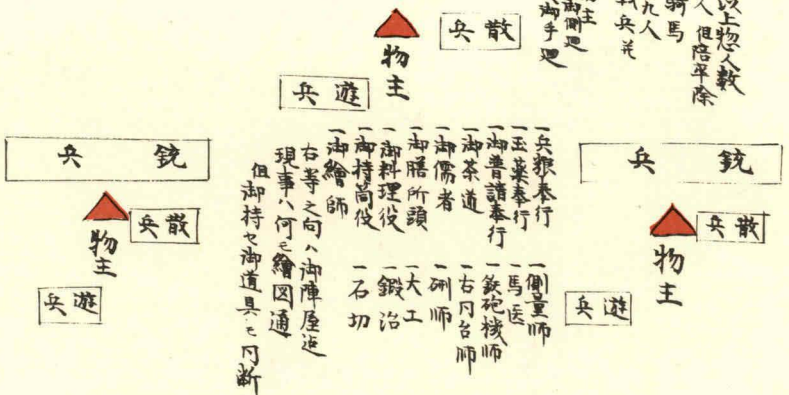
水水水水水水



繪圖面

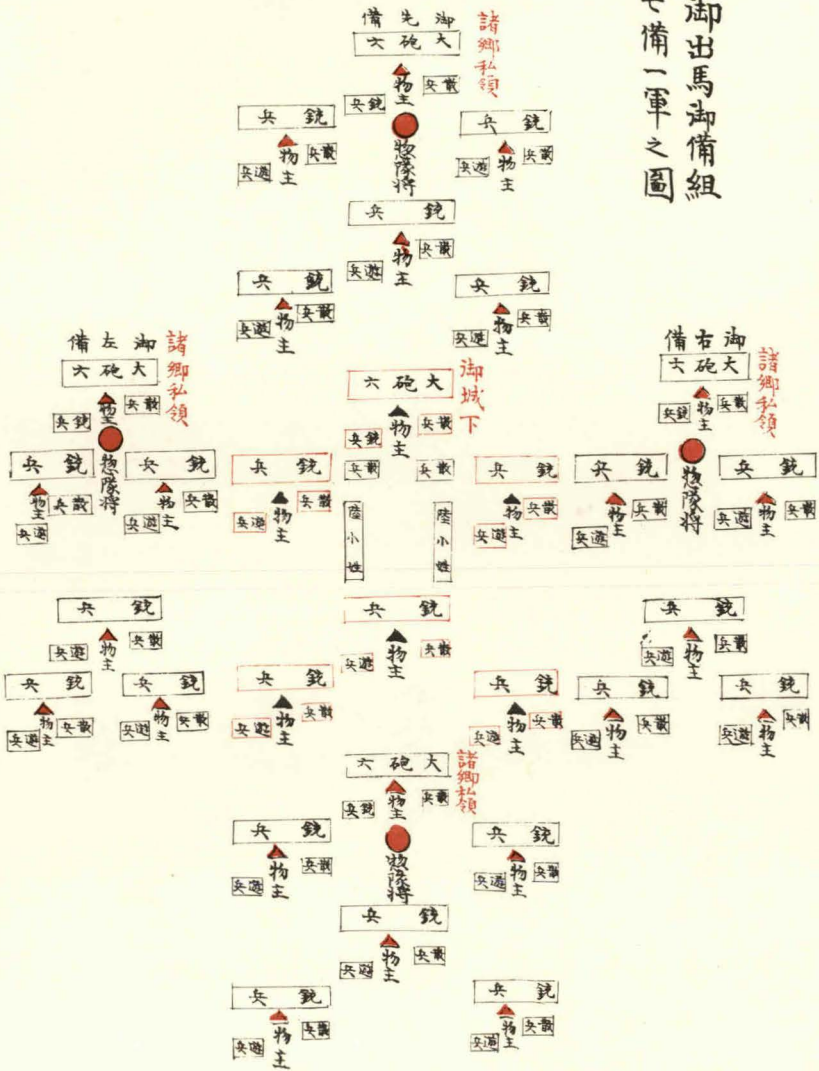
兵銃

御旗本備士以上惣人数
七百九十七人但陪平除
内六十人騎馬
一五百七十九人
諸備戰兵并
諸役者
三人物主
百七十八人海手廻



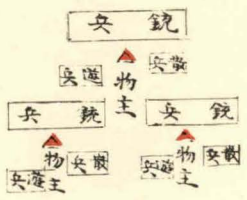
兵振奉行 一御量師
五藥奉行 一馬医
御普請奉行 一銃砲機師
御茶道 一右月台師
御儒者 一砚師
御膳所頭 一大工
御料理役 一鍛冶
御持筒役 一石切
御繪師
右等之向ハ御庫屋迄
現事ハ何ニ繪因通
但御持之御道具ニ寸断

御出馬御備組
七備一軍之圖



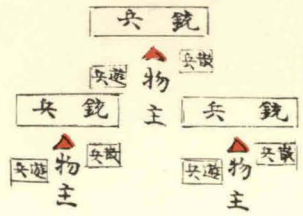
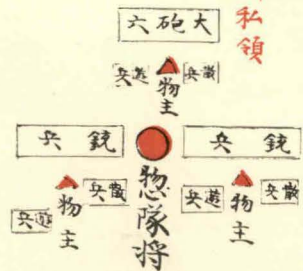
遊兵備

諸鄉私領



御後備

諸鄉私領



〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
文久元年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料
(紙数 枚)」の記載あり

四八九 改正軍賦人名

一 四八九ノ
一番組

一 御先手

物主

一組

物主

島津

壬生(久憲)

一 御旗本

一組

物主

一 二番組

島津 求馬(久邦)

物主

マコ

内

一 御先手

一組

物主

島津

主殿(久義)

一 御旗本

一組

物主

川上源十郎

一 三番組

物主

マコ

内

一 御先手

一組

物主

島津仁十郎

一 御旗本

一組

物主

一 四番組

島津 伊織

物主

(マコ)

一 六番組

肝付 兵部(兼西)

物主

川上 直衛

内

一 御先手

一組

物主

一 御先手

一組

(物主麻乙)

高橋 縫殿(種親)

一 御旗本

一組

川上

右膳(久賢)

一 御旗本

物主

島津 頼母(久徳)

一 五番組

新納次郎四郎(久徳)

小番・新番・御小姓与

現人数式千三百拾八人(五十歳以下式拾歳以上)

合当番人数九百人

差引残

千四百拾八人

内

一 御先手

一組

物主

島津

仲(久徳)

四八九之二
西目 御先手

現人数千七百七拾人

一 御旗本

一組

物主

一出水

拾七組一手

地頭

内
喜入欠西攝津

一当番
一組
物主
伊集院平治

一当番
一組
物主
東郷藤兵衛

現人数三百八拾式人

一阿久根
三組一手
地頭

内
一当番
一組
物主
高崎喜兵衛

四八九ノ三
西目
御出馬

一出水
一番

内
一当番
一組
惣物主
島津欠明又六郎

一当番
一組
大砲物主
田尻 務

一当番
一組
物主
山田 轉

現人数四百九人
一高尾野出水郡
四組
地頭
吉川源右衛門

内
一当番
一組
物主
宮之原小膳

一当番
一手
現人数百拾式人

一当番
一手
現人数百拾式人

文久元年 (1861)

一野田〔田木郡〕

一組

地頭

龜山甚之丞

内

内

一当番

一手

合一組

物主

一阿久根

現人數三百八人

一大口

三組

現人數九拾六人

地頭

一山野〔矢口市〕

〔44〕

地頭

内

一組

肥後八右衛門

一当番

物主

内

半手

新納〔久世〕波門

現人數百拾三人

右一陣

一羽月〔同上〕

田中仲次郎

一組〔地頭脱力〕

現人數三百五拾式人

一隈之城〔川内市〕

三組

内

一手

一当番〔現人數百貳人脱力〕

〔45〕

地頭

一組

惣物主

島津

隼人〔久芳〕

一組

大砲物主

相良治部〔長発〕

一手

一湯之尾〔伊佐郡〕

一手

内

半手

内

地頭 山田 十介

一当番 現人数九拾式人〔天口也〕

一手

一当番

半手

地頭

合一組

物主

島津 主税

内

一当番

半手

現人数百八人

一本城〔同上〕

一手

合一組

物主

地頭

鎌田 要人〔政造〕

鎌田 奎之丞〔政典〕

内

一当番

現人数八拾七人

一手

一高城〔内也〕 高城郡 現人数三百七拾七人

三組一手

一馬越〔同上〕

地頭

種子島嘉次右衛門

内

一当番

地頭

一組

内

一当番

半手

物主

細瀧 権八

文久元年 (1861)

現人数三百四拾八人
一水引同上

三組

地頭

中村新介

内
一当番

一組

物主

高田尚五郎

右一陣

三番

現人数百四拾五人

一串木野

三組

地頭

町田内膳(久憲)

内

一当番

一組

惣物主

町田内膳

現人数百五人
一高江(内内也)

二組

内
一当番

現人数六拾九人
一中郷同上

一

地頭

島津内記

内

一当番

半手

現人数百七拾九人
一東郷(薩摩郡)

一

地頭

猪飼央(尚春)

内

一当番

一手半

合一組

物主

地頭
關山(金生) 札

一組
大砲物主

島津内藏

一手

島津 内記

合一組

物主

仁禮 (仲信)
舍人

現人数九拾貳人
(薩摩郡)
一鶴田

地頭

一手

向井新兵衛

現人数八拾八人
(同上)
一百次

地頭

一手

伊勢平四郎

内

一当番

半手

現人数九拾貳人
(同上)

一山崎

一手

地頭

桂 (久武)
右衛門

一当番

内

現人数貳百拾七人
(薩摩郡)
一大村

半手

二組

(地頭脱力)
島津 左膳

内

一当番

半手

現人数百四拾七人

薩摩郡
(内内也)

一山田

合一組

一当番

内

一手半

物主

川上郷兵衛

地頭

一組

澁谷喜三左衛門

現人数貳百七拾九人
(同上)
一樋脇

二組一手

一当番

内

一手

地頭

文久元年 (1861)

内

一当番

樺山 要人

一組

物主

市田 隼人

右一陣

四番

一御城下

右一陣

五番

現人数三百八拾九人

一伊集院

(白鷹郡)

三組一手

地頭

菱刈 李之助

(隆徳)

内

一当番

一組

惣物主

島津 信濃

内

一当番

一組

現人数六百五拾五人

一市來

地頭

堅山 武兵衛

(利志)

内

一当番

一組

大砲物主

堅山 八郎

(利志)

一当番

物主

迫水善左衛門

現人数貳百七拾九人

鹿兒島郡

一吉田

二組一手

地頭

福崎 助七

(八九)

現人数三百三拾八人

一郡山

(白鷹郡)

三組

地頭
北郷作〔久信〕左衛門

現人數五百七拾四人
一田〔同占〕布施

五組一手

内

地頭

一当番

有馬舍人

内

一組
物主

一当番

北條〔時有九〕織衛

一組

右一陣

大砲物主

六番

二階堂 葦

現人數七百貳拾九人

一当番

一伊作〔官置郡〕

合一組

一手

地頭

物主

小松〔清應〕帶刀

有馬舍人

内

現人數三百拾五人

一当番

一阿多〔同占〕

三組

一組
惣物主

地頭

鎌田〔政治〕要人

平田直之進

一当番

内

一組
物主

一当番

一組

伊集院〔兼直〕仲二

物主

一当番

一手

義岡〔久慈〕相馬

文久元年 (1861)

現人数式百四拾三人
(川邊郡)
一川邊

二組

地頭

山口

直記(利光)

内

一当番

地頭

川上

筑後(久封)

内

一当番

現人数五拾八人

川邊郡

一手半

一当番

惣物主

一組

穎娃織部(久武)

一山田

地頭

半手

一当番

大砲物主

川上 東馬

内

一当番

合一組

半手

一当番

島津

求馬(久邦)

一当番

物主

一組 白尾登五左衛門(右九)

物主

島津

藏人

一当番

物主

一組 島津織之助(久直)

右一陣

七番

現人数千五百五拾九人

一加世田

拾五組

現人数百七拾八人
(川邊郡)
一久志秋目

一組一手

山本孫兵衛

地頭

伊集院静馬

現人數百六拾八人

一指宿

一組一手

地頭

(マ)

内

一手

現人數百拾人

一坊泊

一手

一当番

一組

地頭

島津頼母

物主

(マ)

内

一当番

一手

一谷山

(鹿兒島市)

五組

合一組

物主

伊集院静馬

地頭

島津

大藏(欠)

右一陣

現人數三百貳拾人

一穎娃(保福郡)

三組

一当番

一組

地頭

島津欠 靱負

物主

一組

内

一当番

一組

物主

物主

現人數八拾貳人

文久元年 (1861)

一山川 (攝津郡)

一手

地頭

谷川次郎兵衛

一当番 内

一組

物主

現人数四百八拾八人

(マ)

一当番 内

四組一手

一当番 外二

現人数六百七人

一当番

一組

一長島 (出水郡)

六組

物主

地頭

西郷八郎次

一当番

一組

物主

一当番 内

一組

(マ)

物主

四八九ノ四

東目 御先手
現人数六百七拾三人

六組一手

一高岡 (宮崎東諸県郡)

地頭

現人数三百八拾八人

一組

川上

一上飯島 (薩摩郡)

三組一手

式部 (久美)

地頭

國分十右衛門

一当番 内

一組

物主

中山甚五兵衛

一当番

一組

物主

上村直兵衛

現人数百四拾九人
一綾同上

一組

地頭

樺山相馬(久喜)

内

一当番

一手

現人数百四拾四人
一穆佐同上

一組

地頭

伊集院伊膳

内

一当番

一手

合一組

物主

村橋左膳

四八九ノ五

東目 御出馬

一番

現人数三百九拾九人

一小林

内

一当番

惣物主

郷原 轉

一当番

物主

北郷 數馬(久徳)

一高岡

大砲物主

新納伊十郎

現人数百六拾式人
(官崎県西諸県郡)

一野尻

一組一手

地頭

川上正十郎

三組一手

地頭

郷原 轉

一組

文久元年 (1861)

現人数百貳拾貳人

内
一当番
物主
大野 多宮

一福山同占
現人数百五拾三人
〔内 脱力〕
〔一当番 脱力〕

二組〔地頭脱力〕
〔二組脱力〕

一飯野
現人数百貳人
〔宮崎県えびの市〕

地頭
二組
大野 多宮

合一組

物主
伊集院周八

内
一当番
合一組

物主
江田五郎左衛門

内
一当番
合一組

一手
伊集院周右衛門

内
一当番
現人数百拾九人
一須木同占

一手
二組
地頭
江田五郎左衛門

内
一当番
現人数百貳拾五人
一吉松〔松島郡〕

一手
一組

一同占
加久藤

一組
地頭

猿渡加左衛門

惣物主

比志島〔羅雅力〕静馬

現人数百八拾六人

〔曾於郡〕
一末吉

二組一手

地頭

友野 市助

内

一当番

〔羅力〕
一手半

大砲物主

高橋 要人

一松山
現人数百五拾四人

一内番

地頭一組
北郷浪江 脱力

一手半

現人数八拾六人

〔宮崎県北諸県郡〕
一勝岡

一手

地頭

肝付 〔兼西〕兵部

内

一当番

半手

合一組

物主

平田善太夫

現人数百八拾五人

〔曾於郡〕
一財部

一組一手

地頭

倉山〔久壽〕作太夫

内

一当番

一手

〔久〕

現人数百貳拾五人

〔宮崎県北諸県郡〕
一山之口

一組

地頭

櫻井 半蔵

内

一当番

〔一手脱力〕

合一組

物主

倉山〔久壽〕民五郎

現人数百九拾三人

諸縣郡

文久元年 (1861)

一高城〔北諸眞郡〕

一組一手

地頭

島津 藏人

合一組

物主

島津 矢柄

内

一当番

現人数百三十拾老人

一高崎〔同上〕

一手半

一組

地頭

川田 将監〔佐馬〕

三番

右一陣

現人数五百拾九人

一志布志〔曾於郡〕

五組

地頭

川上 但馬〔久馬〕

内

一当番

合一組

物主

坂元権之丞

一当番

内

惣物主

末川 久馬〔久馬〕

一高原〔宮崎県西諸眞郡〕
現人数百五拾人

一組

地頭

島津 矢柄〔久計〕

一当番

内

物主

志岐正兵衛

内

一当番

一手半

一〔府属郡〕
現人数式百四拾人
一串良

二組

地頭

内

一当番

島津

(久色)
登

一組

大砲物主

島津権五郎
(久重)

現人数三百九拾人

(曾於郡)
一大崎

三組一手

地頭

末川久馬

内

一当番

物主

一組

末川主税

現人数三百四拾八人

(肝属郡)
一高山

三組

地頭

伊集院
(久道)
巨

内

一当番

物主

一組

現人数百四拾三人

(同上)
一内之浦

一組

名越左源太
(時敏)

内

一当番

現人数八拾九人

(同上)
一始良

一手

地頭

島津仲

内

一当番

合一組

物主

名越左源太

右一陣

四番

一御城下

右一陣

五番

六組

文久元年 (1861)

櫻島
現人數五百九拾壹人

五組一手

一田代(肝屬郡)

一手

地頭

平田伊兵衛

内

地頭
伊集院隼衛

内

一当番

一組

惣物主

一当番
現人數八拾七人

半手

一当番

一組

川上欠越龍衛

地頭

一手
島津欠越壬生

物主

加藤權兵衛

内

半手

一敷根
現人數貳百貳拾六人

二組

地頭

堀四郎左衛門

一当番
現人數百三拾八人

一組

地頭

川上龍衛

内

一当番

一組

大砲物主

川上左太夫

一当番

合一組

物主
(一手貳九)

現人數八拾四人

物主
伊集院金之進

現人數八拾壹人
(曾於郡)
一百引

一組

地頭

二階堂源太夫
(行光)

內

一当番

合一組

地頭

島津

主殿
(久壽)

內

一当番

現人數五拾人
(廣屋市)

半手

物主

二階堂源太夫

一高限
(廣屋市)

半手

地頭

比志島静馬

一鹿屋

現人數百三拾五人

一組

地頭

穎娃

織部
(久壽)

內

一当番

現人數八拾三人
(曾於郡)

半手

內

一当番

一手

一恒吉
(曾於郡)

一手

地頭

現人數百七拾五人
(垂水市)

一牛根

一組一手

平田 靱負

地頭

蒲生郷右衛門

內

一当番

現人數八拾八人
(鹿屋市)

半手

內

一当番

一手

一大始良
(鹿屋市)

一手

合一組

文久元年 (1861)

物主

諏訪八郎次

右一陣

六番

現人數八百四拾八人

一國分

八組

地頭

(マ)

内

一当番

一組

惣物主

榊山

相馬(久慈)

一当番

一組

大砲物主

谷川次郎左衛門

一当番

一組

物主

島津 右近

一当番

一組

物主

現人數四百拾七人

一贈吹郡

四組

岩下新太夫

地頭

町田孫太夫

内

一当番

一組

物主

伊東正兵衛

一当番

一組

物主

(マ)

右一陣

七番

現人數五百拾九人

一清水(國分市)

五組

地頭

島津 伊織

内

一当番

一組

惣物主

伊集院 巨

一当番

一組

大砲物主

郷原

(直)直

一当番

一組

物主

伊東仙大夫

現人数百貳拾人

(給良郡)一栗野

一組

地頭

相良 治部(長)

内

一当番

一手

現人数百八拾人

(同上)一横川

一組一手

地頭

鎌田愛太夫(政造)

内

一当番

一手

合一組

物主

鎌田 十五(政正)

現人数貳百拾六人

(同上)一踊

二組

地頭

(マ)

内

一当番

一手

現人数百三拾四人

(同上)一溝邊

一組

地頭

土岐平太夫

内

一当番

一手

合一組

物主

田中七右衛門

現人数貳百五拾九人

始良郡

文久元年 (1861)

一山田

二組

地頭

柳 正之進(丞)

現人数五拾九人
一馬關田(宮崎県えびの市)

半手

地頭

本田休兵衛

内

一当番

一手

内

現人数百八拾三人

一当番

半手

一日當山

一組一手

現人数七拾式人

地頭

吉井源七郎

一吉田(同上)

一手

内

一当番

一手

内

(含一組脱九)

物主

四本休左衛門

内

一当番

半手

右一陣

現人数八拾四人
(肝属郡)

現人数八拾九人
(倉橋市)

一佐多

一手

一倉岡

一手

内

地頭

高橋 縫殿

地頭

島津 相馬(久平)

内

一当番

半手

一当番
現人数四百五拾九人

半手

一帖佐〔拾良郡〕

四組一手

地頭

島津周防殿〔宗鑑〕

内

一当番

一組

物主

〔マ〕

現人數七百六拾人
一蒲生〔同上〕

七組一手

地頭

島津圖書殿〔久治〕

内

一当番

一組

物主

〔マ〕

一当番

一組

物主

〔マ〕

一当番

一組

物主

〔マ〕

四八九ノ六

合諸郷九拾貳外城

合現人數貳万五千八百四拾六人

但五拾歳以下貳拾歳以上

内当番人數六千六百六拾貳人

差引残

壹万九千六百八拾四人

四八九ノ七

高壹万九千貳百九拾三石余

現人數六百八拾六人

一加治木〔拾良郡〕

島津岩松殿

四組

当番

高壹万五千四百石余

現人數四百四拾五人

一垂水

三組一手

当番

島津讚岐殿〔實政〕

高壹万三千七百九拾九石余

現人數貳百貳十人

一今和泉〔指宿也〕

三組一手

当番

島津安藝殿〔忠政〕

文久元年 (1861)

高老万四千六百石余
現人数貳百七拾壹人

一重富〔給良郡〕

当番

三組一手

島津周防殿

高千五百八拾五石余

現人数百六拾五人

一蘭牟田〔同上〕

当番

半手

樺山相馬〔久喜〕

高四千八百石余

現人数百七拾人

一入來〔薩摩郡〕

当番

一組

入來院〔公惠〕 恰

高四千貳百五拾五石余

現人数百八拾七人

一鹿籠〔枕崎市〕

当番

一番

喜入攝津〔久喜〕

高三万五千三百石余

現人数貳千五拾七人

一都城

当番

八組一手

島津〔久喜〕 元丸

高八千百石余

現人数貳百拾貳人

一平佐〔川内市〕

当番

二組

北郷〔久喜〕 作左衛門

高老万千六百石余

現人数千五百六拾人

一熊毛郡〔熊毛郡〕
一種子島

当番

三組

種子島〔久喜〕 鶴袈裟

高六千五百六拾四石余

現人数百四人

一日置〔日置郡〕

当番

一組一手

島津〔久喜〕 又六郎

高老万五千七百五拾五石余

現人数四百四人

一薩摩郡〔薩摩郡〕
一宮之城

当番

四組

島津〔久喜〕 圖書殿

高三千石余

現人数百拾人

一吉利〔同上〕

当番

一手

小松〔清藤〕 帶刀

高貳千貳百石余

現人數五拾壹人

一黒木(薩摩郡)

当番

一手

島津隼人(久慈)

高貳千八百石余

現人數百四拾貳人

一佐志(薩摩郡)

当番

一手

島津壬生(久慈)

高五千九拾九石余

現人數百三拾人

一華岡(鹿屋市)

当番

一組半手

島津信濃

高千七百五拾五石余

現人數五拾人

一新城(垂水市)

当番

一手

島津主計

高四千七拾九石余

現人數九拾八人

一永吉(日置郡)

当番

一組

島津主殿(久慈)

高六千九百石余

現人數百七拾貳人

一知覽(川辺郡)

当番

一組一手

島津右門

高三千石余

現人數百五拾七人

一市成(曾於郡)

当番

一手

島津仁十郎

高四千石余

現人數百四拾九人

一末吉岩川(曾於郡)

当番

一組

伊勢隼之助

高五千三百七拾五石余

現人數三百三拾四人

一喜入(播磨郡)

当番

一組

肝付左門

高九百九拾九石余

現人數貳百拾貳人

一石谷脱丸

当番

一手

町田監物(久慈)

高千五百石余

現人数百六拾壹人

一南村(鹿屋市)

当番

半手

鎌田仙千代

合私領貳拾壹

外二

持切在三

現人数八千貳百貳拾九人

但

五拾歳以下貳拾歳以上

四八九ノ八
時宜次第、急々御人数被差出儀モ候ハ、左之通り西目・

東目両手ニ分レ、

御城下并諸郷出陣、

従西目 御先手繰出、

一御城下 三組

内一組大砲兼帯

一出水 二組

一阿久根 一組

但出陣之儀定次第、

御城下并出水・阿久根へ 御陣触ニテ出立、

従東目 御先手繰出、

一御城下 三組

内一組大砲兼帯

(官給東諸具郡)
高岡(同上) 二組脱力

綾(同上)

穆(同上) 佐

右二ヶ郷ニテ一組

御先手計ニテ不相濟、

御出馬亦ハ 御名代相究候ハ、東西之依便西目諸郷、

(御旗本之時ハ東目諸郷脱力)
御跡備ト成リ、東目 御旗本之時ハ、西目諸郷 御跡

備ト成ル、則

御先手 御旗本 御跡備ニテ、所謂諸侯三軍之意也、

従西目 御出馬、

一御城下 一陣

御旗本

一西目諸郷 六陣

一先陣

一右陣

一左陣

一後陣

一遊陣

一 小荷駄陣

右六陣之内、時宜次第第二ハ西目私領一陣相加ル、

一 東目諸郷 六陣

惣大将旗本

一先陣

一右陣

一左陣

一後陣

一遊陣

一 小荷駄陣

右六陣之内、時宜次第第二ハ東目私領一陣相加ル、

(以上脱カ)

文久元年酉十二月

御軍役方

御家老座印

(西目東目繰出御備組(東京大学所蔵)にて補註)

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
文久元年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」(紙数七十七枚)の記載あり〕

四九〇 参考 島津家旧制軍法卷上鈔

〔島津忠良〕
日新主ヨリ 惟新主迄ハ、軍法略戦法誠ニ事実スケレ

タル事多ク、世ニ流布スル甲州武田派軍学(中古ヨリ三家ノ師範アリ、則チ園田与藤次・右松十郎太・田中清右衛門是ナリ、新古三派トナレリ)ノ教習ノ上ニ超過シタル事、舊貫發揮又ハ薩州追遠録ニ見テ明カニ弁ヘ知ルヘク、其御法略舊記ノ中ニ僅計リツ、所々ニ雜ヘ見、或ハ古老ノ口碑語り伝ヘ、或ハ諸士ノ家々ニ先祖ノ事ヲ伝ヘ

残ス中ニ見ヘタル実事ヲ取集合セ、此軍法卷ニマトメ記シヨクナリ、後世ノ士能ク口授シ、委シキヲ記憶シ、慶長十八年御人數賦帳ヲ詖味セハ、御旧制ノ軍法ハ委シク会得スヘキナリ(嘉永五年ノ部ニ記ス)

一 武備ノ大本ハ、治世ヨリ国家之危キヲ忘レズ、武備ヲ全フスル事、政事第一ノ肝要ナリ、

其武備ノ大本ハ、孫子五事之首ニ出セル道之□ノ旨趣ニテ、ツヅムル処国君之主將タル人道ヲ行フ材徳ニ帰ス、
〔忠良公〕
日新主ヨリ 惟新主御三代君主之道義ヲ專ニ御

心掛テ、実行ヲ行ヒ給フ事、今世迄モ語り伝ヘ、御余沢ヲシタヒ仰キタテマツル、得テ知ルヘシ、薩州之士臣身命ヲ抛チ、忠功戦功ヲ励ミ鋒之勇銳ナリシハ、御三代君主之御仁徳ナル故ナリ、

一 每朝武経一篇宛御聴聞御常式之事、

日新主ヨリ御初メナリ、每朝御膳之前ニ、武経七書ヲ一篇ツ、御近習之士、又ハ出家ニ読マセ御聞アル事、毎朝カハラサル御常式ニ定メ給フ也、如是七書ヲ御熟得アル御神慮ヨリ出ル故ニ、政事武備軍制方略ニテロカナル事ナシ、
〔鹿児島市〕
福昌寺之住持タリシ大川和尚之師匠和尚ハ、貴久主御前ニ時々伺公シ、七書ヲ講仕タル人ニ

テ、大川モ七書ヲ能ク習ヒ伝へ、(鎌久公以下全シ)龍伯主 惟新主ニ召

サレ、毎朝七書之侍講ヲモ勤メタリシ事度々アリ、出家ニ七書ヲ能ク学ヒ得タルハ、大川之師匠弟ナリシ故、

後ニ(家久公)黄門主之御代ニ文学詩学ハヤリ、党ヲ結ヒ大川ヲ

ネタミ譏ル人多クアリシト、古老語り伝ヘアリ、日

新主ハ六韜計、貴久主ハ三略而已ヲ御伝ヒ有シヤニ

言伝ルハ、六韜モ三略モ、七書之全部之中ナル事ヲ弁

ヘザル俗説ナリ、日新菩薩記之中ニ、七書ヲ用ヒ給

ヒシ事見ヘタリ、

一御詠歌四拾七首御実行之鑑ト仕給事、

貴久主ヨリ以来、日新主伊呂波御詠歌ヲ日夜拜見有

之、其通ニ御実行ヲ励ミ給フ御常式ナリ、

貴久主之御意ニテ、諸士七書ニテモ四書ニテモ、講釈

スル度コトニ、終ニハ古ヘノ道ヲ聞テモト有御歌ヲ、

高ラカニ三返唱ヘ奉リテ、書物ヲヲサムルヲ習ヒトシ、

評定所今ノ御家
老座ナリ上段之正面ニ、額ニイロハ御歌之中三首

ヲ書記シ、家老毎日出席ノ時、右之御額ヲ拜シ奉リ、

御歌ヲ吟シ奉ル御法ナリ、

(百二十外城ト通稱ス)一諸外城土着之士、材器之地頭領主ニ任シ、常ニ陣ヲ国

中ニ布キ給フ事、

口伝

乱世ニハ薩州計リニ限ラス、他国モ遠近之郷ニ士卒ヲ

居住土着サセ、武備手配ヲ其郷ニ定置タル事、

(家康公)権現様御時代、参河・駿州之御政令御仕置ヲ書記シタ

ルヲ以知ルヘシ、他国ハ治世ニ至リ武備廢亡シ、国王

驕奢タメニ財用ヲツイヤシ、郷々ニ居住スル余多之士

卒ヲ扶持スル事アタハス、或ハ小身大名ハ国替・所替

ナト有之、イヨイヨ困窮スル故、我居住スル城下許ニ

僅成士卒ヲ居住サセ、遠近之郷々ニハ百姓ヲサヘ、

年貢銀ヲ取納ムル用ニ、代官・郡代ナト号スルヲ頭ト

シ、僅少人数之士役人ヲ城下ヨリ交代シテ遣ス事ニ定

メ、郷中ハ百姓町人計居住スル故、何方之郷ニテモ一

揆ヲコルカ異賊船入来ルカ、急変到来之時城下ヨリ其

防キ方ニ、士卒ヲ其郷ニ出シ遣スト、急変ノ間ニ合サ

ル埒モナキ手当ヲタノミトス、寛永年中吉利支丹一揆

起リシ時、肥後天草モ肥前島原モ急ニ一揆ヲ取鎮ムル

事能ハス、賊ニ思之俛ニ乱妨サセタルヲ以知ルヘシ、

吉貴主御代ニ甲州新流ニ引合セ、異国船手当方方カヲ始ム

ル時ニ、御領国ノ中何方之浦ニモ異国船入来ノ時、其

浦之注進ヲ聞キ、鹿府ヨリ用人・家老其浦ニ急キ行キ、

其跡ヨリ五段備人数ヲ鹿府ニテ飾リ揃へ出シ遣スニ、
 数冊之手當帳ヲ書記、其浦ヲ乱シ奪フ爲ニ入来ル異賊
 船ヲ、唯居シテ待合スル木偶人ニスルモ、家光將軍之御
 代コノ方之、治世・乱世之事実ヲ思ヒ知ラサル浪人輩
 之設テ出ス甲州新流ヲ、惑信スル大成アヤマチ也、御
 当国ハ 光久主ヨリ以来、治世ニモ乱世之武備ヲ改メ
 易ヘス、百式拾余外城之郷々ニ、士衆ヲ古来之俵ニ土
 着アル事、他国ニ双ナキ良政軍賦ナリ、 惟新王御代之
 乱世ニハ、地頭・領主ト成ル人ノ才能・器量・人物ヲ選
 事第一ナリ、譬ヘハ出水・高岡・志布志杯之如キ自他
 之サカヒ目、又内場ニテモ広地多勢之外城ハ、新納武
 州・山田越前(有信)・伊十院久春(集)・樺山久高・桂忠防ノヤウ
 ナル、勝レタル智勇将材ノ人ヲ地頭ニ任シ、内場外城
 トイヘトモ、其外城郷之士民ヲ心服セシメ、政令ヲ取
 捌キ、不意ノ急変ニ応スル手配、武備ヲ治ル程之材智
 ハタラキアル士ヲ挙テ地頭トシ、才覚カシコキ平士彦
 人ツ、相談介添役ニ附ル事、今トキ長島(出水部)・飩島(薩摩部)之地頭
 ニ相談役アリ、出水・高岡・大口杯之地頭ニ地頭代ヲ
 附ル、今ハ其形計残レリ、如此何方之外城郷々ニ其材器
 ニ当ル地頭居住シ、御在城之鹿府ハ中軍帷幕ニシテ、惣

外城ノ本ヲ統(マ)ヘ用フルハ、治世・乱世トモニ六拾四陣、
 遊兵式拾四陣之八陣ヲ常ニ国中ニ布キ設タルカ如シ、
 一譜代恩顧之諸士内外無隔御仕、百姓以下ニ御仁愛ヲ加
 ヘ給フ事、
(島津) 忠久主ヨリ 大玄院綱貫主之御代迄ハ、三州之士ニ近
 習・側廻・外様ヲ分給フ事無之、御直ニ詞ヲ掛給ヒ、
 内外隔ナク手広ク召仕ヒ給ヒシ故、ヲノツカラ士臣思
 附奉ル情厚ク、君主之危難ニ臨ミテハ賞録ヲモ貪ラス、
 一命ヲ抛テ忠功ヲ尽シ、君主モマノアタリニ近付召仕
 ヒ給フニ依リ、外様諸士ノ中ニ国家之用ニ立材能ノ者
 アルヲモ見出シ、其材器ニ当ル役職ニ任シ給フ也、薩
 州之先君而已ニ限ラス、他国ノ明君ハ士ニ近習・外様
 ヲ分テ、近習之士計ニ親ミ、外様士ヲ他国人ノ様ニ遠
 ケヘタツルコトナシ、日本国ヲ総ヘ給フ 公方家ハ、御
 請代・御旗本ト、時之勢ヒニ屈服スル外様大名ヲ各別
 ニ分ケラル、ハ、最サモアルヘキ事ナリ、僅カニ三四ケ
 国以下ヲ領スル大名高家ノ閭君愚主、太平之世上ヲ僭
 スル驕奢ノアマリ、身ノ分限ヲカヘリミス、公方家之
 格法ヲ見マネ、譜代恩顧ノ諸士ヘ側廻・近習・外様・
 表方ヲ分ルハ、挑灯ニ釣リ金甚ツリアハス、愚蒙沙汰

之限り成事ナリ、薩州ニテ、吉貴主御代ニ初マリ、(幕府ニ物ヒタルル部トモ)鹿府之諸士ニ近習・外様ヲ引分ケ、外様士ヲ異国人ヤ穢多乞食士ノヤウニ遠サケイヤシメ、下士之情君主之側迄モ通スル事ナシ、外様士之取扱ヲ家老・与頭ニ打

マカセ置、君主ハ士ノ風操モナキ奸倭新參之側廻而已ニ親ミナレ、僮姓凡下卑賤ナル妾婦ヲ貴重ニ取上、驕佚ニホコリ、文飾ヲ専ラニスル無道不明之政法ヲ差止、古政古風ニ立カヘラサレハ、上役人ニ便ヲモトメ、鼻肩ナキ外様士卑賤ナル中、マレニ国家ノ一役一用ニ立ツ士アリテモ、譏リネタミヲ蒙リ一生困窮ニクチ果、若又国家ノ乱變ヲコル時ニ、仮令譜代旧士ノ子孫ナリトモ、一生之中君主ヨリ直ニ一言ノ情モナク、越訴ヲ禁シ、次第取次六ヶ敷、邪曲之法格ヲ以テ、マケ屈セラレタル諸士、

(義弘)惟新主御代ノ如ク敵ノ鉄砲先ニ出テ、命ヲ捨テ働ク者老人モ有ベカラス、吉貴主御代ヨリ今ニ至リ、如是弊風国家敗亡ノ基タル事ヲ知り、諫ヲ云タル役務ノ人老人モナケレハ、何某ハ取捌キ能キ宰職、何某ハ学材アリ抔ト称拳スレトモ、孰モモロモロ進ミモロモロ退キ、身ノ榮名ヲ失サル事ヲ心掛ル愚臣ニシテ、タトヒ

君主自僣ニテ諫ヲ用サル事ヲ知ル共、我役務アタリマヘノ諫ヲ言ヒ、君主ニ悪マレテハ役務ヲ退ク忠臣ノ大夫ニ非サル事明ナリ、

一戦亡之士卒、毎秋御自身御回向其老親幼子御扶助之事、

附每朝諸士之武運御祈念アリシ事、

福昌寺ニ戦死シタル士卒ノ姓名ヲ板ニ書記シ、檀上ニ

掛置御弔ヒ有事ハ、日新主御代ニ始ルナリ、

大清院様 綱久主御代迄ハ、(毎年七月三日大施餓鬼ト唱大祭アリ)毎年七月福昌寺ニ御参詣

アリテ、出家和尚ニ、御側ニテ戦亡ノ姓名ヲ高ラカニ

読マセ、御自分ニソウ萩ノ枝ヲ御取り、水ヲ手向ケ、御

回向アル事御旧式ナリ、其日ハ戦死シタル士卒之(父子

妻娘迄モ、客殿ニテ御賄ヲ下サレ、士ニ仍テハ御前ニ

召サレ御盃ヲ給リ、御中間以下諸士ノヒサヲヤシ家来

モ、戦死シタルモノ、父子ハ、スベテ下座ニテ御賄ナ

リ、上下共一汁二菜サヒ飯ナリ、今時寺々之施餓鬼ニ

サヒ飯ヲ用ルハ此例ナリ、御先代ハ、太守様御留

守ノ時ハ各別、御在居之時ハ御直ニ御出アル例式之所

ニ、御名代ヲ立給フ事ナシ、何事ニモ御名代ニテ御ス

マシアルハ近代之事也、又高四五拾石以下戦死シタル

士衆之家、老親・幼穉者ニハ、御養料ヲ給ル御法也、

予カ先祖(徳田)與兵衛朝鮮ニテ戦死イタシ、三才之男子アリ、
 十六七才迄御養ヒ料ヲ被下、其中重キ痘ヲ煩ヒタル時、
 粉粟ヲ御紋付之小椀ニ入レ、(義久)國分上様ヨリイタ、キタ
 ル事有、其椀残り侍ル、又、(忠良)日新主ヨリ、(義弘)惟新主迄ハ
 御看経所ニ於テ、(二御流儀アリテ諸士卒ノ武運ノ御祈念有脱カ)毎朝別事御例式ナリ、
 右五ヶ条、

此五ヶ条ハ、日新主、(貴久)大中主、龍伯主、惟新主、御実
 行アリシ故ニテ、三州之士民心服シ奉リ、幾度モ強敵
 堅陣ヲ打破リ、御危難ニ及ヒタル時、身ヲ捨防キタル
 士卒多ク、今ニ至テ三ヶ国全ク是当家武備手当手配ノ
 根本ナレハ、後世ニ至リ第一ニ再興ヲセサレハ、誠之
 軍制ニ非ス、
 吉貴主御代ニ、(久寛)島津主殿甲州新流ニ依テ、(嘉永元年軍)新ニ異国方
 賦改正(一、異国船方略シ、御軍方ト改ム)ヲ始メ、手當帳数冊ヲ編集スル中ニ、カヤウ成武備手
 当之大本結要一言半句モ見ヘス、是ニテ手当ヲ始メタ
 ル輩ハ、御先君他ニ双ヒモ無キ手厚キ御手当武備始終
 全カリシ事ヲ、夢ニモ知ラサル事慥成証拠ナレハ、異
 国方ワツラハシキ手当ハコトコトク急変ノ用ニ不立、
 唯紙筆ヲ費ス帳面迄ナルヲ知ルベシ、
 一修身の要、

コノ部ニ伊呂波御詠歌武拾六首ヲ出シタルハ、此御詠
(四十八首ノ内)
 歌ヲ身ヲ治ル鑑トシ、今日ノ心意ヲ糺シ、言行ヲ顧ミ、
 智仁信勇敵ノ材徳ヲ成ス修行之為ナリ、
 一軍賦分數、此部ハ薩州乱世之古人数手与ヲ分ケ定ムル
 法ヲ記スナリ、

一御府城・外城之士、伍人與ヲ定メ、二伍合テ什人一列、
 御関狩古法之如シ(廢藩ニ至ル迄折節執行セリ)

口伝

御府城ハ鹿兒島御城下ナリ、外城ハ百武拾余外城ナリ、
 御城下士モ外城居住ノ士モ統テ五人ツ、ニ与ミ、其五
 人之中耆人ヲカハリ合ニ(伍長ノ通稱)小主取ト定ル也、其伍人與ヲ
 二ツ合セ、人数什人(什長ノ通稱)ヲ一小組トスル也、

惟新主御時代乱世ニ士五人與アリシ証拠ハ、今ニ諸外
 城衆中士ニ伍人與ノ古法残り伝リタルヲ以知ルベシ、
 治世ノ今、鹿府ノ御城下士ニ、伍人組合之法絶果タル
 ハ、吉田氏老翁語リシ、

光久主御代ニ出水之地頭山田昌巖、山田民部ト号シタ
 ル時、出水士ヲ六組ニ分タル法ヲ御取、鹿府士ニモ六
 与ヲ分ケラレ、大組六組ノ中ニ小与ヲ拾番ニ分ケ、最
 初ハ其小组限ニ取捌ク事ニ成タルヨリシテ、士之伍人

組合ナクシテスム事ニ成ル治世之誤也、然レトモ近キ比迄モ御関狩ニハ、伍人とヲ二ツ相与ニシテ、什人と一小組トスル古法残レリ、惣テ陣隊ノ根本ハ、士卒ヲ五人宛ニ組法ノミニテスム事也、伍人とヲ五モ六モ其余モ組合セテ大組一体屯陣トスル事ハ、其所人数之多少ニヨリ其將ノ好ミニ依ル事ニテ、定数ヲ必ス一定ニ究メ、並ヲ揃ニ不及スム事故、薩州ニテモ他国ニテモ、乱世ノ時一組式拾五人五拾騎一備ナト、一定ニ定メタル事ナシ、孫子ニ衆ヲ治ル事寡キヲ治ル如キハ、分數是也ト説キ、人数幾人宛ニ究メ、定数ヲ言サル活法ヲ翫味スヘシ、寛永年中此方之治世、他国浪人甲越流^(盆田上杉二流)ノ軍学ヲ妄作スル時、一組ハ式拾五人、一備ハ五拾人宛ト定メ、鉄砲・弓・騎馬・長柄・大将旗馬ト段ヲ分ケテ定メ、人数ノ並ヲ揃ヘテ、五色ニ書分タル審備ノ凶形ヲ設ケ伝授ニスルヲ、薩州ニテモ文蒙ノ愚人共習来リ伝ヘ、凶形ニ引合セ、一同ニ人数並ヲ揃ル事也ト拘リ泥ミ、古代御人数賦帳何方ノ地頭・領主モ、人数不同ニ並ヲ一様ニ揃ヘサルヲ以テ、埒モナク無法成事ト誤リ、鉄砲・弓・足輕・長柄ノ下卒備、頭大将ノ手廻リ家来トマセ合セ次第、式拾五騎備・五拾騎・十五

騎・拾騎備杯ト号テ、薩隅日三州何方之備モ一ヤウニ人数並ヲ揃ルコトニ煩ハシク書記シ手当ニ定ムルハ、根本他国浪人治世ニ妄作シタル備・凶形ニ拘リ泥ミ引合ニスル迄ノ事ニテ、後世ノ乱世薩州ヨリ軍ヲ出シ、実時ノ用ニ不立、反テ六ヶ敷多疑ノ惑ヒト成ル徒事也、実ニ軍ヲ出ス時ハ、御城下士モ外城士モ大本之五人組合ノ法嚴重ナレハ、慶長十八年御人数賦帳ノ如ク、諸外城之備人数賦帳之如ク、諸外城之備人数何方モ不同アリテ、一様ニ揃ヘストモ差支ナクスム事也、

一諸士自身ニ鉄砲ヲ携ヘ、家之子郎從ニ手鋒或ハ弓矢・太刀ヲ持セ、身脇ヲ離レサル御法口伝、附殿役夫之事、今時之俗士薩州乱世之士卒九州入^(九州邊洋討從へ玉ヒシヲ云)、朝鮮陣ニテ剛強ニ敵之大軍ヲ打破リ勝タルハ、何故ナリシ事ヲ思附サルナリ、薩州之士卒悉ク鬼神ニハアラサル故、恚人ニテ什人ノ敵ニ切勝ツヘキヤウナシ、日本ニ初テ鉄砲始リタル種子島同国ニテ、士卒上下鉄砲ヲ手練シタル事、其^(熊毛郡)時代之他国人ヨリ大ニ勝レ、城下士モ外城士モ都テ專ニ鉄砲ヲ用サセ給フ御軍賦手組ニテ、九州朝鮮之戦毎ニ大小鉄砲ヲ以テ、敵ノ大軍ヲ能ク打挫キタル故ナリ、其手組之軍法同格之士衆中一人モ不殘、自身ニハ五六

文目玉以上之鉄砲ヲ携ヘ持チ、膝(腰)ヲヤシ大小刀ノ家来ニ柄六七尺之手鋒鎗、又ハ弓矢・太刀之得道具ヲ持タセ、主人之右脇ニヒシト離レサルヤウニ引付置、敵合之始ニハ諸士一同ニ鉄砲ヲ操拔ニ打詰切合セリ、ツマル時ハ家来ニ持セタル武具ヲ把、スキ間ナク敵ヲ打挫ク、是 惟新主之御時代、薩州之戦習手クセニシテ、他国流備先ノ足輕ニ鉄砲弓ヲ放タセ、ソレヲ塩合ニシテ跡ヨリ士替リ合ヒ槍ヲ突入レ、戦之次第トハ大ニ相違シタリ、是ヲヨク会得セサレハ薩軍之古戦ハ事実ヲ知り難シ、家士郎從トハ乱世之古法ハ高式拾五石ニ附キ、大小ヲ帶スル家来一人宛ヲ扶持スル法ナリ、今時百姓之子共ヲ身代錢ヲ与へ、年季拘ニスル老本差シ之下人トハ各別ニテ、譜代其主人之家ニ從ヒ来リ、幼少ヨリ主人ノ膝本ニ居(生ヒ乎)ソタツ故ニ、ヒザヲヤシト言ヒ、家居ハ別所ニアリ、時々主人ノ処ニ来リ動ルヲ掛ケ被官ト云フ、イツレモ乱世古ノ俗諺ナリ、式拾五石以下之少高ニテヒザヲヤシ・掛ヒクハンノ家来ナキ士ニハ、御蔵入百姓小共ノ中、勇力正直成ヲ殿役夫ト号テエラヒ置、平日半役ニシテ分チタルヲ一人ツ、士ニ付テ、家来ノカハリ得道具持トスル御法也、古代ヨリ小番・

大番之ヒザヲヤシ家来大小刀ヲ帶シ来リタルヲ、吉貴主御代江戸町家魚姓之名越右膳(信濃・越前公生母ノ兄)御家老勤之時、小番士之ヒザヲヤシ・掛被官ヲ家来ト号テ、大番士之家来ヲ一本差シノ下人ト定メ、御道具持衆之子孫ヲ町人ト同様ニ片書キ苗字ニ改替テ、薩州古法ヲ破リタリ、小番ハ田高拾貳町之軍役衆、其以下之軍役衆大番也、知行高多少ニ依テ小番・大番同位格之事、

口伝

龍伯様御代國分屋形之御番帳ニ、小番・大番之分チアリ、其時代ニ小番ト号スルハ、田高拾貳町高ニシテ三百石ヲ所持シ、主從拾三人ヲ自分物入リヲ以、出軍高ニ掛ル出物モ多キ士也、是ハ引分ヲカサレハ軍役之賦混雜シ、割方ムツカシキ也、三百石ヨリ以下百石貳百石ヨリ下軍役出物少キ士ヲ大番トシ、大番ト分ル小番・大番ハ、知行高多少之割ヲ以テ分タル事ニテ、小番士ハ武功有ル上士、大番士ハ武功少キ士ト云フ事ニハ非ス、武功名高キ逆瀬川豊前兵衛・竹内備前・濱田民部入道榮臨・中馬大蔵(重光)・押川強兵衛・指宿清左衛門其他名高キ勇士、知行高百石貳百石以下ナレハ、都テ其子孫大番士ニテ、又小番家之先祖コトコトク武功名高キ士ノミ

ニ非サルヲ以証トスヘシ、龍伯様御代乱世ニ小番・大番ハ、軍役ヲ出ス高割ヲ以番組ヲ分タル迄之事ニテ、軍陣戰場働キマヘ召仕フ処、又同伍ニ与合ハスル処ニ位格カハル事ナク、一等ニ同位格ニ用ヒ給ヒタル御法也、吉貴公之御代島津主殿(久曾)・名越右膳(長徳)両老之取計ヒヲ申出、小番家之子孫又ハ父地頭職ヲ務タル士ノ子、現高三百斛之軍役ヲ出シツトムル事アタハサル少高ノ士共ヲ、家筋ヲ以小番士ト定メ、惟新様ノ御軍賦ニ無キコトナルニ、他国ヲミマネ騎馬組上士之ヤウニ究ムレトモ、家格計ニテ現高三百石之軍役ヲ出ス事モ、一疋ノ乗馬ヲ自家ニ飼フ事モ調サル小番士多ケレハ、治世之格式マテナル徒事ニテ、用ニ立ツ事ニ非ス、軍ヲ出ス実時ノ手配ト成カタク、家筋ハ何ヤウニテモ大番士ノ中ニ、高三百石之軍役家士拾貳人ヲ出シ、乗馬ヲ常ニ飼置ナル士ヲ選テ、小番士ト成スヘキ事也、主殿・右膳相談ニテ、古代御人數賦帳之古法ニ見ヘサル事ナルニ、大番士ヲ他国之下士歩士ト格ヲ引下ケ、鹿兒島諸士之備大頭ヲ大目附家老ニ究メ、君主御手廻御道具持衆之子孫ヲ、他国ニテ備毎ノ先ニ出ス弓鉄砲之足輕ニ成シ、外城士之次男三男一等級ヲ下シ、足輕ニ

交ヘ使フ法ニ改メ易タルハ、九州朝鮮之諸所ニテ勝功幾度モ御試ミアリシ、慶長十八年御人數賦帳手組之古法ニテハ、今ヨリ以後ノ軍戦ニ、勝利ナシトイフタシカナル見究アルヤ、其見究メナケレハ、薩州ハ薩州ノ手組古法ニテスム事ナレハ、治世ニ他国流ノ備手組ニ改メ易ルハ変乱ノ時ニ至リ、三州ヲ危亡スル入ラサル物好キナリ、薩州ノ古代而已ニ限ラス、他国ニテモ士之持高屋敷ハ、治世・乱世共ニ忠勤武功之恩賞トシテ君主ヨリ賜ルナリ、外ニ求ムヘキ道ナキ天下ニ一統ノ法ナルニ、薩州近代ニ至リ諸士持高ヲ勝手次第ニ私ニ商リ買ヒ、或ハ借金之質物ニ遣ハシ、或ハ内々ニテ陪臣町人(幕末元年檢高改正ノ条參看)ニ壳渡シ、納米ヲ取ラセ、士高主・屋敷主之名タヒニ立ツ埒モナキ事ニ成リタル故、町人ヨリ成リアカル新(名)參物、又ハ道義ニ迎レ私慾深キ士、金銀ヲ出シ知行高(通カ)ヲ心マカセニ買リ集メ、百石以上之高持ニ成者多シ、乱世ニ至リ如是者トモ騎馬組上士ニナリ、士ノ節操ヲ正ス材能ノ士ハ、時勢ヲ得ス貧究成ヲ下ナル歩士ニ用ヒシハ、怨ミ憤リ薩軍ノ鋒先キ勇銳ナルヘキ様ナシ、故ニ私ニ高ヲ商売スル者ヲ、死罪・流罪ニ処スル法ヲ嚴ニ定メ、今迄之間私ニ買集メタル高ヲ糺シ、上ニ取

上ケ、士之忠勤武功ニ応シ与ヘ取ラセ、小番・大番位格ヲチカヘス一等ニ使ヒ用ル、乱世先君之古法ニ立返ラスシテハ、三州ヲ全クスル武備手当立ヘカラス、

小番・大番共ニ御免ナキ衆、戰場ニ乘馬無用ノ事、奥ニ出ス御軍法提ニ、戰場ニ於テ御免ナキ衆、乘馬停止スルヘシトアリ、是ニテ薩州先代ニハ騎馬組ト云定メナク、

騎馬専用トセサル事ヲ知ルヘシ、日新主御代ヨリ以來所々之戦ヒニ馬入騎戦ヲ用タル事ナシ、御人數賦ニ

人數幾人・乘馬壹疋ト書載タル士アマタルハ、軍役家來十二人ヲ從ヘ出ル小番ニアラス、大番組之士ニテ

モ兼テ馬好キニテ、大坪流ノ馬術ヲ惟新主御代ニハ大坪流ヲ專ニ習ヒタリ、其時代鎌倉馬術ノ事多分ミヘサル也、光久公海老原ニ大坪流ヲ御授アリ、鎌倉流ノ上師範タリ、大追物ハ光久公御初テ御再興ナリ、乗習ヒ、自馬

ヲ飼ヒタル士乘馬ヲ從ヘタキ事ヲ、其身ヨリ願出タルヲ御免許アリシ士也、此士モ戰場マテ趣キ出ル中途ヲ

乗り用テ、戰場敵前ニテハ孰モ歩立ニ成鉄砲ヲ用ヒタリ、光久主 公方家御老中酒井殿ニ対シ、変事起ラ

ハ御一手ニテ御奉行相成ヘシト、ソ忽ニ被仰出タル事アリ、ソレニツキ 公方家軍役之定メ、高老萬石ニ騎

馬式拾五騎ヲ出ス賦リ、七拾五萬石ニハアタリ前騎馬諸頭役之乘馬ヲ除キ、外二千五百騎ヲ出ス事、其時代ニ

サヘ調サル事ヲ、伊勢貞政・島津霜臺ナト甚セシタル事アリ、夫レハ薩州ハ関東表之遠境ニ軍兵ヲ出ス事、

海ナラテ調カタキ国成故、軍役騎馬千五百騎ノカハリ薩州ニ州ハ薩州ナル故ニ、大小鉄砲之歩兵三千人ヲ出スカ、水軍之太船ヲ出

船船航海ノ術ヲ学ハシメタリ、故ニ水軍トモ云フヘキ練習ノ法アリタルヲ云スヘキ事ヲ予メ兼テ 公方家ニ申、其手配スレハスム

事ナリ、公方家軍役定メ、高老萬石ニ騎馬何疋・鉄砲何挺・弓何張・槍何本トアル法ニ引合セ、薩州ヨリ賦

ヲ、寛永八・九年之比書記タル帳面ニモ、平士之騎馬ヲ千五百騎ノ数ニハ多ク不足シタル、此賦帳ハ実時之用

ニ立タス、薩州旧制ニ相違スル故用ヘカラス、龍伯主御代之軍賦法年々姓名ノミヲ書改メ、慶長十八年ノ

御人數賦帳之法、薩州万代不易ノ手当手配トスヘシ、委ク別冊ニ鈔解アリ、

一 外城地頭御名代島津家古今旗章圖参照スヘシ正之旗昇宅本乘馬一疋宛、但諸役ハ並ニ御免衆乘馬ハ格別タルヘシ、

地頭ハ君主之御名代ニ成テ、其外城ニ居住スル士ヲ下知スル重キ役職ナル故、御人數賦帳ニ、何方ノ外城ハ

人數幾人・昇宅本、乘馬一疋ナリト書記セリ、人數ハ其外城ノ士ナリ、他國ノ如ク士足輕上下ヲ分ル事無ク、士計成故士惣人數ヲ書タル也、昇一本ハノホリ旗上ニ

十文字ノ御紋、下ニ其地頭ノ定紋、其外ニタトヘハ國分・谷山ナド、其外城名号ヲ大文字ニ染出シ、地色ハ青黄赤白黒何色ニテモ好ミ次第也、此ヲ昇旗トイフナリ、乘馬一疋トアルハ地頭一人之乘馬也、此外ニ三四五疋モ馬数ヲ書記タル外城アルハ、其外城ノ地頭相談役之士、或ハ中古郷土年寄ト唱へ、文久元年旧唱ニ復ス嘜・与頭、或ハ乘馬御免アル士之乘馬ナリ、差知レタル事故、御人數賦帳ニハ見ヘサレトモ、惣人數ノ糧用玉菓類ヲ、御外城ノ百姓并寺社後家中ヨリ割付出ス人馬ニ負ハセ、(庄屋ノ上ニアリ)功才・庄屋・郡見廻ヲ宰領ニ附、地頭之相談役又嘜ノ中ヲ惣司ニシテ、跡ニ從フ事何ツ方ノ外城モ同事ナリ、大外城モ小外城モ士衆中ノ人數ヲ手分ケ備ル軍賦之御法ハ、薩州ハ統テ五人組ノ士而已ニテ、土何ツレモ自身手ニ鉄砲ヲ携ヘ持、手鋒槍ニテモ薙刀弓ニテモ、我々ノ得道具ヲ膝ヲヤシ掛被官ノ家来或ハ殿役選夫ニ持タセ、主人士ノ身脇ウシロニ附法也、其士衆中ヲ小外城小人數ナレハ一段一面ニ並(前卷改正六十人ヲ一隊トス)ヘ備ヘ、大外城百人以上之多人數ナレハ、五六拾人宛ニナラヘ備ル也、大外城モ小外城モ士衆中ノ中、什人二三十人モスクヤカナルヲ、地頭之身脇ニ附ル事、鹿府太守君之御手廻リ陸小姓衆ニ準スル例也、惣テ一陣一

備之士鉄砲一色ニテ、夫々ノ得道具ヲ兼テ持タスル御軍賦ナリシ故、他國甲州流ノ如ク是ハ弓鉄砲ノ足輕組、是ハ騎馬組・長柄組ナトモ分タル事、御人數賦帳ハ勿論、御舊記實録ニ曾テ見ヘス、カクノ如ク口能無ク、埒ノ明キタル古代御軍賦ノ旧法ナレハ、今ノ時ニテモ其一外城ノ中ニテ、士衆中ノ手配備ハ一兩日アヒタニモ調フ事ニテ、然カモ 日新主御代ヨリ 惟新主御代迄之間、幾度モ勝効ヲタメシ試ミタル事の実ナル御軍賦ヲ、吉貴主御代島津主殿頭取ニテ、薩州ニ古来ヨリ無之テ(久實)スミ来リタル事ナルニ、騎馬・槍与・長柄・弓・鉄砲足輕組トハ、分テメツラシキ新法ニ改メ易、何方ノ外城・私領モ一ヤウニ五段備ニムツカシク取立テ、手當帳ヲ初メタルハ、韜略孫呉ヲ学ハサル故ニ、御国乱世ノ旧制軍戦ノ事実、治世ニコシラユル甲州流ノ妄制ヨリ大キニスクレタル事ヲ、弁ヘ不知也、

一私領ハ領主又内之士卒ヲ以一備ニ与ム事、古来ヨリ三州中一所一郷ヲ領スル大身ノ人ハ、鹿府又諸外城地頭ノ例格ニ準テ、我家士ヲ以一軍一備ニ与ム也、北郷家杯之如キ大身ナレハ、私領ノ中一郷ヲ宰スル地頭アリ、是ヲ又内之地頭ト云フ也、(私領内ニ設ケ故ニ内ノ字ヲ用フ)

一外城私領広狭ニ依リ備人数多少有事、

御人数賦帳ニ書記ス所、多人数ノ外城モアリ、至テ少人数ノ外城モアリ、其外城土地之広狭ニ依リ、居住スル士アリ限之人数成故、何方モ多少不同アリ、不同ナケレトモクルシカラス、タトヘハ家来什人ヲ従ユル人ナレハ、家来什人ニ鉄砲ヲ携サセ、得道具持之供什人ヲ附レハ、コレニテモ一小備ノ用ニ差支ナク、多人数ノ備モ亦カクノ如シ、必ス何方モ何ホトツ、ノ人数ヲ一同ニ揃ヘサレハ、戦ヲナシ難シト云フ事、諸国共ニ乱世ノ古ニ曾テ無キ事ナリ、然ルニ今ノ手当鹿府諸外城・私領何レノ処モ、十騎備・十五騎備・式拾騎備ト同シ形ニ飾立ナト究メタルハ、治世ニ妄作スル甲州新流ノ凶形ニ拘リ泥ミタル埒モナキ事也、

一主將御側前後左右御府城諸外城陸小姓衆、
(君主ヲ云)
但御供番時ニ依リ鬮取作法、

口伝

主將ハ 太守君ナリ、御先代ヨリ 大玄院綱貴主御代迄御在府城鹿兒島之諸士ニ、御側廻表方外様トノ差別無キ故、御出陣之時ハ、鹿府諸士諸外城士之中ヨリ勇銳壯健ナル士ヲエラヒ出シ、数百人陸小姓衆ト号テ、

太守君之前後左右ニ分ケ配リ、幾重モカサナリ御供ナリ、児小姓・茶道坊主・納戸役・荷物役・祐筆文者・医者スヘテ陸小姓衆ノ中ニマシヘ加ル法ニテ、別ニ御側廻・御近習方ノ役人ヲ別ニ分ツコトナキ御法也、御人数賦帳ヲ見テ証スヘシ、御供番鬮取作法トハ、出軍アル時 太守君之御側ニ供奉スル陸小姓、其エラヒニモレタル人ウラミ憤ル事アル故、勇健スクヤカ成若士共ヲ集メ、鬮取ニテ誰モ究ル時アルヲ云フナリ、 光久主御側ニ躍若衆ト号テ、三拾余才ニモ及フ壯健ナルスルトキ者ヲ、多人数召仕レタルト云ヘリ、是出軍之時陸小姓之例也、 綱貴主夏御道中アリシ時、御供ノ者共数日炎暑ニ難儀セリ、明日昼休之所ニテ、酒ヲ飲セヨト御用人ニ被仰付、御用人御供ノ者トモ多人数ナル故、先ツ御供廻リ計ニ御酒ヲ被下、イカ、ト伺ヒ奉ルニ、御気色変シ、供ノ士モ都テ譜代ノ者ニテ、側廻リ外様之差別ヲシラス、其何方迄ヲ側廻ト云フ事ヲ申ソト御叱リ有テ、外之役ニ被仰付、翌日諸士家来下人迄モ残ラス酒ヲ被下タリ、右之御用人ハ御國ノ地ニ着シタル日、切腹シ御断ヲ仕タル事アリ、御鷹野御狩之時ハ、輕キ士共ニモ直ニ御詞ヲ被下タル事毎度アリシ

ト也、吉貴主御代ニ始テ御近習・御側廻ト表方外様ト御分ケ、表方外様ノ輕キ士ハ、御通路筋御目通り近キ所ニ罷出ヲモ御キラヒ、御側廻ニ勤ル人ハ外様士ト心安ク交ル事モ御禁制ナリ、御側ニ勤ル諸役人段々多ク成タルモ、(近代ニ至リテモ益々シカリキ)此代ニアラタニ編集シタル手當帳ニ記ス、御旗本備驕リツメタル当世江戸御參勤道中行列之次第ニ、御側廻之諸役人ヲ其俣ニ取難ヘ今變時ニ至ルハ、公方家之命令ヲ受、一方ノ武將ト成給フヘキ御身分ヲカヘリミス、古不道ニ驕ヲキハメ亡タルハ公家公達ノ如ク、御手足ノ勞ニ代ル喰ツフシノイタツラ者ヲ、余多供奉スル事ニ定メタル太平ノ治世ト急變起ル時トハ、大ニ相違スル常變ノ弁別ヲ知ラサルナリ、古老ノ語り伝ニ因テ校フヘシ、昔九州迄モ御威勢フルヒタル龍伯主御時代御仕向、今時ニタクラヘテハ十分ニ一分トモ無ク、万事疎略ニ手輕ク御手廻リモ陸小姓衆計ニテ事濟タルニ、後世變亂起ル時ハ、龍伯主御時代ノ如ク可成事必定ナレハ、大平ノ日久シク驕ツメタル吉貴主御時代ノ仕向ニ引合セ、新ニコシラヘタル御旗本備ノ次第、凶形委シキ品悉ク後世變亂起ル時ノ実用ニ立サル事無疑、

一主將御旗本備而已鉄砲弓槍御道具持衆加之法、諸外城地頭ノ備ニ不加之事、

他国流ニテ云フ諸備毎之先ニ出シ並ヘル鉄砲弓足輕ト号ル卒、乱世之時薩州島津家へ曾テ無キ事故、慶長年中之御人數賦帳及ヒ

中納言家久主御時代以前之舊記實録ニ、足輕之事不見也、日新主御時代ヨリ惟新主御時代ニ、御道具持衆又御兵具衆ト言ヘルハ、諸士衆中ノ次男三男力アル者ヲ選ヒ、田高五反高ニシテ拾式石五斗ヲ給リ、太守君ノ御旗本備御手廻り中ニ加リ、御道具ノ御鉄砲・弓・御槍ヲ携ヘ持、供奉スル役ニテ、御旗本ニ懸ル敵難儀ニ及ントスル時、御道具之鉄砲ヲ發シ、弓ヲ射、槍ヲ入レ、敵ヲ挫キ崩シ、御側ヲ堅固ニ守衛シ奉ル用ナル故、君主ノ御旗本御手廻而已ニ附奉ル御法ニテ、諸外城地頭之備ニ加リ附事ナシ、然共島津家之軍制大小砲(天砲ハ一貫及五ヲ最大トス)ハ、鹿兒島諸士・諸外城衆中士何レモ自身ニ携持テ敵打挫キ間節セリ、詰ルタテハ家來ニ持タセ、後ニ引付置タル短兵ノ鋒ヲ取テ切入ミタス戰習タルニ因リ、別ニ鉄砲・弓ヲ用ル為ニ足輕ト号ル者ヲ、備毎ノ先ニ用ルニ及ハス、薩州ノ軍制戰習ニテハ弓・鉄砲ノ足輕ハ入

用ナク、他国流ノ備毎ノ先ニ出ス足輕ニ鉄砲ヲ打タセ、弓ニテ替リ合ヒ、其跡ヨリ長柄槍ヲ突入レ、軍制トハウラハラニ相違シタル事ニテ、薩州ノ用ニ立サル也、薩州ノ用ニテ、ス格別ニ相違シタル甲州流ノ軍制ヲ以、薩州古代ノ戦習ニ引合セントスル故、論スル所コトコトク座上ノ理ツメ空論ニ成レリ、今ノ時世ニ古代御道具持衆タリシ子孫、他国ノ足輕ト同シヤウニ成リ下ケタル源由来ヲ糺スニ、治世ノ初 黄門家久主江戸御參勤ニアル時、福島正則ヲ初諸大名之供廻リ行列ニ、備毎之先ニ出ス弓・鉄砲ノ足輕ト云フ事、下歩ノ卒アルヲ御見マネアリテ、御道具持衆之子孫ヲ、他国大名ノ方ニ有ル足輕之場ニ用ヒ給ヒタル事アリ、夫ヨリ 大玄院綱貴主之御代迄ハ、御道具持衆トモ足輕トモ一定セス、アリ来リ足輕トハ云ハス、道具衆ナト、云人モ有シ、吉貴主御代ニ至リ、御家老名越右膳江戶町家胤^(信忠)姓ナル故、御先代 太守君ノ御手廻ヲ守衛シ奉ル御道具持衆ト云フ事ヲ、知ルヘキヤウナキ故、道具衆ヲ改メ他国ノ足輕ト同前ニナシ、島津主殿^(久吉)御道具持衆ノ子孫ヲ、備毎ニ加ル足輕ニ用ントスレトモ、根本御道具持衆ノ家部少ナク、甚人数不足スルニ行ツマリ、外

城士ノ次男三男位格ヲ下シ、足輕ニマシヘ使フ法ニ、手當帳ニ記載シタリ、タトヒ治世ノ平日ハ足輕ニ引下ケ使フトモ、變時ニ及テハ御道具持衆ノ子孫幾百人有トモ、御手廻之御道具ヲ持タセ、大小鉄砲ハ諸士衆中自身ニ携持、乱世ノ古法ニ御復セサレハ、薩州ノ軍備古代之如ク全ク不可調、

一 役分官道、

此部ハ薩州乱世ノ古役者ヲ分タル事ヲ出セリ、詳ナル事左ノ如シ、

一 諸外城地頭御名代重キ任職ナリ、

外城ノ地頭ハ一郷外城ノ地ヲアツカリ領シ、君主ノ御名代ニ成テ其郷ノ政事ヲ取捌、急変ニ応スル武備ヲ能スル將ノ材器ナル人ニ非レハ難勤、役職中ニモ敵国境目ヲ守ル地頭、大口ニハ新納^(忠元)・高城ニハ山田^(信介)・出水ニハ樺山如キ、到テ材器備ラサレハ難成、鹿府ニ居住スル御家老ヨリ重キ任也、

光久主御代迄ハ地頭何レモ其城々ニ移居シ、鹿府ニハ月代リニ交代シテ重役ヲ務タリシカ、八朔ニ歴々太刀進上モ、家士役人ヲ以差上ル旧例ナリ、領主ハ秋領^(私カ)、地頭ハ我預ノ郷々ニ移居ル故也、

吉貴主之御代ヨリ此古法廢亡シ、他国居付ノ輕卒或ハ卑賤ノ凡下者、或ハ幼少ヨリ御側廻リニ奉公シ、コハキ物ヲ取ル者ハ、著計リ成者重役ヲ勤メ、武道貞実ナル事ハ夢ニモ知ラス、唯座上之取廻リ利口發明成者共、其身ハ鹿府ニ居ナカラ、諸外城之地頭ニ任セラル、事ニナリタル故、地頭ハ狩夫銀(每郷狩夫ト唱フルアリ、其実軍事夫卒ノ一名ニシテ、治世ニハ用ナキ故金ヲ以テ役代トス、之ヲ地頭ナル者ノ所得トシタルヲ云フ)・郷役人ノワイロ進物ヲ取り、子孫小番家ニ成ル用迄ニ成タリ、古代ノ如ク郷々ニ將材ノ地頭ヲ居住サセ不置レハ、タトヒ御城下太公望・孔明再来シタリトモ、三州ノ急変ヲ取り静メ難キ事ハ、兎女子モ弁ヘ知ル事ナルニ、遠郷外城之浦々ニ異国船俄ニ入来タル時、其郷外城之地頭ヲ差置、何タル事トモ云ヒ渡サス、急変之間ニアハサル事ニ騒キ乱レ、鹿府ヨリ異国方用人家老行列ヲ揃ヘ飾リ、其浦ニ差越シ手当ニ定メタルハ、実事ノ用ニ立サル事ニ紙筆ヲ費シ、異国方掛ノ役々ヲ徒ニ扶持スル迄ノ用也、

一御家老時所ニ依リ地頭領主ヲ兼ル事、

(實久義久義弘)
御三代ノ御時代地頭ニ任セラレ、一所領地ノ主タル人、

御家老ヲ兼務シテ勤ルニハ、居住シタル地頭所、又ハ私領ヨリ一月替リニ御城下ニ交代シ来テ勤メ、或ハ私領ノ主ハ我嫡子カ弟ヲ番代ニ立、私領ヲ治メ軍役ヲ勤サセ、其身ハ御城下ニ居住シテ御家老ヲ勤ル御法也、龍伯主 惟新主御代ノ御家老智計人ニ勝レ、無二ノ忠臣成リシ新納旅庵(長住)・阿多長壽院(盛壽)之外ハ、大身歴々之士御家老也、綱貴主御代迄ハ輕キ士立身シテ御家老ニ成タル事ナシ、吉貴主御代ニ、初テ江戸町家之豆腐屋ナリシ名越氏ヲ御家老ニナシ給ヒ、其後又平士タリシ平岡内匠(玄匠)ヲ御家老ニシハラク被仰付、是ヲ初トシ、世ニ希成材能モナク、大ナル忠節武功アラハレサル下士モ、御氣ニ入ル者ハ超ヘ出テ御家老ニ成ル事多クナレリ、野村兵法御役者町田越中守・伊集院參河守・川田駿河守(義明)・岩切參河守(信明)如キ材智深キ賢ク貴重之人ニ不非ハ、其役ニ当ラス、御三代主御時代御役者ハ、町田・伊十院(マコ)・川田・岩切ノ人々ハ材智賢ク韜略之學識モアリ、其上地頭ヲモ給ル貴重ノ士、諸人モ尚信スル人ニテ、時ニ依テハ軍神祭祀ノ取行ヒ、日取ヲエラヒ吉凶勝負ノ占候ヲ成シ、君主諸將ト密謀ヲ談スル重キ役職ナリ、是ヲシラサル今ノ俗士、他国之軍配者ト同シヤウニ心

得アヤマリ、或ハ常ニ佛像壇具ヲ飾リ愚人婦女ヲ誑シ、イノリマシナヒ以テ産業トシテ、口ヲ糊スルイヤシキ山伏巫覡ニカハリヘキ、今時ノ兵道者之ヤウニ、昔之御役者ニモアリタル筈ト思フハ甚敷取違也、今時ノ兵道者野村・有馬之平士伝授スル祈リ呪咀ヒハ、光久主ノ御代ニ肥後ニ欠落シ居タル石澤某ト言真言坊主カヘリ、又ハ有川新右衛門杯へ被仰付、真言宗或ハ山伏ノ行法呪文印結之端々ヲ取マシへ、御制作アリタル事ニテ、惟新主御代以前ノ御軍制ヲ委ク伝ヘ知り、七書ヲ学フ事ハ夢ニモシラス、古代之御役者トハ大ニ相違シタル事也、三略軍中ニ巫覡ヲ禁スル事ヲ説キタリ、今時之卑賤成ル祈リマシナヒ、ナマ物知りノ兵道者ヲ軍中ニ召連行カハ、愚成士卒疑惑ヲ起シ愚(近代ニ至本記ノ如シ弘化・嘉永ノ頃最モ甚シ)ニスル秘謀行レス、大ナル軍中ノ害ヲナスヘキ也、

一御使衆後ニ御使番衆トモ云、一番二番三番左右備ニ加里、附法又御旗本ニモ勤ル、

口伝

慶長十八年ノ御人數賦帳ニ御使番衆ト書タルハ、其以前ノ御使衆ノ事也、此役ハ軍陣戰場ニテ、地頭・領主

之備毎ニ忝式人ツ、加里居リ、御旗本備ニ時々往来シ、御下知ヲ受ケ、地頭・領主ニ申達シ、勿論他国敵方ニモ御使ニ行ク役也、光久主御代迄ハ下々少々ノ事ハ、タトヘハ郡方・船方・町方・山方何レモ御請持ノ奉行・頭人、御家老ニ直談シテ取捌キ、重立タル事ハ其受持ノ奉行御家老ト同時ニ御前ニ罷出、直ニ太守君ノ御聽ニ達シ、中ニモ諸士賞罰浮沈ニ掛ル事ナレハ、何時モ次第取次ムツカシカラス、太守君ニ御家老ヨリ直申上之御法也、他国ニ違ヒ諸士モ奉行頭人モ、六百年以來安危ヲ俱ニシタル御譜代ノ旧臣膝ヲヤシトモ成ル故、御家ノ有ラン限リハ如斯古法ニテ濟ヘキ事也、吉貴主御代宰相ノ位ヲ御望アリテ、公方家ヲ御譜代大名同前ニ御崇敬アリ、薩隅日ノ小国三州ニ琉球島之物成迄取集、漸ク七拾万余(實際六拾余万石ニ琉球諸島ヲ合セ七十万石余ナルヲ、竿入レ増高アル云々ヲ申立、七十七万八百石ニ充テタリトテ、格式座席ヲ進メタリ、其事由ハ本紀ニ概説シタルカ如シ)ニ及、其分限ニテ、掛クラヘ難キ公方家仕向法格ヲ御見マネ、御先代之旧政ヲ悉ク破リ捨、御自身ハ昼夜御近習廻リノ者トモ而已ヲ召仕レ、表向外方ノ政事取捌キヲ御家老ニ任セ置、右ヤ

ウ籠略成書キ上ケテ稀ニ御開キ有ル迄ニテ、下々ノ受持夫々ノ奉行頭人ヨリ申出ル事ヲ、御用人取次ニテ御家老ニ達スル新法ニ改ムル故、上下ノ情ニ通スル事甚遠ク成リタルニヨリ、今時之人用人ハ、家老ニ達スル取次役成故、古代ノ御使衆トハ各別ニテ、君主ノ御使衆ニハアラス、家老御使衆ナリ、又御使番ト云ハ今時諸大名之方ヘノ音物贈答ノ事ヲ取計ヒ、是非々々ニ使ヲ勤ルタクヒノ事ニハアラス、伊勢平左衛門(熊本県)天草寺澤家ニ御録返ノ事ニ附キ、御使者ニ被趣タル如ク、至テ重キ役一器量アル忠臣ニ非レハ難勤役也、

一横目衆諸備ニ加ル事、右御使番衆同前也、

此役ハ地頭・領主之備毎ニ、式人ツ、加リ居、其備ノ戰事諸士ノ戰功能否ヲ見届ル檢使同前成ル重キ役ナリ、此横目衆モ御使番衆モ諸備迄ニ限ラス、太守君御旗本備ニモ加リ居、檢見ヲ兼ツトムル也、
(實久義弘)御三代主御代ニ大目附ト号ル役ナシ、今大目附ノ役職ハ御家老ヨリ兼帶ニ勤タリ、尤横目衆ノ上ニ頭役ノ目附ナシ、今時之御目附ハ大目附ノ下ツカヒ、其下ノ横目ハ御目附ノ下ニテ、頭役大目附ノ下知ヲ受ル法成故ニ、諸備ニ檢見ニ加ル前代横目衆ノ任職用ヒ難シ、

一御兵具奉行之内、御鉄砲奉行・御弓奉行・御槍奉行ト分テ号ルハ、御旗本御手廻リ御道具ヲ支配スル故也、諸外城地頭ノ備ニ此役儀ナシ、前代ハ軍奉行幾人共記ス、前条ニモ解スル如ク、惟新主御代ニ、他國ノ様ニ備毎之先ニ出ス鉄砲弓ノ足輕ナシ、太守君ノ御手廻リ前ニモ左右ノ脇ニモ後ニモ、數百挺ノ鉄砲・弓・槍ヲ持タル御道具持衆ヲ分配シ守衛シ奉ル、其支配ヲ司ル頭ヲ御兵具奉行ト号ル、其内鉄砲ヲ持道具持衆ノ頭ヲ御鉄砲奉行ト号ヲ分ル、弓槍モ同シ事也、諸外城地頭備ニ御道具持衆ヲ加ル事ナキ故ニ、地頭備ニ此奉行ナシ、御人數賦帳ニ見ヘサルヲ以証トスヘシ、然ハ地頭領主ノ備ニハ、先ニ出ス鉄砲弓之足輕ナキ事弥明ナリ、御人數賦帳ヨリ別ノ舊記ニ、軍奉行ト有ハ此兵具奉行ノ事又ハ御使衆也、帖佐彦左衛門杯軍奉行ナリシト云説有ルハ是也、甲州流ニ武者奉行軍奉行ト云フ・御旗奉行・御槍奉行ト云フ至テ貴重ノ奉行ナリト云フ事ハ、島津家ノ乱世ノ古代ニ嚆ニモ無キ事ニテ、舊記實録ニ見ヘサル他、其手當帳家部少シ小人数成御道具持衆ノ子孫、足輕ニ外城郷士ノ次男三男ヲ雜ヘ加ヘテ、鉄砲長柄ノ足輕ト成シ、五段備ニ組ヲ定メ、如是格ヲ下シ、曲ケ附

テモ鹿兒島諸士之五段備ハ調フベシ、諸外城郷士嫡子モ五段備ニ組ム法ナレハ、外城ノ五段備ニ加ル弓鉄砲長柄ノ足輕ハ、何方ヨリ雇ヒ来ルヘキヤ、天ヨリ降リ地ヨリ出ヘキ様ナシ、平日貧福ニ依リ役儀之高下アレトモ、古来ヨリ同位同格之傍輩ナリト思ヒ込タル郷士トモ、命危キ變時ニ至リ、鎗ヲハ馬ニ乘リタル傍輩ハ、士之場ニ並フニ、鉄砲弓ヲ持郷士ヨリ一等等下成ル足輕ニ、槍脇下切込ニハ、功名ニ成ラサル弓鉄砲ニテ、真先ニ出働カント云郷士一人モナキ事必定ナレハ、一ニ足輕鉄砲弓、二ニ騎馬槍士、三ニ長柄足輕、四ニ大将、五ニ供馬旗ト定テ、甲州流五段備ハ薩州之諸外城ニテハ、組定ムル事一切調フベカラス、然ハ薩州ニテ乱世之用ニ立サル甲州流ヲ学ヒ、弓鉄砲ノ足輕ニ先ヲ払ハセ、其跡ヨリ士一番槍ヲ入レ、高千石モ取ル高名ヲ顯ハサント志スハ、世渡リニハ利得ナレトモ、武学ニ於テハ大馬鹿ノ至リ也(罵詈雑言又甚シ)

一御旗奉行、正ノ御旗(一本杉又、唐圓形之區)御の居ヲ宰ル役也、

正ノ旗トハ旗本備之目印ニ定ル時毎之旗、十文字之白旗、一本杉御の居是ヲ御道具衆ニ持セ、御兵具奉行之内ヨリ是ヲ宰司スル也、根白坂(天正十五年日州ニテ上ノ坂ト戦フ)逆寄ノ如キ

ニハ、武勇ノ士ニ御旗ヲ真先ニ從ハシテ進メ給ヒ、御戦略アリ、日夜暇ナキ(近世ニ至リ本記ノ如シ、兵道家有馬掌レリ)御先代之乱世ニハ、旗竿ヲ伐リ旗ヲ製スルニ祈念マシナイヲ用事ナキ事ニテ、關ヶ原合戦ノ前ニ、阿多長壽院紙ヲ切サキ青竹ニ挟ミ、采幣(盛澤)ヲ用ヒラレタル類ヒニテ濟タリ、近代兵道者日ヲ撰テ旗竿ヲ伐取、旗幕ヲ製スルニ日ヲ選ミ返シ縫セス様之物イハヒマシナヒ事アルハ、治世ニ小笠原流ヲ見真似タル事ニテ、島津家乱世旧例ニナキ事ナリ、今ノ手当ニ成ル御手廻ニ、持旗並旗五色ノアマタノ旗数本ヲ立飾ルハ、亡ヒ果タル武田流ヲ似セタル物ニテ、且敵遠町ヨリ打大砲ノ目当ヲ設ルモノ也、惟新主御代ニハナキ飾リト知ルヘシ、

一昇奉行ハ町々雑人ヲ役シ、サ、スル飾之昇数本ヲ宰ル役、

口伝

慶長十八年御人數賦帳ニ、諸浦町ノ町人共ヲ課役ニ仕ヒ、数十本ノ昇ヲサ、セ備々へ用ル、其宰ル頭昇奉行ハ士也、此飾昇之用ニ立ル事ハ先ケ条ニ解ス、百式拾余外城之町廻リ合ヒニ申付ル、最強力之者ヲ申付也、

一廐奉行御乘馬中間衆ノ頭ナリ、

御駕籠カキモ御草鞋取床机持モスヘテ、大小カサシ戦ノ用ニ立中間ナリ、

一太鼓・貝之役、御兵具持衆持ノ陸小姓衆之中ヨリ是ヲ宰ルナリ、陸小姓衆ノ中ヨリカハリ合ニ、御側又ハ御先ニテ太鼓ヲ打ナリ、是等ノ事ハ差知レタル事也、今ノ俗士 御先代之乱世ニハ金鼓貝ヲ御用ヒアリシ事モナク、無法成事ノ様ニ論スルハ甚アヤマリナリ、

日新主 大中主七書ヲ專ニ御熟読アリシ事ハ慥成伝アリ、龍伯主御兄弟モ其通也、悉ク見ヘタリ、乱世肝要ノ急務サシ当リタル事ナレハ、御三代主是ニ御心付用ヒ給サル事有ヘキ様ナシ、然トモ今ニ伝ノコル士

踊ノ太鼓ハ朝鮮ヨリ御帰朝之時、伏見迄之間拍子ヲ御打タセアリシ事、今ニ道筋ノ他国ニテモ語り伝ルナリ、其太鼓則朝鮮陣中ニ御用ヒ有シ陣太鼓也、世ニ流布スル御家譜及世録記杯ニモ、勝敗ノ大ヤウヲ記シ、御内

談秘密ノ御謀略又其時代常ニ二三ツタル人数組合、太鼓・貝類ノ珍ラシカラサル事ヲ書シ残ス事ナク、生残タル故老ノ覚ヘ聞ク杯モ、我身ニ覚ヘタル事聞タル事ヲ書留迄ニテ、道来ル差知レタル事ヲ書記シタル事ナ

キハ、仮令ハ当世有来御仕向諸人モ見馴聞馴レ、珍シ

カラサル事ヲ悉ク書留置人ナキカ如シ、其上新納又左衛門始テ他国甲州流軍学ヲ伝ヘ来リ、教ヘ広メタルヨ

リ、此方ノ愚俗スヘテ 御先代ノ軍制戰鬪ハ、田舎風ニテ事タラスト見下ケ、風俗ニ化スル故、タマタマ稀ニ語り伝ル御軍略旧制ヲモ取奉ケ、尊信スル人ナク今ニ至リ、御先代乱世ニハ、人数ノ組合伍法金鼓旗ノ令モナク、無法無制ナリシト譏ルハ、愚蒙邪説ノヒカ

言大成妄論ナリ、甲州流ノ祖師信玄一生之内ニ、日新主程ニ学識実行有ヤ、惟新主程ニ度々大軍ノ敵ト戦ヒタル事アリヤ、薩軍伍制分数金鼓節制之良法無シ

テ、九州所々ノ戦ニ勝ち全ク軍ヲ自国ニ帰シ、又朝鮮ニ趣キ大明数十万ノ大軍ヲ破リ、中華迄モ恐レ称スル武名ヲ震フ事ヲ得ヘキヤ、是ヲ推シテ弁ヘシラサルハ、武ヲ学ハス文蒙愚昧ナル故ナリ、

一 御荷物衆、

口伝

是ハ太守君ノ御用具・御衣類ノタクヒヲ宰ル役ニテ、治世ニテ云フ御納戸方ノ役人ナリ、御先代ハ近習外様ノ分チナキ故、此役モ陸小姓衆ノ内ニコモルナリ、一玉葉奉行ハ御兵具奉行同格也、戦ノ時ハ後陣ニ守衛ス、

口伝

玉薬火繩ヲ長サ三四尺之箱ニ入レ、夫馬鞍左右ニ附ケ、又担子一荷ニ納メ夫持スル也、兵具持衆宰領ニ附ク人夫ハ殿役夫也、

一備并普請奉行兼帯三役有り、又御旗本御飯糧ヲモ宰司也、

口伝

^(三役トハ脱カ) 備押行ク時ハ夫卒ヲ從ヘ先ヘ行キ、路ノ障妨ヲハラヒ

除ク是一役ナリ、二ニハ備立配リ前ツモリノ時ハ、一与一備ヘ限ノ大形シルシヲ立ルナリ、三ニハ^(野色)笹陣・^(家信色)家陣ニテハ合ヒノ垣ヲ結ヒ、造作普請ヲ下知スル也、陣

所戰場ニテハ、御旗本備ノ糧用ヲ負ヒ持タセル人馬ヲ、宰司支配スル也、

一御台所頭代官役此下附衆アリ、

口伝

太守君ノ御食用調方ノ役ナリ、此下司ニ附ク役々汲炊調方ノ夫卒アリ、イツレモ職分ケアルナリ、

一賄頭附衆有り、是ハ士卒ニ兵糧ヲ食ハスルタキ出シ賄方ノ頭、今ノ代官ナリ、附衆ハ其下司ノ役々マカナヒ方ノ夫卒ナリ、

一兵糧奉行ハ御家老別職トス、

島津家ニテハ兵糧ノ用意差引ハ、平日ヨリ御家老咎人ツ、廻リ持ニスル也、小荷駄奉行ト云事薩州ニハ無キ事也(甲州流ニ出タル唱ナリ)

一大砲預支配之大將朝鮮在陣之時、^(樺山久高)樺山久高・^(下野守)伊集院抱節、^(マ)武主ハ有馬次郎右衛門也、

伊十院源次郎忠真朝鮮在陣中日記一冊アリ、其中ニ忠真ヨリ親父幸侃ニ遣リタル書状ノ写留ミヘタリ、^(樺山)樺山

權左衛門殿・伊集院野州兩人、大鉄砲与ノ頭有馬次郎衛門殿武主ニ被仰付置、敵ノ石火矢余多奪取候ツルヲ、此度大鉄砲ニマシヘ打出サレ、敵兵ノ火ツホヲ打破リ

被申候故、猛火起リ敵崩立申候ト書タリ、又別ノ書状留ニ、此方様軍場毎ニ大鉄砲多ク御打タセ御勝ニテ候、

持渡之大鉄砲計ニテハ不足候ニ付、又之便ヨリ二百目玉以上之大鉄砲何挺ニテモ、御遣シ方奉願候ト見ヘタリ、

一旗鼓形名、

此部ニハ 御先代軍陣ニ御用モ有シ旗的居・太鼓貝杯之事ヲ出セリ、一御旗本備正之御旗・時雨ノ御旗・十文字御紋之御旗、

此之外ヲ不用御法、

口伝

日新主 (實久心) 大中主御代ハ時雨ノ旗、龍伯主 惟新主御代ニ至リ十文字御紋之白旗、或ハ御紋無キモアリ、目印正之旗ハ一二本ヨリ外ハ、御持タセ給ハサル御定ノ御法ナリ、

一高麗新塞ニテ御製作一本杉御の居行軍戰場置所、

口伝

御兵具持衆古老ノ伝ニ、行軍押前ニテハ御乘馬ヨリ三間計先、又戰場ニテハ御先キ右之方七八間開キテ立ルヲ、御の居ノ習トスルト云ヘリ、

一 地頭衆ハ昇ニ合字、其外人數宰ル人ハ小昇又的居、

口伝

前ノ条ニモ解セリ、(地頭領主首印シ正ノ旗ハ昇地色ハ好次第三十五文字ノ御紋中ニ脱カ) 地頭・領主之定紋、下ニ其外城或ハ私領之名号ヲ大文字ニ染出シ、是ヲ合字ト云也、又自分ノ家来伍人以上ヲ従ヘ出ル士ハ、小キ昇ニテモ小的居ニテモ持タセ目印トスルナリ、

一 士卒ハ(被車馬)關ヶ原ニテケツリ掛合符ナリ、(正月十五日ノ佳節ニ用ル如キモノナリシト云)關ヶ原ニ士卒スヘテケツリ掛ヲサシテ、味方ノ合印ニ用ヒタリ、差ヤウハ一尺二寸以下ノケツリ掛二本ノ内、

一本ハ後之表帶ニ差、一本ハ右之脇前ノ方ニ差也、又九字ニ表スル九文字ハ御道具持衆ノ印、破軍七星ニ表スル七文字ハ御中間以下殿役夫ノ印ナリ、陣笠・半首・陣羽織・八徳杯ニ附ル也、(法被ノ通稱)

御先代ノ乱世ニハ、差物ヲ用テ合印ニシタル事ナシ、古具足ノ其俣ニ残リタルヲ見ルベシ、今世ニ残ル古具足ト云ハ、札ハカリ古代ノ物ニテ、(家心)中納言様御代此方ノ治世ニ、緘シ飾リヲ仕カヘタル物多シ、

一カサリ昇數本用捨、

口伝

是ハ前条ニモ出セリ、町人ノ内健カナル強力ノ者ヲ役シテ、サ、スル數本ノ昇ナリ、此用ハ備人數少キ方ニ昇ヲ余多マシ(交乎)ヘ頭シ、手厚ク多勢ノ様ニ見セ、又心ナキ所ニ昇ヲ多ク立置、敵ニ目当備配ヲムカヘサスル用ナリ、島原陣ヨリ昇ヲ多ク遣ハサルヘキ事ヲ云越シタル書状アリ、大砲石火矢ヲ專ニ用ル軍場ニハ、昇旗肝要ノ軍用具ナリ、

一 太鼓ハ士踊ノ太鼓、御旗本備ニ拾挺・地頭ノ備ニ三四挺ツ、徐・疾拍子之事、

口伝

太鼓ハ士衆ノ勇勢ヲ奮發スルヲ專用トシ、拾挺・三四挺ヨリモ多ク持タセ置、御道具持衆屯人ニ太鼓二三挺ツ、背ニ負セ手ニ持タスル法也、戰場ニ於テ時ニ依リ数挺ノ太鼓ヲキヒシク打立、勇勢ヲ發スル事有、徐ハシツカニ行キ拍子、疾ハ急ニ進ミ懸ル拍子ナリ、士踊ノ太鼓拍子ヲ兼テ打覚、手熟シタル者能ク知ル所也、鹿府士（禮）躍（禮）之太鼓躍ハ其為ニ作タリト思ハル、治世ノ推量也、乱世ノ事成故ニ軍陣ニ用來リタル太鼓ヲ、後ニ士躍（禮）ニ用タルナリ、鹿兒島士躍（禮）モ高麗ヨリ御歸陣アリシ始之比ハ太鼓計リ、後ニ鼓・鐘ヲ加ヘ歌モ段々ニ作リカヘタリト古老ノ物語ナリ、

一陣貝時ニ依リ御役者用之、

口伝

御三代主ノ御陣制合図ハ、多ク陣貝ヲ用ヒタリ、吹ヤウニ習アリ、綱貴主御代ハ、諸士ノ子共ニ貝ヲ吹習ハセ給フ仰出アリ、又隆信合戰杯（龜造寺）之様成大功ノ軍略ニハ、御役者直ニ貝ヲ用ラル、事アリ、

一日新主軍陣ニ御用ヒ有シ饒鉢、

口伝

加世田郷津貫中間村ノ真言宗ノ寺ニ、日新主戰場（マ）ニ

御用ヒ有シ、今時葬送之場ニ用ル饒鉢ナリ、此外鹿府御兵具所ニ納タル御先代乱世之軍器ハ、先年御屋形焼失ノ時ヤケ捨レリ、其以後甲州流調文ニテ、新製之軍器ハ実場ノ証トスルニ足ラス、

一糧用火薬、

此部ニハ御先代乱世之時、國中ニ兵糧米并焔焔ヲ不足ナク蓄ヘ納ル法、政之事ヲ出セリ、

一諸士之持高一斛納米ノ内、軍役賦米何程ツ、ニ究ル出米、諸外城之出物蔵ニ納置、摸合米（出米トモ唱）ト号テ毎秋新古ヲ

入易ヘ差引勘定シ、古残米ヲ売リタル代銀モ、諸士相中之軍ヲ出スニ、兵糧用金不足ナカリシ事、
（軍役銀トス、此法嚴重ナル故、古ヨリ薩州不時ニ嚴カ）

口伝

他国ノ士持高納（米カ）來ルハ無キ事ニテ、薩州ハ自家取納スヘキ納米之内ヨリ軍役軍賦ノ米ヲ出シ、モヨリノ蔵々作人百姓ヨリ納置、諸士相中之摸合軍用ノ蓄ヘトスルハ其形也、綱貴主御代迄ハ毎秋勘定ヲ遂ケ、御物方繰リ入レ、ツカヒ捨タル米ハ新米ヲ以堅固ニ返納アリ、此古法ヲ先キニ昔ノヤウニ再興セサレハ、軍モ急変モ士卒食用ナケレハ、一日モ調カタキ事サヘ知ラサル故、実用ニ立手当ニ相違ナリ、

一 焔焔ハ何方モ其外城々々ニ(家屋床下土ヨリ取ルノ法ナリキ)テタキ調へ置、火繩火器トモニ地頭ノ城ニタクハへ置之事、

口伝

薩州乱世之先代ハ、外城領主ノ私領何方モ其郷々ニテ焔焔ヲタキ調へ、其所ノ城本蔵ニ納置タリ、大小鉄砲武具モ、地頭替り合ヒ初手入之時、何程ト云フ員数ヲ上ニ書出シ、目付役之見分ヲウクル事御法也、近代ハ此法廢シ地頭替り合ヒ初手入モ、物入ナリトテ取止メニ成タリ、

一出軍役職、

一部ニハ何方ニモ軍ヲ出ス時ニ持越ス糧米并送人馬ノツモリ定スル古ノ御法ヲ記セリ、

一 持高拾貳斛五斗ヨリ以下無高之士ハ、出軍ノ日ヨリ三十日之飯糧送夫貳人、馬壹疋、外ニ陣中ニテ士貳人、間ニ詰夫壹人宛寺社方并後家中ヨリ割合出ス法也、持高拾貳石五斗以上貳拾五斛ハ主従貳人、五拾斛ハ主従三人、七拾五斛ハ主従四人、組(組)貳拾五石ニ付家来壹人ツツノ賦也、三十日自飯糧也、詰夫壹人、送夫貳人、馬壹疋寺社後家中ヨリ割出ス法也、

諸士持高拾貳石五斗、田ニシテ五反ノ士ヨリ以下無高

ノ士ハ、出軍ノ日迄之飯米モ陣場ノ所迄送持、夫貳人・馬壹疋モ出軍スル人、死タル士アトノ妻女、後家又寺社方ヨリ割合ヒ課役ニ出ス法ナリ、陣中ニテ右之士貳人、間ニ夫壹人宛、賄方ノ詰夫ニ出スモ後家中寺社方ヨリ課役ニ出スナリ、

但右之士カヘ武具持タスル殿役夫ヲノソム時ハ、詰夫ハ士壹人ニ附キ壹人宛殿役夫ヲ兼ル法ナリ、持高拾貳石五斗ヨリ貳拾四石九斗迄ハ、士其身壹人ニテ家来召ツル、ニ不及ナリ、三十日ノ自飯米ハカリハ自家ヨリ自分ニ持出、送夫貳人、馬壹疋、詰夫壹人後家中寺社方ヨリ出ス詰夫ヲ殿役夫ニ申カヘルトモ、其飯米モ自分ニハ不出也、高拾拾五石ニ家来壹人ツ、召連レル法、五拾石ハ家来壹人賦ノ士死、カハリナキニハ殿役夫ヲ附ル、家来貳人以上之士ハ附ニ不及法、殿役夫之賄飯米ハ其時士ヨリ出スナリ、貳拾五石ヨリ九拾九石迄ノ士ハ、三拾日ハ主従自飯米也、送夫貳人、送馬壹疋、詰夫ハ後家中寺社方ヨリ出スナリ、

一 高百斛主従五人是ヨリ以上三十日自飯糧、詰夫・送人馬自家ヨリ出ス也、三十日以後ハ何レモ摸合兵糧ヲ食

フ法、

口伝

高百斛ヨリ以上ノ士ハ、主従共ニ出軍之日ヨリ三十日迄ノ自飯米モ、送人馬モ、賄方ノ詰夫モ自分ヨリ出スナリ、出軍ノ日ヨリ三拾日過テハ、無高士モ高持士モスヘテ、年々出米ヲマトメ置、摸合方蔵米ヲ兵糧米ニスル故、高拾式石五斗ヨリ以下ノ士ハ、高持士ヨリ相中ニ糧用ヲ喰スルナリ、此摸合米喰仕マヒタル後日ハ、太守君御物方ノ蔵米ヲ下サル法也、古代之士ハ高拾式石五斗以上ハ、陣中三拾日迄ノ飯米ハ、糲ニテ家毎ニカコヒヲキタリ、

一 田老町高式拾五斛ニ付、家来扈人宛是定數ノ法、是ヨリ多ハクルシカラス、家之子郎従也、

口伝

前二解スル如ク高式拾五石ニ附キ、戰場ニ召連ル健力成家来扈人ツ、ヲ扶持スル定法高ノ賦ヨリ、家来人數多ク扶持スル事ハ不苦、仮令無高ノ士ニテモ、家来ヲ自分物入ニテ召連ル事ハ御免ナリ、若高ノ賦ニ応スル人數之家来、戦用ニ立者ヲ平日ヨリ扶持セサル士ハ、持高所帯没収罰ニ処セラル、御法也、

光久主御代ノ比迄、無高ノ士之中ニ高持士ヨリ富家アリ、其故ハ薩州古来ヨリ士之高知行ハ、戦功忠功ニ依テ上ヨリノ拝領ヨリ外ニ求ル事アタハス、今時ノ様ニ自分ハカラヒニ他ノ高ヲ買取、或ハ内々ニテ納米ヲ質物ニ取り、或ハ内々ニテ士以下ノ者、士ノ高ヲ買取、其高主ノ名代ニ立士、イツレモ其高所帯ヲ上ニ御取上、流罪ニ処セラレ、又ハ持高ヲ不売テハ不叶程ニ困窮之士訴出レハ、訳ニ依テハ御救助ヲ被下、又ハ高ハ上ニ御取入ニテ、其高之代銀ヲ給ル御法ナリシ故ニ、士ノ高領地屋敷ヲ私ニ扱ヒ商買スル事能ハス、無高小高之士金銀億万アリトモ戦功忠功ナケレハ、何程之金銀ヲ上ニ差上タル功クラヒノ事ニテハ、高ヲ買取事成ラス、高三百石之軍役ヲ勤ル小番家ノ士ヲ諸人ウラヤメリ、其父祖戦忠ノ功ニ依テ拝領シタル故也、吉貴主御代ヨリ今ニ至リ、或ハ公府ノ財ヲヌスミ、或ハ役權ヲ以テ下民ノ財ヲカスメ奪フ、自得アル御奉公ヲ願ヒ得、士ノ成スマシキ仕様交易ヲ巧ミ、私欲ヲ恣ニシ金銀ヲ設ケルモノ、或ハ士ノ材能モナキ他国ノ新参抱、或ハ町人凡下ヨリ経アカリタル者、金銀ヲ出シテ高ヲ多ク内々ニテ買集、上役ニ取入、色々ノ方便ヲ以テ自分ニ

名前ノ高二直シ、百石三百石以上ノ下士歴々タル上士
騎馬格ニナル者歳々ニ多シ(嘉永元年祿高改正ノ条参照、
事實知ルニ足ル)、太平ノ世ニテハ家屋ヲ高クシ、出入
ニ肩衣ノ角ヲ正クケツカウ美麗ナレトモ、一旦乱ニ交
スル時ニ至リ、右之様成高持上士ヲ頭ニ成シ、御譜代
旧恩ノ士時ノ奸倭ニ限無ク、貧窮成人其下ニ從服シ、
古代ノ士ノ如ク一命ヲ的ニナシ、鳥銃ニ向ヒ戦忠ヲ勵
ムヘシト思ヘル哉、是ヲ思ハサル在職ノ人ハ、目ノ下
ニ君家危亡スル事ヲ不思人也、諸士ノ中先祖戦忠忠勤
ノ功ニ依テ賜リタル高知行ハ各別、其外御先代ノ御法
ヲ背キ、金銀ヲ以私ニ買集、今迄長ク驕佚ヲ自俣ニシ
タル持高ヲ悉ク上ニ取上ケ、功勞忠勤アル士ニ分賜、
古之政法ニ立返ラスシテハ、後世乱起ル時國家ハ他之
利得トナル事疑ナシ、

一少高・無高ノ士、平等ニ高百石宛之物成ヲ渡ス新法之
軍役ハ各別ナリ、

中納言家久主御代天下一統治世ノ初、諸大名江府ノ在
勤ハ乱世ノ在陣ノ如クナル故ニ、薩州ノ諸士江戸ニ在
勤スルニハ、摸合方相中米ノ軍賦ヲ出シ、江戸詰ノ士
ニハ平等ニ老人前高斛(高)ノ物成三拾石余ヲ渡シ、現人數

上下三人ツ、ノ賦ヲ以、其上賦カサミノ人迄モ、賦銀
飯米ヲ高持士相中之出来、摸合方ヨリ軍役同前ニ出ス
法ニ、治世ノ法ヲ定メタリ、此法ヲ出軍之法ニ用ヒテ
ハ、在陣中ノ兵糧不足シ、兵糧ハ御物方ヨリ出サスシ
テ不叶故、前条ニ出セル持高割之軍役トハ各別ナルヲ
知ルヘシ、諸士高持出米之内ヲ以テ、相中ヨリ賦銀扶
持米ヲ渡ス、江戸詰或ハ相中使ヒ其外ノ奉公ハ、御物
方ノ御蔵米ニカ、ル事ニ非ス、上ヨリ増減差引ニ不及
古法成、然ニ是ヲ引ノソキ、諸士ノ食禄ヲ奪取、饑寒ニ
苦ム故、倭約ノ吟味ハ言語道断成事也、御先代御政
法ヲ定メ被置タル本ヲ知ル人ニテモアラハ、外ニ諸士
ノ食ヲ奪ヒ取ラスシテ、財ヲ生スル倭約ノ仕方ハ余多
アルヘシ、吉貴主御代江戸外方町家ノ産名越氏・河
野氏、大坂ノ輕キ中衆タリシ近藤氏御近習御側役以上
御家老ニ至テ、重役ヲ勤タルヲ初トシテ、今ニ至テモ
追々御側ニテ、他国卑賤成故、御当国(入ヲ在任ワル脱カ)御先代手厚御
政法成事ヲ知ラルヘキ様ナク、諸士ノ持高モ摸合軍賦
出米無キ他國士ノ持高ト同前也ト誤リ、メツタニ取上
ケ食ヲ奪フ手段ヲ上策ト吟味ス、御譜代歴々之衆、其
同役ナレトモ、時ノ權勢ニ恐レ同意アル故、諸士之摸

合米モ御物方蔵米モ差別ナク、上ニ取アクル事ニ成、御儉約ノ令出テ乞食ニモ劣ル饑寒ニ窮スル士益々多クマスナリ、

一高式拾五石アタリ前銘々持出ル軍役用具サタメノ事、

一手カフシ高三尺
廣三尺五寸

一六尺立木一本、

一モツコモツコ

一繩モツコ巻房、

一鍬・斧・鎌・鋸・ナタ各一挺宛、

口伝

式拾五石取ノ士ヨリ以上、軍陣ニ持出ル用具ノ定アリ、式拾五石ノアタリ前銘々持出ル、五拾石取ノ士ハ式拾五石アタリマヘ式ツ分也、一ニ手越一ツ、手コウシハ大砲玉薬箱其外椅子何ニテモ重キモノヲ載セ、夫兩人ニテカツキ持用ナリ、味方手負人ヲ乗ルニモ用ル也、二ニ六尺立木一本ツ、ユス、カシ(柞木)・椿杯ノ堅木ニテ作ル物ヲ(花ない棒)ニフ(花ない棒)授首ニ用ルハ勿論、俄ニ柱桁成シテ雨紙ヲ蓋ヒ雨防キヲカマヘ、或ハ(櫓)小屋ヲ掛ルニ、用所ニ依リ近辺ニ伐取、竹木ナキ処ニテハ利用多シ、薩州乱世ノ俗語ニ、手火矢ニハ(鉄砲ノ事)棒一本ト云テ、鉄砲持

ニハ棒ヲ添ヘタリトモ、御関狩ニ外城ノ百姓銘々棒ヲ突ハ此遺風ナリ、所ニ依リテ同伍之六尺棒ヲ埒ノヤウニ結ヒ、ソレニ鉄砲ヲ載セカケ、鉄砲ヲ打出ス事アリ(當時ノ砲術之ヲ以テ知ルヘシ)朝鮮新塞ニテ土手ヲ乗越ントスル敵ヲ、諸士大小鉄砲ヲ込メカケ、透間ナク打出シタル故ニ、十月ノ寒天ナレトモ、後ニハ鉄砲アツク焼ケ手ニ握リ難ク成リタリ、此時樺山久高・伊集院抱節ノ軍士ハ初ヨリ土手ノ上ニ棒ヲ立、横棒ヲ渡シ、ソレニ鉄砲ノ筒先キヲノセ掛ケ打出シタル故、鉄砲焼テモ滞リ無カリシト、古人ノ覚日記ニ見ヘタリ、三ツニモツコ一宛、モツコハ今ノ土石杯ヲ持出ス手アラキモツコニハ非ス、田舎百姓家ニテ言フモツコ、カマケ(カマス)ノ事也、イ・ムシロナトニテ編タル俵カマケ也、薩州乱世ノ古ニハ甲冑箱(カマケ)荷ノ弁当箱モ無ク、諸士何レモ着替ノ衣類何カノ用品モツコ・カマケニ入ル事少ク、手輕ク荷作人夫ニ持タセ馬ニ附タリ、其外ニ手マハリ小品物中昼飯ノタクヒハ、腰カ、リニ入レ、銘々ノ腰ニ附ル法ナリ、今ノ手當下帶手掛迄モ斤目ヲ定メ、将与頭ト諸士トノ諸用具ノ多少ヲシラヘ、足輕家来末々ノ者ハ、寒中ニ着替ノ衣服モ持タスルツモリナク、煩

(些) 細

ハシキサ、ヒニテ、用立サル事ハ古代ニ噂沙汰モナシ、四ツニ繩一房、久キ陣營ニテハ、此繩ハカリニテハ用ヲ達セス、草鞋別テ事欠成故、古代ノ士ハ自身ニ繩ヲナヒ草鞋ヲ作り習フヲ、武道業ノ様ニ教タリト先祖語レリ、五ニ鎌・斧・ナタ・鍬・鋸一挺ツ、也、軍役ニ持越用具此五通り、又陣中三拾日自飯米ノ事ヲ法定メ備レリ、其金錢ノ事ナキハ乱世ノ事実也、今時ノ士ハ治世ニ初ル他国浪人ノ軍学ヲ習来リ、陣場ニテモ好ニマカセ買取ル故、錢金ヲ重シタクハヘサル人ハ、軍ニ立カタシト言ヘルハ以テノ外成チカヒ也、

一出軍議定、

〔此部ニハ薩州ヨリ何方ニテモ、俄ニ軍ヲ押出校計ヲ無事成平日議定スル事ヲ出セリ、

一 毎年正月始、於御館其年中何方ニテモ、御出軍ノ御人数賦帳并諸所境目ノ仕置手配吟味ヲ議定シ、書キ記シ諸頭ニ渡ス、是狩相談ト号ル例式有リ、如是ナル故不時急ニ御出軍アル前ニ差カ、リ、内試シ内談ニ不及也、口伝多シ、

島津家薩州ノ古法ハ、治世ニモ乱世ニモ何事モナキ時ヨリ隣境諸国ニ忍ヒ、聞取ト号ル生間(間諜ノ一名)ヲ出入往来サセ、

国々ノ内情ヲ聞届、毎年ノ正月始ニ狩相談ノ例式アリテ、太守君ノ前ニ智計有ル地頭・領主・老中会合セシメ、何方ニモ俄ニ軍ヲ出ス手配ヲ議定シ、人数賦帳ヲ書改メヲク常式ナリシ故、其年中何方ニテモ隣国敵方ノ變俄ニ到来スルニ因リ、急速ニ軍ヲ出スニ時日ヲ不移、遲滞ナク軍ヲ出シ、出軍ノ前ニ差懸内ナラシ内談スルニ及ハス、狩相談ノ常式実ニ孫子始計篇廟算ノ本意ニ叶ヒタル良制也、今御国ニテ甲州流ヲ尊信スル輩、甲州流軍法ノ卷信玄出陣前ニ差カ、ル内試、敵国ノ絵図ヲ求テ地形ノ事ヲ内談シ、敵ノ人数賦強キ弱キヲ吟味内談ヲ出陣前ニ差懸内試スルト教、古ノ良將俄ナル敵家ノ變動ニ応シ、軍ヲ出スハ時日ヲ移サス、速ニ出テ勝ヲ制スル事ナレハ、出陣前ニ及ヒ内試シ内談ヲナシ、ヒマ取リタル事ニハ非ラス、然ルニ信玄出軍前ニ三ヶ条内試ニテ、出陣スル前ニ差掛リ絵図ヲ新ニ求め、地形ヲ論シ、此時ニ敵ノ人数ヲ賦リ、強弱ヲ内談スル隙取アル事ヲ教ルハ、敵何迄モ待合スルモノ也トスル治世ノ愚案ニテ、出軍前急ク問ニ合サル事ヲ弁ヘ知ラサルハ、乱世出陣ノ形勢ヲ思ヒ計ラサル也、又出陣前ニ味方ノ将卒ニ逆心不忠ナスマシキ趣ヲ誓約血判サセ、

其誓約書ヲツカネテ、大旗ノ蟬口ニ結ヒ附レハ、将卒日々大旗ヲノソミ見ル毎ニ、誓約ノ事ヲ思ヒ出スニヨリ、逆心不忠者無シト云ヘリ、是程人情ニウトキ馬鹿正直ナル事ナシ、常ニ心服セス不忠歷々ヲ始將士多ク逃散リ、敵之織田長信・徳川康家家ニ屈服シタルヲ以証トスヘシ、薩州ニ於テハイマタ一枚ノ誓詞血判ヲ書タル事ナケレトモ、諸士ノ先祖賞祿ヲ取ラス、毎度出軍ニ戰死力ヲ尽シタリ、今其子孫トシテ 御先君ノ軍制ヲ沙汰スル事ナシ、ハルカニ劣リテ愚ナル甲州流ノ軍法ノ巻ヲ学ハ、何タル忠成ヤ知ラス、

一 毎年正月吉日良辰ヲ選ヒ、五社宗廟御參詣・御出軍首途之御儀式ナル故、其年中不時急速ニ御出軍之時日取方取ニ不及、御役者虎之巻練様、

口伝

虎之巻日取之書ニ通り有、一 通り世ニアマネク流布スルハ、大雑書万年曆ニ書タルト同シ者也、又一 通りハ六韜ノ六ニ出タル凶ニテ、源義経ノ伝也トス、島津家兵道ノ正伝ニ虎ノ巻ト号ル書ハ無キ物ニテ、乱世ノ時御役者ヨリ外ノ人ニハ、一切見セサル秘書ナリト言ヘリ、俄ニ出軍アル時世上ニアル曆、又ハ雑書ニテ見合ハス

レハ悪方ニテ、ナマ物知りノ愚人共氣カラ疑惑スルニ、御役者ヨリ虎ノ巻大吉日也ト申渡セハ、愚成士卒疑ヒアヤフム事ナシ、

一 太守君鹿児島市福昌寺ヨリ直ニ御出馬、例式御出馬早鐘之事、

口伝

乱世 太守君鹿府ヨリ何方ニモ御出馬有ル日ハ、惣御供揃ニテ、福昌寺御廟所ニ御參詣有リ、客殿ニテ和尙ト御問答有テ、直ニ其ヨリ御出馬アル事御旧制也、

龍伯主 家久主御代ニハ、御出馬ノ日早く、鹿児島市南林寺御仏殿ニ御參詣アリ、直ニ軍ヲ出シ給フ、御馬ニテモ御駕ニテモ、寺門ニ入ル時寺ノ大鐘ヲ打ハシメ、寺ヲ御出アル迄ノ間早鐘ヲ打ツ、ク事例式ナリ、シハラク寺ニ御座有内、鹿府御供ノ諸士何レモ寺外前ノ松原ニ並居ル、此時親族朋友モ来リ、最後ノ暇乞ヲナシ、互ニ涙ヲ流シテ別レタリ、御軍ヲ出シ給フ時ナラテハ、南林寺ノ鐘ヲ御出シカネト云ヒナラハセリ、其以後昼申ノ刻ト酉ノ刻トノ間、夜ノ寅ノ刻スキ時ハツレニ南林寺ノ鐘ヲ打事ニ成リタルヲ、今ニ追ヒ出シノ化言ナン出シ鐘ト云フト古老ノ物語也、追ヒ込メノ化言ナンタシ鐘ヲツコンナト、誤リ云フニ附キ、色々ノ雑説アレトモタシカナラス朝夕ノ動行為

メニ鳴ラセリ)

(宮崎縣)

一耳川合戦之前飛脚来ル、其翌日 太守義久主鹿府御発駕有、其外九州御出馬何時モ物早キ御手配、

口伝

天正六年十月廿日、大友六ヶ国ノ大軍、我日州高城ノ所領トナレリ城下ニ攻入ル事ヲ、同十月廿四日鹿兒島ニ飛脚来着シテ言上ス、翌廿五日 太守義久公鹿府御出馬有之、同

(宮崎縣)

十一月朔日佐土原ニ御着也、其後肥後表豊後府内表杯

ニ御出馬有シ時モ甚タ物早カリシ、其手配ハカヤウナル急変ノ時、早ク主将先ニ出馬ナクシテハ万事滞ルモノ成故ニ、何かサシヲキ平生ツネノ御衣帶、常ノ御供

廻り人数計リニテ、早々御府城ヲ御發駕アリ、仮令ハ伊集院筋ナレハ先触ヲ聞ト、則中途ニ伊集院士衆中罷

(日置郡)

出供奉仕ル、先々ノ外城ニモ送り継ニ、如是中途御止宿ハ道筋近キ寺院、又ハ地頭仮屋、御供人数モ其所ノ

者共ヨリ朝夕ヲ賄フ、跡ヨリ追々ニ御手廻リ御用具ヲ持来リ追付奉リ、先ニ御着アル間ニハ、御手廻御備手

配嚴重成故、中途ノ用心行列次第モ入用ナキ故ナリ、今ノ手當帳ニ定マリタル如ク、鹿府ニテ人馬ヲ集メ、

五段備ヲ飾リ揃へ、小荷駄備迄モ調へ押出事ニセハ、

義久主御代ノ如ク、乱世ニテモ三四日ノ間ニハ、御出馬全ク調ヘカラス、

一諸所境目旗揃會軍場、地頭將軍議約束申合セノ事、

口伝

仮令ハ肥後表ニ出軍アルヘキ議定ノ時ハ、出水ノ内何レノ処ニテモ會軍旗揃ノ場ニ定ム、隆信合戦ノ時出水

(龍津寺)

米之津ニテ合スル旗カ式拾四本ト云ヘルハ、諸外城地頭大將式拾四人會合シタル事也、諸外城中途道ノ遠近

ニ依テ其外城ヲ出立、日限ヲチカヘ、何方モ同日ニ旗揃場ニ會合アルヘキ法ヲ申渡シ、會合シタル日、諸外

城地頭領主ノ諸將申合セ議定スル第一ハ、仮令肥後ニテモ、肥前ニテモ方々ニ手配シテ押入タル時、誰ニテ

モ先ニ早ク入タル軍將アリ、差置敵之大切ニタノム本城ヲ焼クカ、兵糧蔵ヲ奪取ルカ、何レニテモ敵ノ本頼

ム処ヲ奪フ手段ヲ平ニ議定スル事、島津家ノ軍議肝要トスル也、

一遠郷外城ニ急変起リタル時、御府城ヨリ人数繰出ニ及ハサル武備付地頭御仮屋・寺社方奉行手配常定之事、

口伝

前ニモ御領國中郷毎ニ一城ツ、ヲ定メ、外城・私領ト

号ケ、地頭士衆中居住スル事ヲ解セリ、然ハ何方ノ外城ニテモ敵攻入、或ハ一揆ノアツマリ急変起ル時ハ、地頭其所ノ士衆ヲ下知シテ是ヲ防キ、若其一外城計ニテハ手ニ余ル時ハ、其近隣ノ外城二三ヶ所モ援兵後詰ヲナシテ防守、或ハ鹿府ヨリハ御使番衆・横目衆ヲ二人モ其外城ニ遣ス迄ニテ、防守スル士ヲ鹿府ヨリ出シ遣ハス事ナシ、諸外城ノ海辺浦々ノ締り賊船ノ防守モ、専ラソノ外城地頭ノ差別宰ル所ナレトモ、分テ念ヲ入レ浦々ニ御飯屋ヲ役所ニシテ、地頭ノ相談役軍船防守ノ手配ヲ宰ル、今ノ船奉行ノ格成士、御飯屋守リト号テ飯屋内ニ居住セシム、龍伯主 惟新主御代、(保徳郡)山川御飯屋守ハ野間口彦右衛門、坊津御飯屋守ハ山崎土佐、泊浦御飯屋守ハ山下志摩、久志(川辺郡)ハ右岡本茂右衛門、秋目ハ邊牟木勝兵衛、加世田片浦宮原典兵衛、其外根占・佐多・市來・串木野・向田(川内市)・京泊諸所ノ浦々御飯屋ニ地頭、浦方ノ相談役船奉行ノ御飯屋守土居住シ、其浦々ノ軍船支配、或ハ異賊船ノ防方手配ヲ平日ニ宰ル故、仮令異賊船入来シテモ、急変ノ間ニ合サル遠路ノ鹿府ニ注進シ、下知ヲ請、又鹿府ヨリ来ル防方備人数ヲ待ニ及ハス、此古法再興セサル時ハ、異賊

船入来ノ時、其浦ノ役人共カネテ手配ナキ故、防守ウロタヘ廻リ、鹿府ニ告越サントスル間、賊船陸ニ附ケ入り、民家財用ヲ残リナク奪取ルカ、少シサハリ防カントセハ、火炮ヲ発シ、人民家屋共ニ焼跡ノ灰燼ニ化スル事疑ナシ、右ニ云フ如ク、三州ノ内ハ一郷一外城ツ、ニ、地頭ニ任シ居住サセ置古代ノ法制ニアラスシテハ、不慮急変ニ応スル手当手配ハ曾テ調サル事也、龍伯主ノ御自身直ニ御出馬、又ハ御舍弟御名代ニテ鹿府ノ諸士ヲ従ヘ、御旗本備ヲ押出シ給フハ、大友カ大軍ニテ高城(高島郡)ニ入来ル時、其外ハ肥後・筑前・筑後・豊後府内杯ニ出軍御発向有シニ限タル事也、然ニ今ノ手当御領内ノ浦ニ賊船入来ル時、其外城ヲ預ケ置ル地頭ニ命シ任セス、鹿府周章騒キ、御名代ヲモ勤ヘキ御家老或ハ御用人、賊船碇ヲ卸スヤ否ヤノ見合ニイソキ行キ、其跡ヨリ鹿府ニテ飾リ揃ヘ、五段備ヲ出シ遣ハスハ、急変ノ間ニ合サル煩敷手当ヲ帳面迄ニ書記シタルハ、治世ノ他国浪人、他国ノ小身、新家大名ノ領内外城ニ士ヲ土着スル事ナク、城下ハカリニ嫡子ノミ僅ニ人数ヲ居住サスル故ニ、遠近ノ郷々何事ニテモ急変起ル時、其間ニ合ハサル事ハ差知レタル共、国王領主役

〔防方ノ人数ヲ城下ヨリ出シ遣ハス事ニシタル、武備ナキ弊脱カ〕
ナレハ、風ニ因リ実事ノ用不立、埒モナキ事ヲ教ニ設

ケタル甲州新流ノ伝書ニ引合セ、御旧制ヲ破リ曲ケ附
ケントシタルモノナル故ニ、全体三州乱世 先君ノ実

事ニ、幾度モ御試ミ定置玉ヒタル軍制手配トハ相違シ
タル也、此誤ヲ糺シ知ルハ、〔徳田小藤次眞興孫欲軒ト号ス、孫子ヲ
尊號スルニ擬レリト云フ〕 巖興ヨリ始ル也、

一 御旗本行列、

此部ニハ 太守君ノ御旗本備行列ノ次第ヲ、御人数賦
帳或ハ御舊記ニ因テ書記ス也、

一 一番昇五拾六本夫持、昇奉行式人幸之、

是ハ、前ノ条ニ解スル町人ヲ役シテサ、スル昇旗也、
慶長十八年御人数賦帳ニ五拾六本トアル故ニ、書シ時

所ニ因リテ数増減アル事勿論ナレハ、必ス五拾六本ヲ
定数也トカ、ハリ泥ムヘカラス、

一 二番時雨之御旗・十文字御紋之御旗、御道具持衆持之
御兵具奉行之内御旗奉行附之、

口伝

前条旗ノ所ニ解スル故ニ、爰ニ二重ニ解セサル也、

一 三番御鉄砲三百挺拾文目以上、御道具持衆持ノ御鉄砲奉行六
人幸之、

是ハ御道具持衆ニ持タスル御鉄砲ナリ、拾文目以上ハ

惟新主御代ニ、戰場ニ用ヒタル古鉄砲、稀ニ今世ニ残
ルハ多クハ十文目玉也、間ニ五六文目以上ノ古鉄砲、

短クシ切ラス、其俛ニテ残リタルハ筒長キ三尺余ナレ

ハ、玉ノ届クイキヲヒ、短キ十文目玉ノ鉄砲ニサマテ
劣ルコトナシ、今時治世ノ軍役鉄砲四匁玉式尺五寸ノ
〔甲州流ヲ用ルニ至リテ一定セリ〕

鳥銃ハ、薩州先代ノ乱世ニ戰場ニ用タル人アリヤ、実

イマタ知ラス、御鉄砲奉行六人ト有ハ、御道具持衆五
拾人・鉄砲五拾挺ヲ宰ル奉行一人宛也、慶長十八年御

人数賦帳ニ御鉄砲ハ三百挺、御弓ハ式百張、御槍ハ式
百本ト書記シ、弓鎗ヨリ鉄砲ハ百挺多ク三百挺ナリ、

是ニテ 惟新主御代ノ御軍賦ハ鉄砲多ク專ニ用ヒ、弓
槍ハ少シ其次ナリシ証拠ヲ知ルヘシ、甲州新流ヲ本ニ

スル今手当備ノ法、仮令ハ拾五騎備ナレハ、足軽四匁鉄
砲拾五挺、 惟新主御軍賦ニテハ鉄砲ヨリ数少シ、弓

ハ鳥銃ト同数ノ拾五張、騎馬士ノ持槍ハ拾五本、長柄
ノ槍ハ拾五本也、持槍ト長柄ノ槍名号異ナレトモ同槍

ナル故、合テ鎗三拾本足軽鳥銃拾五挺ナレハ、今ノ手
当ノ法ハ槍ヲ多ク專ニ用ヒ、鳥銃ヲ数少ク其次トスル

事明也、然レハ 惟新主ノ鳥銃ヲ多ク專ニ用給フ御軍
賦トハ、備ノ手与戦法戦術ノ旨趣大ニ相違ス、此比之

治世ニ異国方手当ヲ初タル輩、惟新主ノ処々ノ戦ニ、幾度モ其実効ヲ御試アリシ鉄砲ヲ、多ク專ニ用給フ御軍制ヲ破リ捨、イマタ実ヲ試サル槍ヲ多ク專ニスル手組ノ法ニ、薩州ノ手当ヲ改カヘタリ甚タ心得カタシ、一四番御弓弍百張、御道具持衆持ノ御弓奉行三人分宰之、一五番御槍弍百本、御道具持衆持ノ御槍奉行三人分宰之、弓ニモ鏑ニモ奉行三人宛アルハ、御道具持衆六拾七人ニ奉行一人宛附ク法也、弓槍同数弍百人ナルハ、弓ハ槍・薙刀ノ殺手ニ交ヘ戦ニ用サレハ、利用ナキト定ル法ニカノウ也、甲州流ニテ、町ヲ越シテ玉ノ届ク利用アル鉄砲ニ、近習ノミニ利用アル弓ヲ交、或ハ同数槍弓ヲ用ルハ、実術之功ヲ試サル治世ノ妄制ナリ、故是ニカハリタル天正八年ノ舊記ニハ、御道具持衆鳥銃・弓・鏑何レモ百人ニテ持、百挺・百張・百本ト書キ記シタル、慶長十八年ノ御人數賦ニハ鳥銃ハ数多ク、倍加シテ三百挺ニ改メ易タルハ、年月ヲ重ネ歴ルニ随テ、合戦ノ利用多クナリ、弓槍ノ利用少ク劣ル故ニ略シタル活法也、

一六番土躍太鼓数挺并貝金御道具持衆持之、陸小姓衆宰也、

戰場ニ太鼓ヲ用ルハ、数挺キヒシク叩キ立、百千ニ及フ軍兵ニヒトシク勇勢鋭氣ヲ合ハセ、又奮発スルヲ第一ノ用トスル事、島津家之兵制也、

一七番鹿兒島并諸外城陸小姓衆合テ四百四拾七人、孰モ自身鉄砲ヲ携へ、手鋒・薙刀・野太刀・弓ヲ持タセ、太守君ノ前後左右ニ分ケ配リ御供也、

口伝

陸小姓ノ事前ニモ解ス、鹿兒島諸外城士ノ中ヨリ壯勇選ヒタル士共也、四百四拾七人ニ限ニハアラス、幾人ニテモアルヘシ、古代ノ明君良主ハ側廻外城ノ差別ナキ故、今ノ治世近習動ノ役ナリト分ルハ、名ヲ別ニ設ルニ不及、スヘテ陸小姓ノ中ニコモルト知ルヘシ、今ノ手當帳ニ此陸小姓ノ事見ヘス、近キ比ヨリ各別ニ分タル柔弱花奢ナル御側小姓ニ、近習廻之役々々而已治世ノ當時ノ如ク御側ニ附ルト定ムルハ、死生ヲ争フ戰場ニ押出ス御旗本備ハ、古ヨリ選ヒスクリタル勇強材能ノ士ヲマトメ揃ヘル事ヲ不知也、歩士物ナレタル定、御供・御馬廻リ・御駕籠廻リ・中通リ・御供目付ト云モ、元和年中ヨリコノカタ成リテ、治世參勤道中供廻リニ始リタル事ナリ、(兼也)惟新主御代ニハ、勇強選ヒタ

ル陸小姓衆ノ中ヨリ線マハシニ、御馬ノ前後ニモ、御駕ノ左右ニモ附タル故、物ナレタル定、御供ナク又御馬廻リ六人賦以上ノ士ニ限ルト云事モナシ、關ヶ原ヨリ御供シタル衆カマシキ三百石以上、今時ノ新番馬廻リ〔此四字本書誤写ナラン他日考正スヘシ〕格ノ士ハカリ御側ニ附タルニハ非ス、外城衆中加治木〔給長郡〕士迄混シ打込御供シタルヲ以テ証トスヘシ、古代ノ横目衆ハ御供計リヲ見ルニハ非ス、太守君ニ御直ニモ言上シタル故ニ、別ニ御側ニ中通リ御直ニ言上スル目附役合タル事ナシ、兵賦武備ヲ考ヘ定ルニハ常ト變リ、治世ト乱世トノ分ヲ弁別スルヲ第一トスヘシ、治世江戸參勤ノ行列并側廻リ・外様ヲ分ル仕向キ、治世ニテイツマテモ無事ニスムヘシ、敵ニ對シ一挙ニ死生存亡ヲ争ヒ決スル戰場ニ臨ム旗本備ニ、治世ノ仕向キヲ雜ヘ用ヒナハ、忽ニ敵ヨリ陣隊ヲ崩シ破ラレ、君主モ恐クハ死亡ニ至ルヘク、治世ノ常乱世ノ變トハ一切ノ仕向キ黑白ニカハル故ニ、日新主御代ノ如ク、御譜代ノ諸士ヲ近習・外様ノ隔ナク御仁愛アリテ、御手廻リ陸小姓打込ミ御濟セ、太主君モ御手足ノ勞ニカハリイタツラ者多ク、驕奢自慢ノ御行儀ヲ差止給ヒ、饑飽安佚ヲ士衆ト共ニ成シ給フ、乱世 先君ノ御仕向古風

ニ復スル御旗本備之古例ニ非サレハ、仮令異国方ノ府庫ニ手配五色ニ彩タル備ノ絵図、当驕奢ノ近習廻リヲ其尽ニ用ル手當帳ヲ納置タリトモ、後世ノ乱ニ旗本備ヲ押出ス用ニ不立、若治世ノ様ニ曲ヶ附ヶ用ルハ、国家危亡数月ヲ不可待、

一 八番真中一本杉御的居、御道具持衆持ノ陸小姓衆附之、次ニ御乘馬一疋〔御乗替ハ、次ニ置ク、〕御中間衆既奉行附之也、

是ハ本文之通り口伝ナシ、解ニ不及也、

一 九番左右式行二列御持筒鉄砲三挺并エビヲ御弓三張并ウツホ征矢、御手槍二本・御薙刀二振、都テ御道具持衆持之、

口伝

惟新主御持筒一挺ハ九字拾玖玉ノ御鉄砲・千鳥ノ御薙刀、〔えびの市〕木崎原合戦ニ御用ヒ有シ長七尺ノテンホコ・鏑、

焼失ナキ以前ノ凶形写アリ、此外之御道具ハ多ク焼失シタリ、今ノ對ノ道具ハ金紋ノ挾箱ハ乱世ニハナカリシ故、乱世ニハ入用ナシ、

一 拾番御乘馬之左右御太刀・武者杖・御軍笠、御後ニ御草鞋・床机・御吸筒・御中飯笠・雨具、都テ御道具持衆持之、御側廻リ陸小姓衆ノ中ヨリ勤之、

口伝

本文ノ如ク解ニ不及、陸小姓繰廻シ供奉スル事前ニ解セリ、

一拾壹番御用具并具足入長持、御中間御道具持衆宰領也、

口伝

惟新主朝鮮御在陣御衣服タクヒ入附ハ、大長持一竿ニテ済タリト古老ノ言伝アリ(簡易ナル是ヲ以テ知ルヘシ)、是ヲ推シテ其外ノ御用具荷物手輕ク少キ事ヲ知ルヘシ、今ノ手当ニ御褒美物長持ヲ持タセルト記ス、是ハ信玄軍場ニ金銀錢品物ヲ多ク長持ニ容レ、少ニテモ戰場ニテ働キタル者アルニ、旗本ニテ褒美ノ物ヲ取リタリト云フ事、甲州流ニ備ルニヨリタル事也、是ニテ信玄平日ニ士卒ヲ心服セシムル事アタハサル故、時々ニ賞物ヲ与ヘ悦ハセタルケイハクナルコトニテ、兵法ノ本道ヲ得サル浅キ事ヲ知ルヘシ、薩州古代ノ諸士ハ、朝鮮在陣中ニ戦功アリシ者ニ、帰国ノ時ニ恩賞ノ知行ヲ下サルヘキ御証文ヲ下シ被置タルニ、或時孰モ言合セ、御証文ヲ悉ク焼捨タル事アリ、何方ノ軍場ニテモ、心附ノ為ニ主君ヨリ褒美物ヲ賜リタル事ナケレトモ、諸士心服シタル故、戦ノ忠功ヲ尽シタレハ、薩州ヲ御

旗本備ニ、古ヨリ褒美アリシ事ナシ、信玄ハ如是浅ハ

カナル軍法成故、新羅三郎義光ヨリ式拾八代統キ来ル家ナレトモ、譜代恩顧ノ士臣ウラミ背キ、跡方モナク

滅亡シタリ、今其遺法ヲ学ブ甲州流新流ニ引合セテ、

御家運目出度島津家ノ手当ヲ改易スルハ、忠臣ニハ非

ス、

一拾貳番玉薬五万放シ(朝鮮持帰リノ火薬数函火薬庫ニ保存

セリ、殆ント三百年ヲ経過シタルモ成分異ナラス、精製ナル

ヲ知ルニ足レリ、廢藩後如何ナリシヤ)、入箱三拾荷・百

矢台持人夫、御道具衆附之玉薬渡奉行宰司ナリ、御人

數賦帳ニ玉薬五万放シトアレトモ、是ニ限ル事ニハ非

ス、鳥銃ニ応シテ不足ナキ程持タスヘシ、

一拾三番楯五拾持夫五拾人、高麗陣之特別ニ持具アリ、

口伝

持夫五拾人トアレハ、菅人持ノ持楯也、敵味方鳥銃ヲ

盛ニ用ル慶長コノ方ノ軍場ニテハ、時所ニヨリ土ヲ堀

リ起シ、楯ヲ双ル事アル故、持楯第一ノ軍器也、夫レ

故ニ高麗陣ノ時、榎山久高・伊集院久春ノ組大砲ヲ馬

ニ負ハセ、石火矢ヲ夫持ニシテ、楯ト一所ニ從ヘ行タ

ルコト有シト、故老吉田氏ノ覚書ニ見ヘタリ、

一十四番御使番衆・横目衆備并普請奉行・御免乗馬衆、
一列宛次第ヲ分ケ御供也、

口伝

馬ニ乗ル御役務ノ衆何レモ馬ニ乗リテモ、馬ヲ率カスルニテモ勝手次第、一列ツ、引分レ一同ニ御供也、御免乗馬衆ニハ、古代高何百石ハ馬ニ乗ルヘシト云、知行割ノ定ニハ非ス、馬術ヲ心得タル士、仮令小高二テモ、自分物入ヲ以自馬ヲヒカセ、中間口取ヲ召ツレル事ヲ願出、御免ヲ蒙リタル士也、他国ノ格トハチカウナリ、

一十五番御台所頭代官并附衆用具、

口伝

附衆ハ御舊記ニ、附衆三拾五人ノ内庖丁役三人・小番六人・火タキ九人・御食タキ式人・万小使小番・御中間拾五人此類ナリ、

陣取、此部ニハ他所ニ押出シ、
時ノコトヲ出セル也、
地ノコトヲ出セル也、
(橋) タ
スル
(橋) タ
スル

(島津家御旧制軍法巻抄(東京大学所蔵)にて校訂)

四九一 幸村以呂波軍歌

い 徒の芸能をせず大将ハ孫武の道を学ひ知るべし
ろ 道理あり止事を得ぬ軍こそ必ず勝て末遂るなり
は 初めより終る時迄戦ひハ只鉄砲のわさに決せよ
に 西を攻め東を襲ふ智謀より先つ正兵の実を備へよ
ほ 方円に従ふ水の形をハ軍の道の全体と知れ
へ 隔たる方より越して敵の横後陣をくづす火器を用ゑ
よ カ
と 遠きより近く進みて打をこそ騎馬鉄砲の業と定むれ
ち 近々と敵をうけてぞ城内にふくむいきをの当り強よ
けれ
り 竜田備その源ハ千早振神よりをこる八雲八重かき
ぬ ぬけかけのありて備の乱るゝハ武士を伍法に組ぬ故
なり
る 類を出衆にすくるゝ働きハ間者毛附に戦死少かるべ
し
を 教へこみ鍛錬させて置くべきハ鉄砲のわさ七難の術
か かけてまづをりしく間にハ必ずも兵氣養ふわさを設
けよ
よ 寄せて又寄らるゝべき方便ある攻る守るともに一法
た 大小の鉄砲火器を一隊にそなへて之を遊軍とせよ

れきぜんと見へし備の形ちより内の虚実を計しるべし
そそれくりに利方ハあれと武芸にハマツ鉄砲を最上とせよ
つ拙くもはやく勝をバ決すべし久しきたるみわさハいのもと
ね狙ひ打的となるへき味方にハ旗さし物を多くもちゆな
な名をも捨罪もいとハず一筋に君を助け民を憐れめら
ら乱軍になりたる時も鉄砲に葉をもたすることそ肝要む
無法なる賞を施すことそ只兵を進るときの権謀
う後ろより遠くこす矢にいためるハ小荷駄遊軍將の旗本
る勢いのハづミぬげずハ自ら節ハミしかくつまる物なり
の遁れざる死地にせまれハ大将の下知に士卒ハつく物としれ
お恩と信仁を加へて使ひなハ士卒ハ恥を知りていさまし
く繰進ミ又ひき分る間配ハマツ鉄砲のまかせをくべし

や 鎧合につまるたよりを打挫く業にそなふる要の転法
ま 待事も地形と時に敷衍なれと掛て先を奪ふこそよき
け 形勢を我ものにせは自ら勝べき業ハ敵にいでなん
ふ 伏せかくす間火矢の術と薩武者ハ無ていくさに用ると知れ
こ 腰さしハせこ持卒のしるしにて急なる時の用をかぬべし
え 益もなき軍配やふる大将ハかゝハるよりも愚かなりけり
て 敵附を不堅固にして置にこそ奇手をころす助けとななる
あ 足なみの静にそろひうつむきてじぐらにかゝる敵ハ実なり
さ 騒き立つ場所を静に大将ハ勇威きひしく采配をせよ
き 奇と正の形ちになつみ巧みなハ軍を乱して勝を引べし
ゆ 弓と鎗ひとつにましへ組でこそ互に業の利をハ助けん
め 名將の用ひをきたる軍術もあとになづまハ死法なるべし

み 見切をハ早く決してもの前ハ詞すくなく下知を定め

よ

し 城かまへ地形横矢取んより火器大小のくばりよくせ

よ

ゑ 鋭氣をハ打挫きたる跡たへす附鉄砲のつかひハなす

な

ひ 火器火攻機節をしらす用ひなハ己れが勝を敵にあた

へぬ

も 素よりの形ちなければ備組時所に応して転用をせよ

せ 正兵の無にひとしく当りてぞ敵の不意なる所いつべ

し

す 住わぶる世をもいとハず存生へてふたゝび君が御代

を仰かん

第一手当謀計、第二備ノ立様、三ニ見切、

右四十七首請観密法印之添削而改正之、

慶長十四己酉七月晦日於高野山記之、
(和歌山県)

真田左衛門佐幸村

寛永十二年丙子十二月(乙亥)從西村宗意翁於肥前島原伝之、

山 本 兵 部

寛文五年乙巳正月七日於京都伝之、

木村 俊 齋

貞享元年甲子霜月日伝之、

和 田 元 真

元禄十五年壬子十月日於江戸伝之、
(七)

須 藤 一 柳 子

寶曆十一年辛巳正月日伝之、

徳 田 興
(トマ)

右一卷ハ島津久光ヨリ致借用写置也、

町 田 平

徳田ハ常ニ朝夕暗誦セリト云故ニ掲載ス、

以上鈔記ハ島津家軍賦ノ要略ニシテ、大凡這要領ヲ採り改革シ

タル者ナリ、担当調査シタルハ、御軍役奉行新納(久徳)・御軍賦

役伊地知(正徳)・右衛門等カ御家流(一名合伝流トモ唱フ、島津家固

有ノ流ト其他諸流ノ宜キヲ採リタルニ因リ合伝ト通唱ス)ヲ基

礎トシ、加フルニ大砲ノ如キハ洋式ヲ参用シ組織シタルモノナ

リ(嘉永元年ノ改革モ稍同一ノ組織ナリシカトモ、御家流及ヒ

甲州流ヲ斟酌シテ、而シテ大小砲器ハ洋式ヲ用ヒタリシニ、齊

彬公ハ西洋近世実地經驗改良ノ式ニ則ラレ、銃隊ノ編伍進退運

動ノ法全ク洋式ヲ採用セラレタリ)、然ル亦旧制ニ復シ、洋式

ノ変伍ヲ廢シタリ、之ヲ嘉永元年以來僅々四五年ノ間ニ、二三

回變更ノ歴史トス、中ニモ小銃ノ如キハ、嘉永改革ニハ洋式ノ

新製備具セサリシ故、古式ノ火繩銃ヲ用ヒ、ナポレヲン式燧石機銃ヲ參用シ、弓槍ヲ交ヘ用ヒタリシカ、斉彬公嘉永五六年ノ改正ニハ、「ミニヘル」及ヒ雷管機ケベール銃ヲ用ヒ玉ヒ、大砲ノ如キハ山野砲ノ二種砲台ニハ、大口徑ノ新式ヲ用ラレタリ、然ルニ近代攘夷説、全国一般旺盛軍制銃砲ノ如キモ、随テ蕃夷ノ器ナリト唱ヘ、擯斥スルノ風潮ニ變シ、古式ノ荻野・天山等ノ諸流ヲ用フルニ至レリ、之レ本藩ノミナラス、全国各藩僉ナ同シキ風潮トハナレリ（幕府ハ依然洋式ヲ用ヒタリ）而シテ御家流ノ軍制ヲ以テ実場ニ当リタルハ、文久三年七月前浜ニ英國艦隊襲來ノ時、陸軍ハ這ノ制式ヲ以テ陸地ニ備ヘタリシニ、後実用ニ充ツヘカラサルヲ看破シ、斉彬公ノ編制セラレタル制式ニ復スルニ至レリ（這ノ戦ニハ陸戦ナク、艦隊ヲ洋中ニ撃退シタルニ止リタリ）砲台ハ全ク洋式ヲ用ヒタリ、則チ斉彬公建築セラレタルヲ變更セス、唯一部沖ノ小島ノ一所、荻野流ノ砲器ヲ備ヘタルノミナリキ、如此僅々五六年ノ間ニ二三回ノ變更アリシハ、全ク大勢ノ然ラシムルニ抛レルモノニシテ、世ノ風潮ノ奈何ンヲトスルニ足ラン（變更ノ詳細ハ各々其部ニ就テ并知スヘシ）

○島津家流一名合伝流ト專ラ唱ヘ、初メ熱心ノ人ニ之ヲ学ハシメタルハ、徳田（龜尾）小藤次ト云ル人ナリキ、其為人ハ一奇人ニシテ、幼年ヨリ御家流ヲ学ヒ、諸流ヲ大成シテ合伝流ト唱ヘタリ、基

ツク処ハ本記ノ如シ、而シテ專ラ孫子カ火攻編ヲ主張シ、之ニ近世大小銃砲ヲ交ヘ用フルヲ主論トス、著ス処ノ書類數百巻、則チ孫子之講説ヲ初メトシ、三略六韜ヲ講究シ、而シテ自ラ火巧之卷水乃形・島津家軍法之卷武経編等ノ數多ナリ、○徳田ト俱ニ学ヒタルハ數十名ノ多キニ及ヒタリト雖トモ、中ニ就テ名ノ顯レタルハ、川崎四郎左衛門・法元（マヅ）六左衛門・池田仲太郎何レモ荻野流ノ砲家ニシテ、桜井大五郎カ門ニ学ヒ、後チ合伝流ヲ斉彬公ニ授ケ奉リタリ、或ハ久保平内左衛門・菓丸長左衛門・阿多郷伊地知某等ヲ以テ著名ノ人トス、尋テ石沢六郎・藤島新之丞・新納・伊地知竜右衛門等ヲ以テ、第二流著名ノ人トス、○徳田ハ御家流ノ湮滅ヲ憂ヒ、甲州流ヲ痛撃罵詈スル酷シキカ如シト雖モ、其衷情ハ寔ニ好ミスヘキナリ、中古爾來御家流ノ尊、且ツ実場經驗ノ良法ヲ棄テ、虚飾ニ等シキ甲州流ヲ因備ニ採用シタルヲ慨シタルハ、理ナキニ非ラス、因ニ記ス、徳田ハ當時一奇人、或ハ狂人トモ唱ラレタリト、兵事ヲ談スルニハ狂人ノ如ク、他人ノ言ハ耳ニセス、全ク狂シタルカ如シト、七書ヲ暗記シ、門人等ニ講説スルニハ書ヲ置ス暗誦セリト云フ、甲州流ヲ罵詈痛撃シタルハ、御家流ヲ廢棄シタル憤慨ニ外ナシ、